

にこんな證據がどんなにつよくひびくか知つてゐます。澤山の結婚がそれではやめられ、固められ、立ち直されました。實際最善の希望と言へるかういふよい希望は千の言葉にもまさるものです。だが、かれはつづけた。「私について言へば、不機嫌になる理由がたとあるといへませうかね。この場合、私の自惚は満足できません。私の骨折はあなたがたに感謝される値打がないわけです。私には自分が、ただで貧乏人にしてやつた治療はみんな成功したのに、たとふと拂ひのできる金持は滅多に治せなかつたといふ友人の醫者に思はれます。幸ひここでは事件が獨りでに解決してゐるわけです。私の骨折や忠告は無駄だつたといふところでせうね。」

シャルロッテはかれに、この知らせをエドアルトに持つて行つて、手紙を一緒に携へ、どうしたらいいか立て直しかたを見てくれと頼んだ。かれは引き受けようとしなかつた。「もうみんな済みましたよ。」かれは叫んだ。「お書きになつたらいいでせう。誰を使ひにしたつて私とおなじです。私はもつと私が必要な方面へ出かけねばなりません。またお祝ひを言ひに参りませう。洗禮式に來ます。」

シャルロッテは、屢々さうであつたが、こんどもミトラに不満であつた。その性急な性質はいろんな善いこともたらしたが、急ぎすぎるためいろんな不成功も仕出かしてゐた。かれほどその場の偏見にたよるものはゐなかつた。

シャルロッテの使ひがエドアルトに來た。かれはなかば驚いて使ひを迎へた。この手紙が否と

も應とも決定できるのだつた。かれはながいことそれを聞く勇氣がなかつた。そして、手紙をよんで、どんなにびつくりして立上つたことであらう。次のやうな結びの文句では化石してしまつた。

——あなたがあなたの妻を冒險のやうに戀人のやうに訪れ、あらがひがたく引寄せ、戀人のやうに、花嫁のやうに腕にお抱きになつたあの夜をお憶ひ出して下さいませ。あの不思議な偶然の出來事に、私共の生活の幸福がばらばらになり消え失せやうとするとき、私共の關係の新しい結合をみそなはせた天の攝理を尊敬致さうではございませんか——

この瞬間からエドアルトの心に起つたことは述べるに困難であらう。さういふ窮境には古い習慣や趣味があらはれて、時間を殺し、空間を充たさうとするものである。狩獵と戦争がさういふ貴人にいつも用意されてゐる救ひである。エドアルトは心の平衡を保つために外的な危険をあこがれた。生存が耐へがなくなつてきて、滅亡をさへあこがれた。自分もはや存在せず、そのことによつて愛人や友人を幸福にすることができると思ふことは實際慰めであつた。かれは自分の決心を祕密にしたので、誰もその意志を妨げるものはなかつた。あらゆる方式をもつて、かれは遺言を書いた。オテリエに莊園を遺してやることのできるのは甘い感情であつた。シャルロッテや、生れてくる者や、大尉や召使のことも配慮した。再發した戦争がかれの計畫に好都合であつた。軍隊の中途半端な生活は青年時代のかれには至極煩はしいものであつた。そ



ワイマール遊園に於けるゲーテの園亭

のため、かれは軍務を退いたのであつた。が、いまや、かれには一人の將軍とともに出征することがすばらしいものと思へた。その將軍については、かれは心ひそかに、その指揮の下でなら恐らく戦死であり、勝利もまた確實であると言ふことができるのであつた。

オテイリエは、シャルロッテの祕密を知つたあとでは、エドアルト同様、否それ以上におどろき、打沈んで行つた。かの女はもう何も言ふことはなかつた。望むことはできず、願ふことは許されなかつた。かの女の内部への一瞥をその日記が我々にあたへてくれる。それを少し傳へようと思ふ。

第二部

## 第一章

普通の生活でよく、敘事詩で詩人の技巧と稱揚するならばしのことに出逢ふことがある。つまり、主人公たちが遠ざかり、隠れ、活動しなくなると、すぐ第二第三のこれ迄殆んど気づかなかつた人物が場所を塞いで、全力をあげて活動するために、同様の注目と共感と稱讚に價するかの如く思へる。

かうして、大尉とエドアルトが遠ざかるとすぐ例の建築家が日々重要な人物となつて來るのであつた。種々の計畫の整理や實行は全くかれに依存し、かれはまた精確且聰明に手腕を發揮した。同時にまたいろんなことで婦人たちをたすけ、靜かな退屈な時間にはかの女たちを楽しませることも心得てゐた。その外貌がすでに人に信頼の念を起させ、又愛情を目覺した。言葉の全的な意味での青年で、體格がよく、すらりとしてゐて、むしろ少し大きすぎるくらいで、おどおどとはしないが慎しやかで、押つけがましいところは無いが親しみ易かつた。かれはよるこんで心配や骨折は皆ひき受け、又極めて容易に計算ができたので家政全部がやがて祕密でなくなつた。そのよい影響が到る處にひろがつた。客はかれが普通引見することにした。かれは思ひがけない客を斷つたり、少くともそのため婦人たちに不都合が起らないやうに用意する

ことを心得てゐた。

就中、ある日、一人の若い法學者が大へんかれを煩はした。近隣の貴族の使で、ある事件を談判に來たのだが、それは大して重大ではなかつたがシャルロッテを深く動かした。この事件についてはここに述べておく必要がある。といふのは、その事件さへなかつたら恐らくなく静かにしてゐたと思へる種々のことに衝撃をあたへたからである。

ここに、シャルロッテが墓地について企てた例の變化を思ひ出さう。記念碑は全部場所を移されて、石垣の側に、教會の臺石の側に置かれたのであつた。他の土地は地均しをされた。教會に行き、その傍を過ぎて向側の小さな門に行く廣い道のほかは皆いろんな種類のうまごやしを蒔かれ、それは非常に美しく緑色になり花が咲いた。新しい墓は端から一定の秩序に従つて掘られ、その度毎に場所は再び地均しをし、同様に種子を蒔かれるはずであつた。この施設が日曜や祭日の教會行きに朗らかな見事な風景をあたへたことは誰もいなめなかつた。老齡で古い習慣に執着してゐた牧師さへ、はじめは整理をあまりよろこばなかつたが、いまでは、フィレモン同様パウチスと一緒に背戸の前で古い菩提樹の下で休みながら、凸凹の墓地のかはりに美しい五彩の絨毯を見ては、かへつてそれをよろこんだ。その上この場所の利用をシャルロッテが牧師館に保證したので、これは家政の足しにもなるのだつた。

が、それにもかかはらず、教會員には、先祖のやすむ場所の標識を取除いたため言はば記念

が消えてしまつたことをはやくから愚痴るものがゐた。よく保存された記念碑は誰が埋められてゐるかはしめしても、どこに埋められてゐるかはしめさず、その何處にといふことが本來多くの人の主張によれば、大切だといふのだつた。

自分と一族のために數年前この共同墓地に一區劃を契約し、その代價として教會に小額の寄進をしてゐた近隣の一族もちやうどさういふ考へであつた。さうしてこの若い法學者が、寄進を取消し、その條件が一方的に破棄され、異議や抗辯にも注意を拂はれなかつたが故に今後は支拂ひを停止するといふ意向を述べに差遣はされたのであつた。この變化の發頭人であるシャルロッテはこの青年と自分で話したいと思つた。青年は勢ひこんではゐるがあまり生意氣な風もみせず自分や依頼人の理由を説明し、人々にいろいろなことを考へさせた。

「御存じのとほり、」かれは短い前置きで自分の押しつけがましさを辯解してから言つた。「御存じのとほり、どんな賤しい者にも身分の高い人にも、自分の家族が葬られてゐる場所にするしをつけることは大切です。どんな貧しい農夫にも、子供を埋めるとき、弱い木の十字架を墓に立てて花環で飾り、少くとも苦しみのつづくあひだ記念をつづけることは、たとへそんな標識が悲しみと同様に時間とともになくなるものであつても、一種の慰めなのです。裕福な人はこの十字架を鐵に變へて堅固にし、いろんな方法でまもりまします。さうして數年はもてます。が、これも結局は倒れて見えなくなるものですから、財産家にとつては、數代つづいて子孫の手で

新しく手入れすることのできる石を建てることほど大切なことはありません。が、私たちが關心をもつのはこの石ではなく、その下に入れられてゐるもの、その傍の土に委されてゐる者です。記念よりも人自身、思ひ出ではなくて現在が問題なのです。亡くなつた愛する者を、記念碑でよりも墓の土饅頭でがはるかに心から抱擁することができます。記念碑なんてものは本来大したものではないからです。しかし、その周圍に、境界石をめぐるやうに、夫婦や親類や友人は死んでからもあつまり、生きてゐる者は自分の愛する死者の側から他人や悪意を抱く者をしりぞけ、遠ざける権利を持つべきなのです。

だから私は、私の依頼人は寄進を取消す権利が十分にあると思ひます。家族の各員が全く代償も考へられないやうに傷けられたことを思へば、十分正當なことです。あの人たちは、愛する人にお供物を捧げるといふ傷ましくも甘い感情や、いつかはすぐ傍に自分も休むのだといふ慰めになる希望をも失はねばなりません。」

「この事は訴訟などで騒がねばならないほど重大ではございませんね。」シャルロツテは答へた。「私は自分の施設をべつに後悔してはゐませんが、教會が失ふものに對しては喜んで辨償致しませう。ただ率直に白状しなければなりません、あなたの論證には信服できませんの。少くとも死後は結局皆平等だといふ純粹な感情は、人格や愛著や生活關係を我儘に頑固につづけるより心を安めることのやうに思へますわ。これについて、あなたはどうお思ひになつて？」

かの女は建築家に問ひをむけた。

かれは答へた。「私はそんな場合論争したくも、決論を下したくもありません。私の技術や考へ方に最も近いことを控へ目に言はしていただきませうか。私たちがもう愛してゐた人の遺骸を壺に入れて胸に抱くほど幸福でなくなつて以來、損はずに大きなよく飾つた石棺に入れておくほど金持でも朗らかでもないのですから、實際また教會にすら私たちや家族の埋る餘地がなく、戸外に追ひ出されるんですから、奥さんのお始めになつたやりかたを正しいとする理由が大いにあるわけです。一つの教會の者が列をつくつて並んで横たはるとすれば、お互に仲間のあひだに休むことになるぢやありませんか。どうせ地の中に入るものなら、偶然にできて次第に崩れてしまふ土饅頭なんか直ぐにも均らしてしまつて、覆ひをみんなが荷なつて各自には軽くするのが自然でもありさつぱりしてゐると思ひますね。」

「思ひ出のしるしとか、なにか思ひ出を迎へるやうなものはないに、みんなそんな風に過ぎ去らなくてはならないのでせうか？」オテリエが答へた。

「決してそんなことはありません。」建築家はつづけた。「思ひ出ではなくて、場所を捨てねばならないのです。建築家や彫刻家は、自分たちや自分たちの藝術や手によつて人間がその存在の永續を期待してゐることに大へん興味を持つてゐます。だから、私はよく考へ作り上げた記念碑を望むんです。一つ一つ偶然に蒔き散らされたのではなく、永續を約束できるやうな場所

に立てられたものをです。敬神家も身分の高い人も教會に個別的に休む特権をあきらめるんですから、少くとも教會か、墓地の周囲の美しい會堂に記念のしるしや文字を掲げるんですよ。それにやつてみる形式や、かざる装飾はいくらでもあります。」

「藝術家がそんなに豊かなものでしたら、」シャルロットが答へた。「仰しやつてみて下さいな。小さな方尖塔や截頭圓柱や骨壺の形式から少しも抜け出さないのはどうしたんでせうね。あなたがご自慢になる澤山の發案のかはりに、私はいつもいやといふほど繰返しばかり見て参りましたわ。」

「我々の處ではまあさうでせう。」建築家は答へた。「でも、どこでもさうではありませんよ。だが、大體、創案とか適當な應用とかいふことは特殊なことかも知れませんね。殊に、こんな場合、嚴肅な對象を朗らかにし、喜ばしくない對象で喜ばしくないものに陥らないやうにするのはなかなか難しいことです。いろんな種類の記念碑の圖案については、私が澤山集めてゐますから時々御覽に入れませう。が、とにかく、人間の最も美しい記念は肖像ですね。これは他の何物にもまして、その人がどんな人であつたかといふ觀念をあたへます。多かれ少かれ音譜につけられた最上の歌詞です。が、それもいちばんよい時につくらねばいけません。このことが普通等閑に附されてゐるやうです。誰も生きた形を保存したいと考へるものはなく、あつても不十分な方法でやつてゐます。死人はすばやく型をつくられ、さういふ假面を石の臺の上

にのせ、それを胸像と呼んでゐます。が、完全にそれを生かし得る藝術家は何と稀なことです。うー」

「あなたはたぶん自分でも氣づかず、又さういふおつもりもなく、話をすつかり私に都合のよいやうに導いて下さいました。」シャルロットは答へた。「人の肖像は實際誰にかかはりもないものですわ。どこに立つてゐても、獨立してゐます。私たちはそれの墓地を示せなんて言ひはしません。が、不思議な感情を告白してみませうか。私は肖像にさへ一種の反感を持つてゐるんです。肖像はいつも私たちをひそかに非難してゐるやうな氣がします。それは遠ざかつたもの、死んだものを暗示して、現在を正しく敬ふことがどんなに難しいかを思ひ出させるんです。どんなに澤山の人に會ひ又知つたかを思ひ出し、自分たちがその人たちに對して、又その人たちが自分たちに對してどんなにわづかなものでもあつたかを自分に告白するとき、どんな氣がするものでせうね。私たちは才能に富んだ人に會つてその人たちと話しもせず、學者に會つて學びもせず、旅行者に會つて教へられもせず、愛情にみちた人に會つて氣持のよいことをみせてあげもしないのです。」

悲しいことに、これは通りすがりの人たちにばかりではありません。社會や家族はその愛する成員に對して、町はその價值ある市民に對して、國民はそのすぐれた君主に對して、國家はまたそのすぐれた人物に對してそんな風に振舞つてゐるのです。」

私は、なぜ死者のことは無制限によく言ひ、生きてゐる者についてはいつも一種の用心をして言ふか、といふ問ひをきいたことがあります。その答へはかうでした。死者にはなにも恐れることがないが、生きてゐる者にはまだ邪魔をされる可能性があるから、といふんです。他人の記念に對する心配なんてこんな不純なものなのです。大抵、利己的な戯れにすぎないんです。それにくらべると、生き残つた者に對する關係をいつも生々と活動させておくことは神聖な眞面目なことでせうにね。」

## 第二章

この出来事とそれに関連した會話に刺激されて、翌日人々は墓地へ行つてみた。その裝飾と明朗化のために建築家は種々うまい提案をした。が、また、すぐ最初に注意を惹いた建物である教會にもかれの心遣ひは及んだ。

この教會は數世紀來ドイツ風によつて、均整もとれ、巧みに裝飾をされて立つてゐた。近隣の修道院の建築師がこの小さな建物にも洞察と愛情をもつて技倆を示したことがよく分つた。それは今もなほ、その内部のプロテスタント風な禮拜のための設備は幾分安定と威嚴を奪つてゐたといへ、見る人に嚴肅な快い氣持を起させた。

建築家にはシャルロットからいくらかの資金を乞ふことは困難ではなかつた。それでかれは、外部とともに内部を古代風に修理して、その前に横たはつてゐる復活の野に調和せしめるつもりであつた。かれ自身なかなか手業が巧みで、家の建築にまだ従事してゐた二三人の勞働者をしてこの敬虔な仕事 completes するまで引止めたいと思つた。

いまや周圍や附屬建物と共に建物自體を調査する場合となつた。そのとき、建築家が非常に驚き且満足したことは、殆んど氣づかれなかつた小さな側面禮拜堂が一層才氣のある輕快な



均整を有し、好ましく丹念な装飾をもつてゐることがわかつた。それは同時に古代禮拜式の種の彫刻や繪畫の遺物を納めてゐた。その禮拜式ではいろんな繪や道具で異つた祝祭を示し、各々の祝祭を特有な方法ですることができるとだつた。

建築家はこの禮拜堂をすぐ自分のプランに入れて、とくにこの狭い場所を前時代及びその趣味の記念物として修理することを止めなかつた。かれはもう空虚な平面を自分の好みにしたがつて裝飾したさまを考へ、その場合自分の繪畫の才能を用ふることを楽しんだ。が、家族の者には當分これを祕密にした。

まづ第一に、かれは約束に従つて古代の墓碑や容器やそれに近い物品の種々の模寫や圖案を見せた。北方民族の單純な土饅頭が話題に上つたとき、かれはその中に發見されたいろんな武器や道具の蒐集を出してみせた。それらはみんな非常に綺麗に持運び出来るやうに、抽出のなかの切り込んで布を張つた板の上に入れてあつたので、古い嚴肅な物が取扱やうによつて裝飾品みたいにみえ、小間物商の小箱でも見るやうにたのしめた。一度出してみせたからには、淋しくて楽しみがほしくなると、毎晩その寶物の一部を取り出す習慣になつた。大抵ドイツ産のもので、中世の薄い貨幣だとか、厚い貨幣だとか、印判、その他それに類するものであつた。これ等のものは皆、想像力を古代へむけた。そして、ついに建築家が印刷の最初のものや、木版や太古の銅版で話を飾り、教會はまた日々前述の意味に従つてその彩色やその他の裝飾に於

て言はゞ過去に向つて成長してゐたので、人々はほとんどかう自問せずをれないくらゐであつた。自分たちはほんとに新しい時代に生きてゐるのかしら、かうしていま全くちがつた風俗習慣や生活法や信念の中にとどまつてゐるのは夢ではあるまいか、と。

こんな用意があつたので、建築家が最後に持出した大きな紙挾は最上の効果を持つた。それには大抵輪廓だけではあるが、繪自體の上で透寫したために古風な性格を完全に保存してゐる人物畫が入つてゐた。この性格、それを眺めた人々はどんなに魅力あるものに思つたことであらう。あらゆる姿から至純な存在がのぞいてゐた。どれも氣高くはないにしても善良と言はずにはゐられなかつた。朗らかな落着き、我々の上の尊嚴なる神の自發的認識、愛と期待への靜かな歸依がすべての顔と身振りにあらはれてゐた。禿頭の老人や豊かな卷髮の少年や、元氣な若者、眞面目な男、光り輝く聖者、ただよふ天使、すべてが無邪氣な満足と敬虔な期待のなかで祝福されてゐるやうであつた。そこに起るとんな卑俗なことでも天上の生の匂をもち、神に仕ふる行爲はどの人物にも極めてふさはしく見えた。

かういふ境域を大抵の人は消え去つた黄金時代、失はれた樂園を見るやうにみた。ただ恐らくオテ、リエだけは、自分とおなじもの間にゐる思ひをする境地にゐた。

これ等の原畫の畫因に従つて建築家が禮拜堂の尖頭拱の間の空間を描き、非常によい生活をした場所への自分の記念を残したいと申出でたとき、たれが反對することができたらう。かれ

はそれをいくらか悲しげに説明した。このやうに完全なまどりのなかでの自分の滞在もいつまでもつづくわけのものではなく、恐らく間もなく打切りになるにちがひないといふことを、これは諸般の事情から十分察することができたからである。

とにかく、この頃は成程事件は多くなかつたが、眞面目な話をする機会は十分にあつた。我はだからこの機会に、オテ、リエがそれらの話から自分の手帳に書きとめた二三のことを傳へたいと思ふ。それには、その愛すべき數頁を見てゐるとどうしても浮んでくるある比喩ほど適切な橋渡しはあるまい。

英國海軍の特殊な裝備については我々の聞くところである。王室艦隊の索具はすべて、最も強いものから最も弱いものにいたるまで、一本の赤い糸が全體を貫いてゐて、それを引き出すには全部を解いてしまはねばならず、又それによつてどんなに小さな一片でも王に所屬してゐることがわかるやうに編まれてゐる。

同様にオテ、リエの日記をも愛情と愛著の一本の糸が貫いてゐて、それがすべてを結び付け、全體をしめしてゐる。それによつて、これ等の記述や考察や抜粹された格言やその他どんなものでも、記述者には全くとくに獨特で重大なものとなつてゐる。ここに選んでみせるどの章句もその明瞭な證據である。

#### オテ、リエの日記から

「いつかは愛する人のかたはらにやすむといふことは、死後に思ひを馳せるとき、人のいできうる最も快い想像である。家族のもとに集る——といふことはまことに心からの言葉である。」

「我々を遠ざかり死んだ者に近づける記念物はいろいろある。が、肖像ほどに意義あるものはない。たとへ似てゐなくても愛する肖像との會話は、友人とのいさかひが魅力的な場合があるやうに、魅力を持つものである。ひとは二人でゐて、しかもはなれてゐないことを心地よく感じる。」

「現實の人と肖像とのやうに話す場合がある。相手は話すことも、我々を見ることも、我々に心をつかふことも要らない。我々が見、その人への自分の關係を感じる。否、さらにその人への我々の關係は成長することができる。この場合、その人がなにかを爲すわけでもなく、又我々にとつて肖像同様の關係しか持たないことを感じたりすることもなす。」

「ひとは自分の知つた人の肖像には決して満足しない。だから私はいつも肖像畫家を氣の毒に思ふ。人間に不可能事を要求することは滅多にないのに、この人々にばかりそれ

を求めるのである。肖像画家は人物に對する各個人の關係や、その愛情や反感をも繪の中にをさめねばならない。單に自分が一人物を把握する通りにでなく、すべての人が把握する通りに描かねばならない。このやうな藝術家が次第に行詰り、無關心に氣儘になるのは不思議ではない。そのため澤山の愛する大切な人の肖像がべつに手に入らなくなるのでさへなければ、なるやうになるがよい。」

「實際、高い土饅頭や岩片で肉體の傍に埋められてゐた武器や古い道具類の建築家の蒐集は、死後に人格を保存しようといふ人間の用意がいかに無駄であるかを證明してゐる。我々は何と矛盾してゐることだらう！ 建築家は、みづからさういふ祖先の墓の土饅頭をあばいたことを自白してゐながら、子孫への記念物の仕事をつづけてゐる。」

「しかし、なぜそんなに嚴密にとらねばならないのだらうか？ 我々のすることはすべて永遠のためであらうか？ 朝着物をきるのは夕方脱ぐためではないのか？ 旅をするのは、また歸るためではないのか？ なぜ、たとへ一世紀にすぎないにしても、家族の傍にやすむ願ひを持つていけないのだらうか？」

「澤山の崩れ落ちた、教會詣りの人に踏みじられた墓石や、その墓碑自體の上に崩れた教會を見るとき、死後の生活がつねに第二の生活に思はれる。その生活で人は肖像や碑名の中に入つて、本來の生前の生活より長くとどまる。が、この肖像、この第二の生

活も早晚消えてしまふものである。人間と同様記念物にも時間はその權利を失はない。」

### 第三章

半分しかできないことに従事するのは非常に愉快な感情であるから、ディレクタントが上達するよしもない藝術にたづさはるのを叱つたり、藝術家が自分の領域を出て近接する分野に赴きたがるからといつて非難したりしてはいけない。

かういふ公正な考へで建築家が禮拜堂を描くための準備を観察しよう。繪具は用意され、寸法はとられ、下繪は描かれた。あらゆる創意の要求をかれは捨てた。かれは自分の輪廓圖にたよることにした。ただ、坐り又浮いてゐる人物を巧みに配置し、空間をそれで趣味豊かに飾る心遣ひをした。

足場は立つた。仕事は進んだ。もう眼につくやうなものが二三出来上つたので、シャルロツテがオティリエと一緒に訪れて來たのもいやではなかつた。青い空を背景にした生々した天使や、潑刺とした着物は、その靜かな敬虔さで人の心をひき締め、非常に物やはらかな作用をもたらして、見る者の眼を樂ませた。

婦人たちは足場の上を建築家のはうへやつて來た。オティリエは、すべてが正確に輕やかにすむうすにすすんでゐる様子を眼にするや否や、以前の授業でうけたものが突然開展してきた

らしく、繪具と刷毛をつかんで、指圖をうけたとほりに變の多い着物を綺麗に又巧みに描いた。

シャルロツテは、オティリエがどうにかして仕事をし氣を紛らしてゐるのを見てよろび、二人をそのままにして、自分の考へに耽り、たれにも言へない自分の考へや心配をひとり考へぬくために立去つた。

普通の人が日常の卑俗な困惑に昂奮して情熱的に不安な舉動をするのを見ると同情の微笑を禁じえないが、これに反して、大いなる運命の種子を蒔かれ、その受胎の發達を待たねばならず、そのため生じる善も悪も又幸も不幸も促進することを許されず又出来もしない一つの心情を見るとき我々は畏敬の念をいだくものである。

エドアルトは孤獨な自分に送られたシャルロツテの使に託して、友情と同情を示してはゐるが、打解けて愛情深いといふよりは冷靜に眞面目な返事をした。そのすぐ後でエドアルトは姿を消した。夫人はかれの消息を得ることができなかつた。が、ついに、かの女は新聞に偶然にもその名前を見出した。かれはある重大な戦鬪に際して拔んでた人々にまじつて特筆されてゐた。かの女はいまや、かれがどういふ道をとつたかを知り、大きな危険から逃れたのを聞いた。が、すぐに、もつと大きな危険をもとめるであらうといふことを信じ、どんな意味に於てもかれを極端から引戻すことはとても難しいことをあまりにもよく知ることができた。かの女はこれら

の心配を獨りでいつも心中にいだき、どこへ置かうとしてみても、どう考へてみても安心はできなかつた。

オティリエはさういふことは夢にも知らず、その間例の仕事に非常な愛情をいただき、規則的にそれをつづける許しをシャルロッテからすぐあたへられた。仕事は速かに捗つた。青空には間もなく貴い住人たちが棲まはされた。持続的な練習でオティリエと建築家は終りのほうの繪では自由な筆勢を得、明らかに上手になつた。建築家が獨りで畫くやうにまかされた顔は次第に全く特別な性質を示してきた。それは全部オティリエに似はじめた。美しい娘の近くにゐることが、自然の又藝術的な人相について先入観を持たない若い男の魂に非常につよい影響をあつたへたのにちがひなかつた。かれは次第に眼から手への道程で失はれるものがなくなり、ついには二つが全く同じ調子ではたらいだ。とにかく、最後の顔の一つは完全に成功し、まるでオティリエ自身が空から見下してゐるかのやうであつた。

圓天井は出來上つた。壁は單一にして明るい褐色だけ塗ることにした。華奢な柱と藝術的な彫刻の裝飾とは暗い色で目立たせるはずであつた。が、かういふ事ではいつも一つが他へと導くやうに、この他、空と地とを結びつけるためには花や果實が畫かれることにきまつた。ここではオティリエは全く自分の領分にゐた。庭園が美しい模型をあつた。そして、その花環は非常に多かつたが、思つたよりはやく仕上げることが出來た。

が、まだすべてが荒涼として粗笨であつた。足場はごちやごちやに入組み、板は投げ重ねられ、凸凹の床はこぼれたいろんな繪具でますます醜くなつてゐた。建築家は婦人たちに一週間のひまを貰ひたい、それまでは禮拜堂に入らないやうにと願つた。ついに、ある美しい夕、かれは婦人たちに双方でそこへ行かうと乞うた。が、同行はしないですむやうにとねがつて、すぐ立去つた。

「どんなびつくりすることを考へていらつしやるか知りませんが、と、シャルロッテはかれが去つたとき言つた。「いまは私は降りて行きたくありませんの。あなたがひとりでひきうけて、私に知らして下さいね。きつと、氣持のいいことをこしらへていらつしやるでせうよ。私はまづあなたのお話をきいてから實際に味ひませう。」

オティリエは、シャルロッテがいろいろに注意を配つてゐて、心の動搖を極めて避け、とくに驚かされることを好まないのをよく知つてゐたので、すぐにひとりで行つて、思はず建築家を探して見廻した。が、その姿はどこにも見えず、隠れてゐるのかも知れなかつた。かの女は開いてゐた教會に歩み入つた。それはもうとつと出來上つて、清められ、祓ひをしてあつた。かの女は禮拜堂の戸口に歩み寄つた。その重い、眞鍮の金具を打込んだ重荷はすぐ開いた。そして、見知つた場所で、思ひがけない光景でかの女を驚かした。

一つしかない高い窓から嚴かな五彩の光線が射し込んでゐた。窓は色硝子で優美に組合され

てゐたのである。全體はそのため異様な調子を持つて、獨特の氣分を準備してゐた。圓天井と壁の美しさは床の裝飾で引立つてゐた。床は特殊な形の、美しい模型にしたがつて並べた、石膏を流して結合した煉瓦でできてゐた。これと色硝子は建築家がこつそりと用意させて、すぐに全部組合せることのできたものであつた。又、休憩所も配慮してあつた。例の教會の古物のなかに二つ三つ美しく彫刻した奏樂用の椅子が見つかつて、それをびつたりと壁に寄せ附けて周圍に置いてあつた。

オティリエは、見知らぬ全體となつて自分を迎へる見馴れた部分をよるこんだ。かの女は立止つたり、あちこちに歩いたり、見たり吟味したりした。ついに、かの女は椅子の一つに腰かけた。さうしてうへやまはりを見廻すと、まるで自分がゐるかゝるやうな、感じるやうで感じないやうな、このすべての物が自分の前で、自分自身の前で自分が消えるやうな氣がした。太陽がそれまではげしく照らしてゐた窓を去つたとき、やつと、オティリエはわれに返り、館に急いだ。

かの女はどういふ特別の時期にこの不意打が爲されたかを自分に隠さなかつた。それはエドアルトの誕生日の前夜であつた。その日をかゝる女は勿論全くちがふやうに祝ひたかつた。このお祭にすべての物を飾るはずであつたのだ。が、いま、豊かな秋の花は全部摘みすにあつた。向日葵は相變らず顔を天に向け、翠菊は靜かにつつましげに前方を見てゐた。せめてそれを花

環にしたものは一つの場所を飾る模型に役立つた。其處は、もし藝術家の氣紛れにとどめず、なにかに利用されねばならないとすれば、共同墓地に適當してゐるやうに見えた場所であつた。

かの女はいまエドアルトが自分の誕生日を祝つてくれた時の騒がしい忙しさを思ひ出さずにはゐられなかつた。又、その屋根の下で人々が友誼にみちた期待の言葉を述べた新築の家を思ひ出さずにはゐられなかつた。實際、花火は再びかの女の眼や耳の前で、淋しければ淋しいほどはげしく想像力のなかで轟いた。が、かの女はまたそれだけ益々ひとりぼつちな思ひをするだけであつた。かの女はもはやかれの腕に凭れることもなく、いつかまたよりかかるのぞみをも持てなかつた。

オティリエの日記から

「若い藝術家の言葉を書きとめなくてはならない。職人と同様、造型美術家にも次のことが極めて明瞭に認められる。即ち、人間は全く特別に自己に屬するものを最も我が物とすることができないものである。その作品は、小鳥が孵化された巢を去るやうに、かれを見捨てる。」

「就中、建築家はこの點極めて不思議な運命を持つてゐる。かれは自分自身は締め出さ

れねばならない部屋をつくるためにいかに屢々その全精神と愛著を傾けることであらう。王の廣間はその華麗さをかれに負ふものであるが、その最大の効果をかれは興り味ふことはない。寺院でかれは自分と最も神聖なる者との間の境界を引く。そして、もはや、心を高揚する祭儀のために自分で作つた階段を昇ることを許されない。それは丁度、金細工師が、ホシノ 薬と寶石を自分で調製した聖餅盆をとほくからしか拜めないのと同様である。富者に建築家は殿堂の鍵とともにその便宜と愉樂を譲り渡すが、その何物をも興り味ふことはない。もし作品が嫁入支度をしてもらつた子供のやうにもはや父親には働きかけないとすれば、かうして次第に藝術は藝術家から遠ざからねばならないのであるまいか。藝術は、それが殆んど公のもの、萬人に、従つて藝術家にも屬すもののみにたづさはることにきまつてゐたら、どんなに進捗することであらう。」

「古代民族の觀念は嚴肅でまた恐ろしいものかも知れない。彼等は祖先が大きな洞穴の中にくるりと王座に坐つて沈黙の話をしてゐると考へた。入つてくる新來者に、もし十分値打のある人間だと、彼等は立上つて歓迎のお辭儀をするのだつた。昨日、私は禮拜堂に坐つて、自分の彫刻した椅子に向合せて數個の椅子がぐるりと置いてあるのを見たとき、あの考へが全く親しく優しいものに思はれた。どうして坐つたままでゐてはいけないのか？ と私は心の中で考へた。ついに友だちがやつて來たとき、立上つて親しく

お辭儀をしてその方に席を示してあげるまで、靜かに自分の中に沈潜して長くながく坐つたままでゐてはいけないものか、と。色硝子は晝間をも嚴かな薄明にしてゐるが、夜も全く闇にならないためには誰か永遠のランプを寄附しなくてはならないだらう。」

「どんな様子をしてゐても、人はいつも見てゐると考へられてゐる。私は、人間はただ見ることがやめないために夢を見るものと信じる。いまに内部の光が輝き出て、他の光はもはや要らなくなるかも知れない。」

「年は響き消える。風は切株の上を吹いて、もはや動かすものを見出さない。あのすらりとした樹の赤い實だけがなにか快活なものをまだ思ひ出させようとしてゐるやうだ。丁度、穀物を打つ人の拍子が、刈りとられた穂の中に澤山の營養素や活力素が隠れてゐるといふ考へを呼び覚ますやうに。」

## 第四章

かういふ出来事や、この世のはかなさを無理にも感じさせられたあとで、オティリエは、この上はもう隠してはおけなかつた、エドアルトが變り易い戦争の運命に身を委せたといふ報知をきいて、どんなにたぐひもなく愕いたことであらう。悲しいことに、この場合すべき理由のあつた観察でかの女のしないものはなかつた。が、幸ひにも、人間は一定限度の不幸しか理解できない。それを越したものは破滅させるか無關心にするかである。恐怖と希望が一つになつて、お互に相殺し、ぼんやりした無感覺になつてしまふ場合がある。さうでもなければ、どうして、遠ざかつた愛人が刻々の危険のなかにあるのを知つて、自分の日常生活をつづけて行くことが出来やう。

だから、オティリエが淋しく仕事もなく沈み込むやうに思はれたこの静けさのなかに突然亂暴な一隊が連れ込まれたのは、よい精靈がかの女のために心遣ひをしてくれたやうなものであつた。その一隊は、外部からかの女に十分仕事をあたへてかの女を自分自身の中から引き出すことによつて、同時にその心中に自己の力の感情を呼び起したのであつた。

シャルロッテの娘のルチアネは私塾から世間に踏み出し、叔母の家で澤山の人々に取り囲まれ

るや否や、その人の好意を得ようとする心は實際に好意を起さして、ある若い非常に金持の男がまもなく、かの女を得ようといふはげしい愛著を持つたのであつた。その可成りな財産は青年に、あらゆる種類の最善のものを自分の物と呼ぶ権利をあたへた。かれに缺けてゐるものといつては、その他の點についてと同様世間が羨むに足る完全な女性であつた。

この家族の要件こそ、これまでシャルロッテを非常に忙しくしてゐたものであつた。かの女はこのことにその思慮のすべてと、エドアルトについての詳しい報告を得るために向ける以外の一切の通信を捧げてゐた。だから、オティリエは最近いつもより獨りぼつちであつた。かの女はなるほどルチアネの到来を知つて、家で必要な準備をしてゐたが、こんなにはやく訪問が来やうとはたれも想像してゐなかつた。豫めもつと手紙を書いたり相談したり詳しくとりきめたりしたいと思つてゐたのに、嵐は突然館とオティリエに襲ひかかつた。

小間使や召使や、鞆や箱をのせた馬車が乗りつけた。もう二倍三倍の主人たちが家にゐるやうな氣がした。が、お客様たち自身はやつといま現はれた。ルチアネや二三人の女友だちを連れ大叔母と、花婿も同様連れがあつた。玄關は革張りの行李や外套袋やその他革製の器物で一杯であつた。澤山の小箱や袋を撰り分けるのには骨が折れた。荷物や小荷物は際限がなかつた。その間に、はげしく雨が降り、いろいろ不便が起つた。このはげしい忙しさにオティリエは平静な活動を以て對してゐた。かの女の明朗な熟練はこの上なく美しく輝いた。かの女はすぐに



全部を片づけ整理してしまつたのである。皆めいめに部屋をあたへられ、自分流にくつろいだ。そして、思ふままにするのを妨げられなかつたので、世話が行き届いてゐると思つた。

さて、皆の者は非常に困難な旅をしたあとで少し休養をとりたかつた。花婿は自分の愛と好意を誓ふために喜んで姑に近づいた。が、ルチアネは休んではをれなかつた。かの女はいよいよ馬に乗れる幸福に辿りついたのであつた。花婿は美しい馬を持つてゐたので、すぐ馬乗りが始められねばならなかつた。天気や風や、雨や嵐は問題にならなかつた。まるで、濡れて、また乾かすために生きてゐるやうなものであつた。徒歩で外出しようと思ひつくと、かの女はどんな着物をきてゐるか、また靴をはいてゐるかは問題にならなかつた。かの女は澤山に噂を聞いてゐた遊園を見物せねばならなかつた。馬で行けないときは徒歩で走つた。間もなくかの女は全部見てしまつて酷評を下した。實に急速度であつたので、反対したりするのは容易でなかつた。みんなはいろいろに困らせられたが、小間使が一番困つた。かの女たちは洗濯や火熨斗<sup>ひお</sup>かけや解きほぐしや縫物を仕上げるひまがなかつた。

ルチアネは家やその地方を知り盡してしまふや否や、まはりの近隣に訪問するのを義務と感じた。馬も馬車も非常に速く乗り廻したので、近隣といふものもかなり遠くひろがつた。館は答禮の訪問客で溢れ、行違つてはいけなかつたので間もなく一定の日がきめられた。

シャルロッテが叔母や花婿の執筆と内部の關係をしつかり固めようと骨を折り、オテ、リエが

部下の人たちとともに、獵師も園丁も漁師も小賣商人も動員されてゐるための凄<sup>こ</sup>い雑沓にもめげず何事にも落度がないやうにと心を配つてゐたあひだに、ルチアネは長い尾を後に曳く燃える彗星のやうにいつも立ちあらはれてゐた。普通の訪問の會話はまもなくすつかり彼女にはつまらなく思はれた。一番年長の人々に骨牌臺<sup>かた</sup>での休養を許すや否や、まだ少しでも動ける者は——かの女の魅力のある強要にあつてたれが動かないでゐられたらう——ダンスにでなければ盛んな質遊びや罰遊びや手品をしにやつて來ねばならなかつた。こんなことはみな、あとでの質<sup>し</sup>の請出しと同様、かの女自身をも計算に入れたものであつたが、一方たれも、殊に男は、どんな人でも、全く手ぶらで出て來ることはなかつた。實際かの女は、二三人の少し年寄つた重要な人たちを、その偶々めぐつて來た誕生日や命名日を聞き出したり、とくに祝つたりして、すつかり味方することに成功した。この場合ある全く獨特な熟練が役に立つたのであつた。みんなが好遇されてゐるのを見てゐながら、めいめいは自分が一番さうだと思つた。連中のうち一番年寄の人たちがそのくせ一番目立つて持つてゐる弱點であつた。

ひとかどの人物らしい恰好の男たち、身分や名望や名譽や、その他目立つたものを持つてゐる男たちを味方にして、叡智や思慮を輕侮し、思慮深いにもかかはらず亂暴な驚くべき振舞にも好意を得ようといふのがかの女の計畫らしくみえたが、青年たちもまた損なくじをひいてゐるわけでもなかつた。それぞれ自分の分前を持ち、めいめいつの日か又いつのときか巧みに

かの女に有頂天にされ、呪縛されてゐたのであつた。かうして、かの女は建築家をもやがて眼にとめた。が、かれはその黒いながい巻髪からこぼりなく見てゐて、眞直に落着いて遠方に立ち、すべての質問に簡単に分別正しく答へ、それ以上何ごとにも立入る氣持はなささうな様子をしてゐた。で、かの女はついにある時、なかば不機嫌に、なかばするい考へで、かれをその日の立役にして自分の追従者にしようと思つた。

かの女があつたのであつた。かの女は際限もなく着換へをする用意をしてゐた。一日に三度も四度も着換へをし、普通の社交界でもちひられる衣服を朝から夜まで着換へるといふのがそのたのしみであつたが、また一度は、百姓や女漁師や妖精や花賣娘になつてほんとの假装をしてあらはれた。かの女は老婆に變装することもいやではなかつた。その若い顔が僧衣みたいな服から益々新鮮にあらはれるのだつた。實際かの女はかうして現實と空想されたものとを非常に混亂させたので、人々は妖姫と親類や兄弟になつたやうな氣がした。

が、この變装を主に利用したのは、默劇の姿勢や舞踊のときであつた。かの女はいろんな性格を表現するのに熟練してゐた。その従者のうちの紳士が一人ピアノで身振りに必要なわづかの音楽を伴奏する練習をしてゐた。ちよつと申合せさへすれば、すぐ調子が合つた。

ある日、はげしいダンスの合間に、人々がかの女自身のひそかな發意で、言はば即興的にか

ういふ演出を所望したとき、かの女は當惑し不意を打たれたやうな風をして、いつもに似ずいつまでも承知しなかつた。かの女は決心のきまらぬ様子を見せて、選ぶのをやめ、即興詩人のやうに題をあたへてくれと言つた。ついに、あのピアノ弾きの助手が、申合せがしてあつたらしく、ピアノに向つて、葬送曲をひきはじめ、アルテミジアの役を所望した。それをかの女は非常によくおぼえ込んでゐたのである。かの女は承知して、ちよつと姿を消してから、死の行進曲のやさしく悲しい調子に合わせて、寡婦になつた王妃の姿で、きまつた歩調で骨壺を捧げながらあらはれた。その背後に大きな黒板と、黄金製の製圖用ペンにつけたよく尖つた白墨が持つて來られた。

かの女の崇拜者で幕僚の一人が、ちよつと耳打をされて、すぐ建築家のところに行き、大工の棟梁になつてマウソルスの墓を畫き、けつしてだんまり役ではなく眞面目な相手役をしてくれるやうに、誘ひをかけたたり、強要したり、少し引張り出したりした。建築家は外見は狼狽したやうにみえたが——といふのは、その眞黒なびつたりした近代風な平服は紗や縮緬や總やエナメルや王冠とは奇妙な對照をなしてゐたからである——、すぐ内心では平靜に返つた。が、それだけかへつて奇妙に見えたのであつた。かれは大眞面目で二人の小姓が持つた大きな黒板の前に立つて、思慮深く精密に墓碑を描いた。それはカリア王よりはむしろランゴバルディアの王にふさはしくみえたが、美しく比例がとれ、部分部分は嚴肅で、裝飾は大へん氣が利いて

したので、一同は楽しみながらその仕上るのを見物し、出来上ると歎賞した。

かれはこの間ちゆうほとんど王妃の方は向かずに仕事に全注意力を傾けてゐた。やつと、かれがかの女の前に頭を下げ、命令をすつかり仕上げたと思ふ意味を通じたとき、かの女はまだ骨壺を差出して、その頂點にそれを寫してくれるやうに言つた。かれは、それは他の圖案の性格にふさはしくなかつたので嫌々ながらではあつたが描いてやつた。ルチアネはといへば、やつと苛立たしさから救はれたのだつた。かの女の意圖はけつして良心的な繪を描いてもらひたいといふのではなかつたからである。二三筆で記念碑らしいものをスケッチして、残りの時間を自分の相手になつてもらへば、そのほうがかへつて自分の目的や希望に沿うたことであつたのだ。これに反して、建築家の態度にかの女は非常に狼狽した。かの女は自分の苦痛や指圖や、又暗示や、次第に仕上つて来るものへの喝采などでかなり表情を變へようとつとめ、二三度は一種の關係を保つためほとんどかれを引きずり廻さうとしたが、かれは全く鯁ばつてゐたため、屢々骨壺に身を逃れて、それを胸におしつたり天を仰いだりしなければならなかつた。實際、ついには、かういふ状態がますます嵩じたため、カリアの王妃よりむしろエフェズスの寡婦に似て見えた。演出はだからながびいた。いつもは忍耐強かつたピアノノ弾きももうどういふ調子に變調したらいゝか分らなかつた。骨壺が墓のピラミッドの上に立つたのを見たとき、かれは神に感謝した。そして、思はず、王妃が感謝をしめさうとしたとき、愉快な主題に入つ

てしまつた。そのため、演出はその性格を失つたけれども、見物人たちはすつかり朗らかにされた。かれらはすぐに分裂して、ルチアネにそのすぐれた表情をほめたり、建築家に藝術的な優美な圖案をよるこび讀へるのだつた。

とくに、花婿は建築家と話した。「残念ですね。この繪が消えてしまふのは。」前者は言つた。「少くとも私の部屋にこれを持つて來させて、そのお話を伺はしていただけますか。」「お楽しみになれるやうでしたら、」建築家は答へた。「こんな建物や記念碑の丹念な圖案をおみせることが出来ます。これはそのほんの偶然のちよつとした略圖にすぎないんです。」

オテリエは遠くないところに立つてゐた。そして、二人の方へ歩み寄つた。「ほんとに忘れずにあの蒐集を時々男爵様におみせにならねばいけませんわ。」かの女は建築家に言つた。「美術や古代がお好きな方なのよ。お二人がもつとお知合におなりになればいゝと思ひますわ。」

ルチアネがやつて來て訊いた。「なんのお話？」  
「美術品の蒐集ですよ。」男爵が答へた。「この方が持つていらしてゐて、時々みせて下さらうといふんですが。」

「すぐ持つて來て下さるといゝわね。」ルチアネは叫んだ。「ね、すぐ持つて來ていただけますわね？」かの女は兩手で親しげにつかまへながら媚びるやうに言つた。

「いまはその時機ではなささうですが。」建築家は答へた。

「何ですつて！」ルチアネは命令的に叫んだ。「王妃の命令に従はないと仰しやるの？」それから、かの女はからかひ半分にしたのみ込んだ。

「頑固になさつてはいけませんわ。」オティリエはなかげ低く言つた。

建築家はお辭儀をして立去つた。それは否とも應とも言つてゐなかつた。

かれが立去るや否や、ルチアネは獵犬を一匹廣間で追ひ廻した。「あゝ、」かの女は偶然母親にぶつかりさうになりながら叫んだ。「なんて腐らせるんでせう！猿を持つて來なかつたわ。みんなが止めるんですもの。あの樂しみを奪つちまふなんて、全く家の人たちの我儘だわ。でも、あとで連れて來させませう。誰かとりやるわ。猿の繪でも見ることができれば、たのしいんだけど。でも、きつと、また描いて貰ひますわ。あれはそばからはなせないんですもの。」

「きつと、あなたを慰められてよ。」シャルロットが答へた。「圖書室から不思議な猿の繪本を持つて來させます。」ルチアネは喜びで聲高く叫んだ。一つ折判の本が持つて來られた。この人間に似た、藝術家によつてますます人間化された嫌らしい動物を見ると、ルチアネはひどくよろこんだ。が、かの女は、この動物の一つ一つに知つた人との類似を見つけて、すつかりたのしくなつた。「これは叔父さんに似てなくて？」かの女は無慈悲に叫んだ。「これはあの小間物のMさんみたい、これは牧師のSさんみたい、これはあの人、あの何とかいふ人に生き寫しだわね、ほんとに猿はもともとお洒落者なのね。猿を上流社會からしめ出すわけがわからない

わ。」

かの女はこのことを上流社會の中で言つてゐた。が、たれも悪くともものはなかつた。皆はかの女の愛嬌にたいしていろいろなことを許すのに慣れてゐたので、ついにはその不行儀にもすべてを許してゐたのである。

オティリエはこの間花婿と話してゐた。かの女は建築家が戻つて來るのを待つてゐた。その眞面目な趣味深い蒐集はこの猿から一同を解放してくれると思つたのである。これを期待しながら、かの女は男爵と話をし、いろんなことにその注意を向けさせてゐた。が、建築家はやつて來なかつた。やつと戻つて來たが、皆のあひだに紛れこんで、何も持つて來ず、又、何かについて問題があつたやうな様子もしなかつた。オティリエは一瞬——どう言つたらよからう？——不愉快に、不機嫌になつて、驚いた。かの女はかれに好意のある言葉をかけてやつた。ルチアネを限りなく愛してはゐても、その振舞には惱されてゐるらしかつた花婿に、その氣持に合つたたのしい一時間を過さしてあげたいと思つてゐたのに、と。

猿は食事に席を譲らねばならなかつた。社交的な遊戯、そのうへにダンス、ついには興ざめて坐り、もう衰へた快樂をかきたてることがこんども、いつもと同様、夜中過ぎまでつづいた。ルチアネはもう、朝ベットを出て晩に入るといふ習慣ではなくなつてゐたのである。

この頃オティリエの日記には事件はめつたに記入されず、人生に關し又人生から引き出した

警句や格言が多かつた。が、その大抵は自分の反省によつて生れたものと思へなかつたから、恐らくたれかに本をかして貰つて、それから自分の心に叶つたものを抜き書きしたものであつた。一段と心の底からにじみ出る心的關係の獨特な諸點はあの赤い糸にそうて認識することが出来やう。

オテリエの日記から

「我々は未來を見るのが好きである。未來を去來する偶然を靜かな希望によつて自己に好都合にみちびきたいからである。」

「多數の集會の中にて、かくも多數の人を寄集める偶然は我々にもまた友をもたらずはずだと考へずにはゐることは容易でない。」

「どんなに隱遁生活をしてゐても、知らぬまに債務者になつたり債權者になつたりしてゐる。」

「お禮をしてもらふべき人に遭ふと、すぐに思ひ附く。が、お禮をすべき人に遭つてそれに氣づかないことがどんなに多いことだらう。」

「自己を語るのは自然である。語られたことをそのままに受け容れるのは教養である。」

「他人を誤解することのいかに多いかを知つてゐれば、たれも集會で多くを喋らぬだらう。」

う。

「人は他人の言葉を繰返すとき、それを理解しない故にのみ、非常に變へてしまふものである。」

「聴衆に媚びることなく他人の前で長く獨りで喋る人は嫌惡を呼起す。」

「一切の發言された言葉は反對の意味を呼起す。」

「抗辯と阿諛と、この二つは拙い會話をする。」

「最も心地よい會合とは、會員相互間に明朗な敬意の存する會合である。」

「人は、その可笑しく思ふものによつて最もその性格を示す。」

「可笑しなものは、感官にとつては無害な方法で結ばれてゐる道徳的矛盾から生じる。」

「感覺的な人は往々にして笑ふことがないのに笑ふ。何に刺激されても、その内心の暢氣さがあらはれるのである。」

「悟性の人はほとんどすべてを可笑しく思ひ、理性の人は殆んど何物も可笑しがらな

So」

「ある老年の男が若い婦人を得んと骨折つてゐるのを人が悪く言つた。その人が答へた。

これが若返る唯一の方法である。誰も若返ることを欲する、と。」

「人は己の缺點を非難され、罰され、その缺點のために種々のことを忍耐して苦しむ。」

が、それを除かねばならなくなると、不忍耐になる。」

「ある缺點は個人の生存には必然である。舊友がある特性をなくしたとすれば、不快になるだらう。」

「或る人がなにかかれの仕方に反したことをすると、かれは間もなく死ぬ、と人は言ふ。」  
「どんな缺點を持つてゐても、又育ててもいゝのか。他人を傷けるよりむしろ媚びるやうな缺點である。」

「情熱は缺點であるか、美德である。ただ、高められたものである。」

「情熱は眞の不死鳥フェニックスである。古い鳥が燃え盡きると、すぐ新しい鳥が灰のなかから生れる。」

「大いなる情熱は希望なき病氣である。それを癒すかも知れないものも、まづ非常に危険にする。」

「情熱は告白によつて高められけられる。愛する人へ打明け、又沈黙するときほど中庸が願はしいことは恐らくないであらう。」

## 第五章

かうしてルチアネは社交の渦の中で生の陶醉をいつも驅り立ててゐた。その追従者は毎日に増していつた。その行爲がいろんな人を刺激して惹きつけたからでもあり、又愛嬌と慈善でひとを結びつけることを心得てゐたからでもあつた。かの女はまた大へん物を分けてやるのが好きであつた。叔母や花婿の愛情から澤山の美しい物、高價な物がいちどに流れこんだために、自分の物を持つてゐるのではないやうに、まはりに積み重ねられてある物の價値を知らないやうに見えた。かの女は一瞬もためらはず、高價なシヨールを脱いで、他の人にくらべてあまり貧しい着物をきてゐるやうに見える婦人に纏うてやつた。こんなことをかの女はからかひ半分な巧みな仕方するので、たれもさういふ贈物を拒むことはできなかつた。追従者の一人がいつも財布を持つてゐて、立寄つた場所の最も年寄つた人や貧しい人を訊き出して、その状態を少くとも差當り軽くしてやるやうに委任されてゐた。このためその地方全體にかの女がすぐれてゐるといふ評判が立つた。このことはまた面倒な窮迫者をあまりに澤山ひき寄せて、ときどき迷に惑なることがあつた。

かの女がもつともその名聲を上げたのは、ある若い不幸な男への目立つて親切な根氣のいゝ

振舞によつてであつた。その青年は、ほかの點では美しい體格のいゝ男であつたが、名譽の戰傷で右手を失つたため、人を避けてゐたのであつた。この不具がかれを大へん不機嫌にしてゐた。新しい知合にいつもその災難を話してやらねばならぬのが非常にいとはしくて、むしろ身を隠し、讀書やその他の研究に従事し、社會とは絶對につき合ふまいと考へてゐた。

この青年の存在はルチアネに知られないではゐなかつた。すぐ呼び寄せられねばならなかつた。最初は小さな會合であつたが、だんだん大きくなり、最も大きな會合にも呼んだ。かの女はたれよりもこの青年に愛想よく振舞ひ、とくに押しつけがましい世話やきによつて、その損失を償つてやらうとして、その損傷の價値を知らせることが出来た。食卓でもかれはかの女の傍に席をとらねばならなかつた。かの女は食物を切つてやり、青年はフォークを使ひさへすればよいやうにした。年長者や身分の高い人がかの女の傍の席を奪ふと、かの女は全食卓の上を越して注意を配り、遠方にゐるため青年から失はれさうなものを召使が急いでつぐなふやうにしてやつた。ついに、かの女はかれに左手で書くやうに勇氣づけた。かれはすべての試みをかの女に向けねばならなかつた。かうして、かの女は、遠くても近くても、たえずかれと關聯をたもつてゐた。青年は自分がどうなつたかわからずに、實際これ以來新しい生活をはじめた。

恐らく、かういふ舉動は花婿には不快であつたらうと人は考へるかも知れない。が、その反

對であつた。かれはこの骨折をかの女の大きな功績に數へた。そして、少しでも危険にみえてくると何でも拒否することのできる極端なくらゐのかの女の性質を知つてゐたので、すつかりこのことには安心してゐた。かの女はたれとでも氣儘にとびはねたがり、一人としてかの女に突當られたり、引張られたり、からかはれたりする危険にないものはなかつた。が、たれも同様のことをかの女に對してあへてすることはできず、勝手にかの女に觸れることもできず、又、どんなとほい意味でもかの女が自分でしてゐるやうな自由を仕返すことは出来なかつた。かうして、かの女は他人は自分にたいしてこの上なく嚴しい道德の限界のなかに入れておいて、自分は他人にたいしていつもその限界を踏み越えてゐるやうに見えた。

稱讚にも非難にも、愛情にも反感にも同様に身をさらすのがかの女の原則であるとして一般に人は信じたかも知れない。かの女はいろいろに人を自分の味方にしようとしながら、その關係をいつも、たれをも容赦しない毒舌でぶちこはした。かうして、近隣への訪問でも、又かの女やその一行が邸宅や住家に親しく迎へられたときでも、かの女はその歸り途で、自分は人間關係を滑稽な側からのみとる傾向であることを極めて我儘に氣づかせないことはなかつた。あそこ三人の兄弟は誰が最初に結婚するかと遠慮ばかりしてゐるうちに年寄になつてしまつたとか、小さな若い女が大きな老人と夫婦になつてゐるとか、反對に小さな元氣な男と無骨な大女が一緒にゐるとか、ある家では一足毎に子供につまづくが、他の家ではまた子供が一人もゐな

いので大勢で行つても一杯にみえないとか、老夫婦ははやく墓に埋るがよい、そしたら法定推定相続人がなくて家の中でたれか笑ふかも知れないとか、若夫婦は家政はしつくりしないから旅行をしたらいゝ、とかいつた類ひであつた。人間にと同様に物品や建物や家具や食卓道具にもさうであつた。とくに、壁の装飾がかの女を刺激して滑稽な評言をさせた。最も古い堅織絨毯から最新の壁紙にいたるまで、又、尊敬すべき家族の肖像から極めて浮薄な新しい銅版畫まで、どれもやつつけられ、嘲笑の言葉で言はゞ食ひ盡されねばならなかつた。五哩四方まだなにかが存在してゐるのは不思議なくらゐであつた。

この否定的な努力には恐らく、もともと悪意はなかつた。主我的な我儘に刺激されてゐるのかも知れなかつた。が、オテ、リエへの関係には本當の辛辣さが生れた。すべての人が氣づいてほめるこの可愛い娘の靜かな絶えざる活動を、かの女は輕蔑を以て見下してゐた。そして、オテ、リエが庭園や温室の世話をよくするといふことが話に上つたとき、いま眞冬であることも考へず、花も果實もないのが不思議だといつた様子をみせてあざけつたばかりでなく、その時からといふもの緑色のものや枝や少しでも芽の出たものは持つて來らせて、日々、の部屋と食卓の装飾に浪費したので、オテ、リエと園丁は、翌年と恐らくその先までの希望をもぶちこはされたのを見て少からず腹を立てたほどであつた。

同様にかの女はオテ、リエが氣樂に立働いてゐる家事の安穩さをも許さなかつた。オテ、リエ

は一緒にピクニックや橋遊びに行かねばならなかつた。また、近隣で催される舞踏會にも行かねばならなかつた。ほかの人だつて澤山そのため死ぬわけではないのだからといふので、雪も寒さもはげしい夜の嵐も恐れてはいけなかつた。華奢なこの娘はそのため少からず苦しんだが、ルチアネも何ら得るところはなかつた。オテ、リエは大へん簡素な服装をしてゐたが、男たちにはいつも一番美しく、少くともさう見えたからである。大きな部屋の最初の席にゐやうと最後の席にゐやうと、その優しい引力はすべての男たちを周圍にあつめてゐた。ルチアネの花婿までもよくかの女と話した。かれがたづさはつてゐる用事でかの女の忠言や協力を要したので餘計さうであつた。

かれは建築家と益々近づきになつて、その美術蒐集品を見たとき、歴史的なことについて澤山話をまじへた。他の場合にはまた、殊に禮拜堂を見たとき、その才能に感服した。男爵は若くて、金持であつた。蒐集をし、又、建築をしたいと思つてゐた。趣味は盛であつたが、知識が薄弱であつた。かれはこの建築家こそ一緒に澤山の目的を達することの出来る人だと思つた。花嫁にもかれはこの意圖を話した。かの女はそれをほめて、大へんこの提案に満足した。が、恐らく、その才能を自分たちの目的に利用しようと思つたといふより、愛情らしいものを抱いてゐるらしく思へるこの青年をオテ、リエから引きはなすためであつた。といふのは、青年はかの女の即興的なお祭に大へんはたらきをしめし、あれこれの下準備にいろんな工夫を提供



したのだが、かの女はいつも自分のはうがよくわかつてゐると信じてゐたからである。それに、かの女の發案はいつも平凡なものであつたので、それを實行するには、優秀な建築家をまたすとも、上手な従僕の技倆で十分であつたのである。又、たれかの誕生日や記念日を祝つてあげようといふ場合、かの女の想像力では、聖壇をつくつて供物をするとか、石膏製だらうと生きた頭だらうと、花環でそれを飾るくらゐのことしか出来なかつたのである。

オテ、リエは、建築家のこの家への関係をたづねた花婿に又とないよい知らせをすることができた。かの女は、シャルロットが以前から建築家のために地位を探してゐたのを知つてゐたのである。といふは、もしこの一行が来なかつたら、この青年は、冬は建築はすべて休止せねばならないから、禮拜堂が完成し次第に立去つたかも知れないからである。だから、熟練した建築家が新しい後援者によつて再び利用され進歩させられるのは非常に望ましいことであつた。

建築家へのオテ、リエの個人的關係は全く清純でこたはりのないものであつた。かれの氣持のいゝ活動的な存在は兄の近くにあるやうにかの女を楽しませ、よろこばしてゐた。その感情は血縁關係のやうな平靜な情熱のない表面に止つてゐた。かの女の心にはもはや餘地はなかつたからである。それはエドアルトへの愛で押し詰つてゐて、すべてを浸透する神だけがこの心をかれと同時に所有することができるのだつた。

この間に冬はいよいよ深まり、天候は荒び、道は歩きにくくなればなるほど、よい家庭で少

くなつて行く日々を過すことはますます心をひくものに思はれた。短い退潮のあとで、ときどき大勢の人がこの家に溢れた。遠い兵營からは士官達がやつて來た。教養のある連中は大へん皆のためになつたが、粗野な人たちは迷惑がられた。文官の人たちにも缺けることはなかつた。そして、全く思ひがけなくある日伯爵と男爵夫人と一緒に乗りつけた。

二人の存在ははじめて本當の官廷をつくるやうに思はれた。地位や禮讓のある男たちが伯爵を取圍み、婦人たちは男爵夫人を正當に取扱つた。間もなく人々は、この二人と一緒にゐてこんなに朗らかであるのを怪しまなくなつた。伯爵夫人が亡くなつて、失禮に當らなくなりさへすればすぐ新しい結婚が行はれるだらうといふことを聞いたからである。オテ、リエはあの最初の訪問を、結婚と離婚、結合と別離、希望、期待、缺亡、諦念等について言はれたすべての言葉を思ひ出した。當時はまだ全く見込のなかつた二人がいまはかの女の前、望んでゐた幸福にこんな近く立つてゐるのであつた。われともない溜息がかの女の心からおし出た。

ルチアネは伯爵が音楽好きだと聞くや否や、音楽會を催すことにした。そのとき、ギターに合せて歌を聞かせようといふのだつた。それが行はれた。樂器を奏するのはかの女は拙くはなかつた。又、聲も氣持がよつた。が、歌詞について言へば、いつもドイツの美人がギターに合わせて歌ふときと同様殆んど意味が解らなかつた。が、皆かの女の歌ひぶりには表情が多いと保證したし、かの女は盛に喝采をうけて満足することができた。ただ、不思議な不幸がこのとき

起つた。會合のなかには詩人が一人ゐて、かの女は自分あての二三の歌をこの詩人から欲しいと思つてゐたので、とくにこの男を結びつけようと思つてゐた。そのためこの夜大抵かれの歌がらうたつたのであつた。かれはしかし、誰にもと同様にしかかの女に鄭重にしなかつた。が、かの女はもつと多くを期待してゐるのだつた。二三度それをほめかしたりした。が、それ以上のことを得ることが出来なかつた。そこで、ついに、かの女は苛立つて、追従者の一人をかれのところへおくり、自分のすぐれた詩をこんなに上手に歌つてもらつて夢中になつてよろこんでゐないかどうかを探らせた。「私の詩をですつて？」この男は驚いて答へた。「失禮ですが、これは附加へた。「私は母音以外には何も聞きませんでした。それも全部といふわけではありませんが。しかし、そんなに御親切なお志には感謝する責任があります。」追従者は黙つて、口がきけなかつた。詩人は人聞きのいゝお世辭を二言三言いつてこの場を切抜けようとした。ルチアネは、なにか特別に自分のために作つてもらつた詩をほしいといふ意圖をぼんやりとでなく氣づかせた。それがあまり不親切にならなかつたら、かれはこれになにか手頃なメロディに合せて勝手な讃歌をお作りなさいといつてアルファベットを渡したのだらう。が、かの女は心を傷つけずにこの出来事から別れることはできなかつた。その後暫くして、かの女は、この詩人がおなじ晩オテリエの好きなメロディに合せて義理一遍でない非常に可愛い詩を作つてやつたことを聞いた。

ルチアネは、自分に有利なことと不利なことをいつも混同するこの種の人らしく、こんどは朗讀で成功してみようとした。その記憶力はよかつた。が、率直に言へば、その朗讀は氣抜けがしてゐて、はげしくはあつても情熱がなかつた。かの女は譚詩や物語やその他朗讀の時よく出るやうなものをやつた。その場合、朗讀に身振をつけるといふ不幸な習慣がかの女にはあつて、このため本來敘事詩又敘情詩であるものが不愉快にも劇的なものと結合するといふより混亂させられた。

炯眼な男で、すぐこの一團とその傾向、情熱、娛樂等を見抜いた伯爵は、ルチアネを幸か不幸か、その性格に非常に似合ふある新しい種類の演出にみちびいた。「お見かけしますところ、」かれは言つた。「ここには姿のよい方が澤山おいでです。繪の動作や姿勢を模倣したらきつと失敗はしませんよ。皆さんはまだ實際の有名な繪を演出しようとなさつたことはないんですか？ さういふ模寫は、いろいろ骨の折れる準備は要りますが、また信じられないほどの魅惑を出すものですよ。」

すぐ、ルチアネはそれが全く自分の得意とするところらしいのをみとめた。かの女の美しい體格、豊かな姿、整つてはゐるが意味深い顔立、淡褐色の編んだ髪、ほつそりした頸、すべてはもう繪をめぐめあてにつくつたもののやうであつた。かの女がもし、動いてゐるときはなにかぶちこはしになるやうな優美でないものがこぼれ落ちるために、靜かにしてゐるときのはうが美

しく見えるのを知つてゐたなら、この活人畫にもつと熱心に従事したことであらう。

有名な繪の銅版がいよいよ探された。まづ、ヴァン・ダイク(7)の『ベリザール(8)』をえらんだ。大きな幣格のいゝ年輩の男が坐つてゐる盲目の將軍をやり、建築家はその前に同情深く悲しげに立つてゐる戦士をやることにした。かれは實際いくらかその戦士に似てゐた。ルチアネはなかに謙遜に、背景に立つて澤山の施物を財布から出して掌で敷へてゐる若い女をえらんだ。一方、一人の老婦がそれを止めさせようとし、あまり多すぎると諫める風に見えた。他に一人、實際に施物をあたへてゐる婦人も忘れられはしなかつた。

この繪や、その他の繪に人々は大へん眞剣にたづさはつた。伯爵は建築家に設備の仕方について二三の暗示をあたへたが、建築家はすぐそれにつかふ舞臺をつくり、照明のために必要な配慮をした。準備にもう大分深入りしてから、やつと皆の者は、かういふ企ては経費が相當にかかり、眞多のこの田舎では必要品にもいろいろ不足することに氣づいた。そのため、ルチアネは、少しも滞滯することがないやうに、殆んどその衣裳の全部を切り裂かせて、藝術家たちが氣儘に指示する種々の衣裳をつくらせた。

夜が來た。澤山の見物人の前で演出は行はれ、一般の喝采に迎へられた。意味深い音楽が期待を緊張させた。例の『ベリザール』が最初の出し物であつた。姿は非常に似合ひ、色彩はうまく配合され、照明も巧みであつたので、ほんとに別世界にゐるやうな氣持であつた。ただ、

假像のかはりに現實の存在が一種の不安な感じをもたらした。

幕が降りたが、せがまれて一度ならずまた上げられた。合間の音楽が見物人をたのしませた。人々は次にはもつと高尚な種類の繪でおどろかせようと思つた。それはブウサン(9)の有名な『アハスヴェルスとエステル(10)』であつた。こんどはルチアネはまへよりも熟慮した。氣を失つて倒れた王妃にかの女はその全魅力を繰りひろげ、賢明にも、自分を取圍んで支へてくれる少女たちに美しい姿のよい娘ばかりを探した。が、その中に少しでもかの女と匹敵できる者は居なかつた。オテリエはこの繪からも他の繪からと同様除外されてゐた。ツォイス(11)に等しい王をやるためにみんなは黄金の王座に會集のうちで最もつよさうな美しい男を選んだので、この繪は本當に比類ない完全さをかち得ることができた。

三番目にはテルブルグ(12)の。所謂『父の諫(13)』がえらばれた。我々のヴァイレ(14)のつくつた、この繪についてのすばらしい銅版畫を誰が知らないものがあらう。一方の足を他の足にのせて、高貴な騎士の父親は坐つてゐて、自分の前に立つてゐる娘の良心に話しかけようとするやうに見える。姿の美しい、髪が多い白い繻子(15)の着物をきたこの娘は後からしか見えないが、その全身は緊張してゐることを暗示してゐる。が、訓誡がはげしくて恥づかしめるやうなものではないことが、父親の表情や身振りから見える。母親はといへば、ちやうど飲みつくさうとした一杯の葡萄酒をのぞき込んで、かすかな狼狽を隠さうとするかに見える。

この機会に、ルチアネはその最高の光輝を以て現はれなくてはならなかつた。その髷や頭の形や頸や襟足はあらゆる概念を越えて美しかつた。近代の古代風を真似た婦人服ではほとんど見られない、極めて優美でほつそりして軽やかなその腰つきは、古代の衣裳をつけて非常に引立つた。建築家は白い繻子の豊かな装をできるだけ巧妙につけるやうに心がけたので、この活人畫は全く問題なしに原畫をはるかに越えて、みんなを夢中にした。アンコールが終るところを知らなかつた。そして、背後からは十分に見たこのやうに美しいものを前面からも見たいといふ全く自然な希望が非常に盛んになつたので、あるおどけた性急家さんが、頁の端に書くないふはしの、*tournez si vous plait* (どうぞ引繰返して下さい)といふ文句を聲高く叫んで、みんなの賛成を博したほどであつた。演出者たちはしかし自分たちの有利な點をよく知り、又この藝術品の意味も十分理解してゐたので、一般の呼聲にしたがはうとはしなかつた。恥ぢ入つたやうにみえる娘は靜かに立つたままで、見物人に顔の表情をみせようとはせず、父親は訓誡の姿勢で坐りつづけ、母親は、飲むやうにはみえたが葡萄酒は減る様子もない透明なグラスから鼻や眼を引出さうとはしなかつた。その他オランダの居酒屋や歳の市が選ばれた小さな餘興についてはもう多くを言ふ必要はあるまい。

伯爵と男爵夫人は出發した。そして、近い結婚の最初の幸福な週間にまた來ると約束した。シャルロッテは、やつと乗り切つて來た二ヶ月の後、もう他の客とも別れたいと思つてゐた。か

の女は娘の幸福を信じた。その最初の花嫁としての、又青春の陶酔はやがてしづまるではあらうが。といふのは、花婿が自分を世界一の幸福者と思ひ込んでゐたからである。大財産家で中庸な性質であつたが、かれは、全世界の氣に入らずにはゐない婦人を所有するといふ優越に不思議なくらゐ得意なのであつた。かれはすべてをかの女に結びつけ、かの女をとほしてはじめて自分に結びつけるといふ全く獨特な考へを持つてゐた。だから、新來者がすぐその全注意力をかの女に向けなかつたり、又かれの善良な性質のためにとくに老人たちが屢々やつたやうに、かの女のことにはべつに氣にとめずにかれと近づきにならうとしたりすると、不愉快になるのだつた。建築家のことはすぐ取り極めが出來た。新年にかれは伯爵のあとを追ひ、都會で一緒に謝肉祭を過すことになつた。その際、ルチアネは、實に美しく準備のできた活人畫の再演やその他いろんなことで最大の幸福を期待してゐた。叔母や花婿がかの女のたのしみに必要な費用を些細なものにしか思つてゐない様子だつたので、ますますさうであつた。

いまや、皆は別れねばならなかつた。が、普通の仕方では行はれなかつた。あるとき、かなり大聲で、シャルロッテの冬の貯藏品も間もなく食ひつくされるだらうと冗談が言はれた。そのとき、ベリザールをやつた勿論十分金持の紳士が、もう長いこと參つてゐたルチアネの美點に心を奪はれて、輕率にも叫んだ。「それではポーランド風を守らうではありませんか。さあ皆さん私の家へ來て食べつくして下さい。それからだんだんと廻つて行くことにしませう。」言ふ

とすぐ實行された。ルチアネは同意した。翌日荷造りをして、一群は他の領地へと突進した。そこは場所は十分廣かつたが、便利や設備が少かつた。そのためいろいろ拙いことが起つたが、それがルチアネを大へん面白がらせた。生活は益々亂暴になつていつた。深い雪の中での獵や、その他不便なものでさへあれば何でも催された。婦人たちも男たちと同様仲間を外れることは許されなかつた。かうして、獵をしたり馬に乗つたり、櫓にのつたり騒いだりして、莊園から莊園へと行くうちに、ついに一行は首都に近づいて來た。ここでは、宮廷や都會で人々が楽しんでゐる様子の報告や物語が空想力に他の轉回をあたへて、ルチアネとその隨伴者の全部を叔母はもう先に立つてゐたので、抑へがたく他の生活圏へ引きずり込んだ。

オテリエの日記から

「世間ではすべての人がその自稱するとほりに思はれてゐる。が、人は何者かであることを自稱しなければならぬ。無意味な人よりむしろ面倒な人の方が耐へられる。」

「社會にすべてのことを強ひることは出来る。が、結果を持つことはよくない。」

「我々は、人々が我々の許へ來るとき、人々を知ることが出来ない。人々の様子を知らずには、彼等の許へ行かねばならない。」

「訪問者をいろいろ非難し、彼等が去るや否や、あまり愛情を以てではなく批判する

のは殆んど自然なことに思ふ。我々は彼等を我々の尺度によつて測る權利を言はば有するからである。物分りのよい公平な人でさへ、かういふ場合にはほとんど鋭い批判を禁じ得ない。」

「これに反して、他人の許に行つて、その環境や習慣とともに必然的な不可避の状態にある彼等を見、周圍に働きかけ、又順應する様を見て、多くの意味に於て我々に尊敬すべきものに思はれなくてはならぬことを滑稽に思ふには、無理解と悪意が必要である。」

「行儀及び善良な風儀と呼ぶところのものによつて、それを除いては暴力によつてのみ、又は暴力によつてすらも達し得ないものが達せらるべきである。」

「婦人との交際は善良な風儀の要素である。」

「人の性格や特性はどうして禮儀作法と兩立し得るのであるか？——特性的なものは禮儀作法によつてはじめて正しく高めらるべきものであらう。顯著なことはたれでも欲する。ただ、不都合なものであつてはならない。」

「教養ある軍人は社會に於けると同様人生一般に於て極めて有利である。」

「粗野な軍人でも少くとも自分達の性格以外には出ない。且又、その強さの背後には概ね人の好きが隠されてゐるから、萬一の場合にも彼等と親しむことが出来る。」

「不作法な文官ほど厄介なものはない。文官は粗野なものとは關係がないのだから、

上品さを要求してもいゝのだらうけれども。」

「禮節に對して繊細な感情を持つ人々と暮すときは、なにか無禮なことに出遭ふと、その人たちのために心配になる。かうして、私は、誰かが椅子を揺ると、シャルロツテが死ぬほどそれが嫌なものだから、いつもかの女のために、又かの女とともに感じる。」

「内證の部屋に鼻に眼鏡をのせて來る人は誰もいないであらう。もし、婦人たちにすぐかれを見たり一緒に話をしたりしたい氣持を失はせてしまふことを知つてゐたならば。」

「畏敬のかはりに馴れ馴れしげにすることはつねに滑稽である。それがどんなに滑稽にみえるかを知つてゐたなら、お辭儀をしてから帽子をとる人はいないだらう。」

「禮儀の外的記號で深い道德的根據を持たないものはない。正しい教育とはこの記號と根據とを同時に教へることであらう。」

「舉動は人がその姿を示す鏡である。」

「心の禮儀がある。それは愛に類する。そこから外的舉動の最も快い禮儀が発生する。」

「自發的依存は最も美しい状態である。愛なくしてどうしてそれが可能であらう。」

「希望するものを所有してゐると空想するときほど、希望から遠ざかつてゐることはな。」

「自由でないくせにさうだと思つてゐる者ほど奴隷はゐない。」

「自己を自由だと宣言してみるがよい。すると、その瞬間制約されてゐるのを感じる。自己を制約されてゐると敢へて宣言すれば、自由なのを感じる。」

「他人の大なる長所に對しては、愛以外に救助手段はない。」

「愚人たちが自慢するやうなすぐれた人にはなにか怖いものがある。」

「從僕にとつては英雄はないと人は言ふ。が、これはただ英雄は英雄によつてしか認められないからである。從僕はしかし多分自分と同様の者を評價することはできるだらう。」

「天才も不滅でないといふことほど凡庸者にとつて大なる慰安はない。」

「最も偉大なる人物はつねに一つの弱點によつて世紀と聯關してゐる。」

「人は普通人間を實際以上に危険視する。」

「馬鹿と賢人は等しく無害である。半馬鹿と半賢人だけが最も危険なものである。」

「世間から遠ざかるに藝術によるほど確實なことはない。が又、世間と結びつくにも藝術によるほど確實なことはない。」

「最高の幸福と最高の困難の瞬間にも我々は藝術家を要する。」

「藝術は困難と善とを取扱ふ。」

「困難が軽く扱はれてゐるのを見ることは、我々に不可能事の直觀をあたへる。」

「目的に近づけば近づくほど、困難は増す。」  
「種子を蒔くことは收穫ほど困難ではなし。」

## 第六章

この訪問からシャルロッテがうけた非常に不安な生活も、自分の娘を完全に知り得たことで償はれた。この場合世間についての知識が大へん役に立つた。まだこれほどの高さで現れたことはなかつたが、かういふ珍しい性格に出遭つたことはこれが初めてではなかつた。が、かの女は経験から、かういふ人も人生や種々の事件や両親の關係などで修養を経て、主我的なものが和げられ、熱狂的な活動がはつきりした方向を持つやうになつて、非常に好ましく愛すべき圓熟に達することを知つてゐた。シャルロッテは母親として他人には恐らく不快な事も甘んじてゐた。他人なら享樂することばかり望んで少くとも煩はされたくないと考へる場合にも、希望を持つのが両親にはふさはしいのだから、餘計さういふ氣持でゐた。

が、ある獨特な思ひがけないややかたで、シャルロッテは娘の出發後驚かされねばならなかつた。ルチアネがその舉動の非難すべき點でといふよりむしろ尊敬すべきであるかも知れないことによつて悪い噂をあとに残したのである。かの女は愉快な人と一緒にたのしむばかりでなく、悲しんでゐる人とも共になしき、又その矛盾の精神を十分はたらかせるために時々愉快な人を不快にし悲しむ人を朗らかにするのを原則としてゐるやうに見えた。その行き着く先のどの

家庭でも、かの女は人中に出ることのできない病人や弱い人をたづねた。そして彼等をその部屋に訪ね、醫者の役を演じて、いつも馬車に持ち運んでゐる旅行用の薬箱からむりにたれにも強い薬をのませた。かういふ治療法はしかし、想像されるやうに、偶然のままに成功したり失敗したりしたのであつた。

この種の慈善でかの女は全く残酷で、自分のやりかたを秀れたものとかたく思ひ込んでゐたために他人が口を挿むのを絶対に許さないのであつた。が、一つの試みがまた道徳的方面から失敗に歸した。これがいろんな結果を生じすべての人々の噂に上つたため、シャルロッテを非常に煩はしたものであつた。ルチアネの出發後はじめてかの女はそのことを聞いた。丁度その行をともししてゐたオテリエが詳しくその説明をしなければならなかつた。

ある名家の娘の一人が妹たちの一人の死に責を負ふといふ不幸に陥り、そのため心を落着け、氣をとり直すことができないでゐた。かの女は自分の部屋にこもつて忙しく靜かに暮してゐた。家族の者を見るのさへ、一人一人で來るときだけ辛抱してゐた。澤山のもものが一緒にゐると、みんなが自分や自分の状態について考へ合つてゐると疑つたからである。が、一人一人に對しては、かの女は常識のあることを言ひ、何時間でも話した。

ルチアネはこのことを聞いて、すぐ祕かに、その家へ行つたら言はば奇蹟を行つてその娘を交際社會に連れ戻さうとたくらんだ。かの女はこんどはいつもより用心深く振舞ひ、一人きり

で病人の許に連れて行かせて、人が認め得たかぎりでは、音楽によつてその信頼を勝ち得ることが出來た。ただ最後に、かの女は過つた。かの女は人の耳目を聳動しようと思つてゐたものだから、十分用意はできてゐると誤信して、その美しく蒼白い娘のある晩突然華やかな輝しい交際社會に連れ出したのである。そして、もし、人々が好奇心や氣遣ひから拙い振舞ひをして、病人のまはりにあつまつたり、また避けて囁いたり頭を寄せ合つたりしてその氣持を感亂させ昂奮させなかつたなら、恐らくこれも成功してゐたかも知れない。が、敏感なその娘はこれが耐へられなかつた。かの女は言はば闖入して來た怪物への驚愕をでもあらはすやうな恐ろしい叫びをあげ逃げ出した。人々もまたびつくりして四方へ散つた。オテリエはすつかり氣を失つてしまつた病人をその部屋に連れ戻して行つた人々の一人であつた。

その間にルチアネはかの女らしいやりかたで人々を叱責した。かの女は自分だけがすべての責任があることを少しも考へず、又、いろんな失敗で自分の行ひを抑へようとしなかつた。

病人の状態はそれ以來危険なものになり、病氣は昂進して、両親はこの哀れな娘を家に置くことが出來ず、公立の病院へ委ねなければならなくなつた。シャルロッテは、その家族に對する特別のやさしい振舞ひによつて娘の惹き起した苦痛をいくらかでも和らげるやうにするほかなかつた。オテリエにこの事件は深い印象をあたへた。かの女は、シャルロッテにも否定しなかつたやうに、徹底的な治療をすれば病人もきつとなほるだらうと信じたので、餘計この哀れな



娘に同情した。

また、普通、人は過去の愉快なことより不快なことを話すことが多いものだから、オティリエがやさしく頼んだにもかかはらず建築家があの夕その蒐集を見せようとしなかつたとき、かの女がいだいた小さな誤解が話に上つた。この拒絶の行爲はいつもかの女の心に残つてゐた。かの女は自分では何故なのかわからなかつた。が、かの女の感情は非常に正しいものであつた。オティリエのやうな娘が要求し得るものを建築家のやうな青年が拒絶するはずはなかつたからである。建築家はしかしかの女の時折の軽い非難にかなり尤もな辯解を口にした。

「教養のある人でも貴重な藝術に對してどんなに亂暴であるかを御存じでしたら、」と、かれは言つた。「私が私の蒐集品を多勢の人の中に持出さなかつたのをお許し下さるでせう。誰もメダルの縁を握ることを知つてゐるものはありません。美しい刻印や綺麗な下塗に觸れたり、高價な作品を親指と人差指の間に動かしたりして、まるでさうして作品の形を検査でもするやうです。大きな紙を両手で持たねばならぬことは考へないで、片手でこの上もなく貴重な銅版畫やかかけがへのない圖案をつかみ、丁度傲慢な政治家が新聞をつかんで皺くちやにして世間の出來事に対するその批判を豫めさうして知らせるやうな工合です。二十人の人がそんなにして順順に一つの藝術品を持ち廻つたら、二十一番目の人はもうあまり見るところがなくなるだらうなどと考へる人は誰もゐません。」

「私も時にはさうしてあなたを困せはしませんでしたかしら？」オティリエは訊いた。「自分では氣づかすになにかあなたの寶物を損つたりしたことはございませんの？」

「いえ、いちどもありません。」建築家は答へた。「あなたにはそんなことは不可能でせう。禮儀とともに生れたやうな方ですから。」

「とにかく、」とオティリエは答へた。「將來はお作法の本に、人中で飲食するときどんな工合にするかといふ章の後に、藝術蒐集品や博物館での態度についてほんとに詳しい章を入れるのは悪くございませんわね。」

「全くです。」建築家は答へた。「さうしたら博物館の番人でも愛好家でももつと喜んでその珍品を見せてくれるでせう。」

オティリエはもうとうにかれを許してゐた。で、かれがかの女の非難を大へん心にかける風で、繰返し、自分はきつと見せもするし、友人のために働くと誓つたとき、かの女は自分がかれの繊細な心を傷けたことを感じ、自分を債務者のやうな氣がした。だから、かういふ話につづいてかれに頼まれた願ひをきつぱりと斷ることができなかつた。尤も、すぐ自分の感情に相談してみても、どうしてその願ひを叶へてやつていいかもわからなかつた。

それはかういふ事であつた。オティリエがルチアネの嫉妬のため活人畫から除外されたことは大へん建築家の心を痛めてゐた。又、シャルロツテが氣分がすぐれなかつたため所どころしか

この社交的娛樂を見ることができなかつたことも同様にかれは氣の毒に思つてゐた。で、かれは、一人の名譽と他の一人の娛樂のためにこれ迄よりはるかに美しい演出を催してその感謝を示さずには此處を立去りたくないであつた。恐らくこれには、かれ自身は氣づかなかつたにしても、他にある秘かな動機が加はつてゐた。この家と家族を去ることはかれには非常に困難になつてゐた。實際、オテ、リエの眼から別れることは不可能に思へたのである。その靜かな、やさしく親愛をこめた眼差だけでかれは最近殆んど全く生きてゐたのであつた。

クリスマス祭が近づいた。かれには突然、活人畫といふのは本來所謂ブレゼベ<sup>(註)</sup>から、即ち、外見は卑賤にみえながら先づ羊飼達によつて、それからやがて王様達によつて敬禮される聖母子にこの神聖な時に捧げる敬虔な演技から來てゐることが明瞭になつた。

かれはかういふ繪の可能性を完全に心に描き出した。一人の美しい潑刺とした子供が見つけた。羊飼や羊飼の女にも缺けなかつた。が、オテ、リエなくしてはこれは實行できなかつた。青年はかの女を心の中で聖母にまで高めてゐた。もし、かの女がそれを拒絶したら、この計畫は駄目になることは問題なかつた。オテ、リエはかれの申出になかば當惑して、シャルロッテに訊いてみてくれと言つた。シャルロッテは喜んでそれを許した。そして、あの神聖な姿に層越にも扮するのを躊躇するオテ、リエの心もまたかの女によつて克服された。建築家は日も夜も働き、クリスマス祭の前夜に缺ける物のないやうにした。

しかも、それは、文字通りに日も夜もであつた。かれはそれでも要求が少かつたが、オテ、リエの存在がかれにはあらゆる興奮劑に代るものやうに思へた。かれはかの女のために働いてゐると、眠りも要らず、かの女のために忙しいと食事も欲しくないかのやうであつた。祝祭の夜にはだから一切が出來上り、用意されてゐた。音のいゝ吹奏樂器をあつめることも出來た。それが序樂を奏で、望ましい氣分をもたらすことが出來た。幕が上ると、シャルロッテは本當にびつくりした。かの女の前に演ぜられてゐる繪は世間でいくどでも繰返されたものなので、新しい印象は殆んど期待されなかつたのであるが、此處では繪としての現實が特殊な長所をもつてゐた。部屋全體は薄明といふよりはむしろ暗かつた。が、周圍の個々の物は不明瞭なもの一つもなかつた。すべての光が子供から發するといふ比類ない考へを、藝術家は賢明な照明装置によつて實現することを心得てゐた。その装置は、蔭になつて斜光だけで照らされてゐる前景の人物に被はれてゐた。悦ばしうな娘や男の子たちが周圍に立つて、新鮮な顔が鋭く下から照らされてゐた。天使にもまた缺けなかつた。その獨特な光は神の光によつて暗くされ、エーテルのやうな身體は神人の前に凝結して光をもとめてゐるやうに見えた。

幸ひに子供は極めて優雅な姿勢で眠り込んでゐた。そのため、假裝の母親に視線がただよふとき、觀察を妨げるものはなかつた。母親は隠された寶をみせるために無限の優美さを以てヴェルを上げてゐた。この瞬間、繪は固着し凝固するやうに見えた。肉體的には眩しく、精神的

には驚いて、まはりの人々は、くらんだ眼を外らし、好奇的にまた瞬き、讚歎と崇敬といふより驚異と歡喜を示すために丁度身動きをしたやうであつた。尤も、讚歎や崇敬も忘れられたわけではなく、二三の老人たちにさういふ表情はまかされてゐた。

オテ・リエの姿や身振りや表情や眼差はかつて畫家が描いたすべてを超えてゐた。感情にみちた識者がこの光景を見たなら、きつと、動き出しはすまいかといふ恐怖に陥り、またとこんなに心に叶ふものがあるだらうかといふ不安を覺えたであらう。不幸にもこの全効果を把握できるやうなものは一人もゐなかつた。背の高いすりとした羊飼として横から、膝まづいてゐる人々越しに見てゐた建築家だけが、最上の立場からではなかつたけれども、最大の享樂を得てゐた。また、この新しく造られた天の女王の表情をたれが描き出し得やう？ 最も純粹な謙讓、大きな過分の名譽と不可解不可測なほどの幸福に於ける最も愛すべきつましやかな感情がその顔つきにかたどられてゐた。かの女自身の感情のみならず、演ずる役についてかの女がつくつた觀念があらはされてゐたからである。

シャルロッテをこの美しい繪は樂しませたが、主として子供がその心に働きかけた。かの女の眼には涙が流れ、かの女はありありと、似たやうな愛らしい被造物をやがて自分の膝にもせることと想像した。

幕が下された。演出者たちに少し息抜きをしてやり、又、演出物に變化をもたらすためであ

つた。藝術家は、最初の、夜と卑賤の繪を、晝と光榮の繪に變へようと企ててゐた。そのためあらゆる方向から溢れるやうな照明が用意してあつた。それは幕間に點ともされた。

このなかば俳優のやうなことをしながら、シャルロッテや少數の家族以外には誰もこの敬虔な芝居を見てゐないといふことがこれまでオテ・リエを最も安心させてゐた。かの女はだから、幕間に、誰か客が来て廣間でシャルロッテの親しい挨拶を受けてゐるのを聞きつけて、少し狼狽した。誰であるかはたれもかの女に教へることは出来なかつた。かの女は妨げを起さないやうに、それを諷くのをあきらめた。蠟燭やランプが燃え、全く無限の明るさがかの女をとりまいた。幕が上つた。見物人たちにはびつくりするやうな光景であつた。繪全體が光であつた。そして完全に除かれた影のかはりに、賢明な選擇をうけて好ましい緩和をもたらしめてゐる色彩だけがのこつてゐた。ながい睫毛の下から覗いて、オテ・リエはシャルロッテの傍に男の人が一人坐つてゐるのを見つけた。たれかは分らなかつたが、私塾の助手の聲を聞くやうな氣がした。不思議な感じがかの女をとらへた。かの女がこの忠實な教師の聲を聞かなくなつてから、何と澤山のことが起つたことだらう。ジグザグな稻妻のやうに、喜びや惱みの列がすばやく心の前を通過し、お前は一切を告白できるかといふ問ひを起させた。こんな神聖な姿をしてこの人の前に現れるには何と無價値なお前であらう。又、自然のままのお前しか見たことのないあの人は假面をつけたお前を見たらどんなに變な氣持がすることだらう。比類ないはやさで、感情と

思考が作用しあつた。かの女の心はとらはれ、凝固した繪のままでもつづけようとつとめながらも、眼は涙で溢れた。そして、子供が動き出し、藝術家が幕をまた下すやうにといふ合圖をしなければならなくなつたのを見たとき、かの女はどんなによろこんだことであらう。

貴い友だちを迎へに急ぐことが出来ないといふ痛ましい感情が、もう最後の瞬間には、オティリエの他の感情とまじつてゐて、かの女はいまや益々大きな困惑に陥つた。この異様な衣裳や装飾のまま迎へたものであらうか？ 着換へたはうがいのだらうか？ かの女は選ばなかつた。あとのほうをした。そして、その間に氣を取直し、落着かうとつとめた。やつと、いつもの着物で、來た人に挨拶をしたとき、かの女は我に返つたやうな氣がした。

## 第七章

建築家が愛顧をうけた婦人たちの幸福を願ふ以上、そのよい友だちに尊敬すべき助手がなつてくれたのを見ると、結局自分は別れねばならないのだから、氣持のよいことであつた。かれはしかしかの女たちの厚意を自分の身にひきあててみると、こんなにはやく、その謙遜な考へによれば、こんなに立派に、否、完全に自分の代りができたのを見ると、少し苦しい氣がした。かれは相變らず愚圖ついでゐたが、たうとう去らねばならなくなつた。退去のあとで自分が甘受せねばならぬものを、少くとも現在は経験したくなかつたからである。

このなかば悲しい感情を大へん明るくしてくれたのは、婦人たちが別れに際して、チヨッキの贈物をしてくれたことであつた。それを二人の婦人がながい間編んでゐるのを、かれは、いづれはそれを自分の物にするであらう見知らぬ幸福な人にたいして秘かな羨望をいだきながら、見てゐたのであつた。かういふ贈物は愛し又敬ぶ男のうける最も心地よいものであつた。美しい指のたゆまぬ營みを思ひ出すとき、こんなにながく続く仕事をしながら心もまた全然無關心であつたはずはなからうと、自惚れずにはゐられないからである。

婦人たちはいまや新しい男をもてなさねばならなかつた。かの女たちは好意を持つてゐたし、

また、自分たちの許で氣持よく過さしてやらねばならなかつた。女性は何ものも引きはなすことの出来ない獨特の内的な不變の關心を持つてゐるものである。外的な社交的な關係ではこれに反して、かの女たちは當面の男性によろこんで容易に決定される。かうして、拒絶と受納、固執と讓歩によつて、禮節ある社會ではいかなる男性もあへて脱れようとしなない支配權を本來女性が行使するものである。

建築家は言はば自分の慾望や氣儘から、その才能を婦人たちの前で、その楽しみや目的のために使用し又證明したのであり、仕事や娛樂もこの意味で、さういふ意圖に向けられたのであるが、間もなく助手の存在によつて他の生活法がつけられた。かれの大きな才能はよく話し、人間的關係を、とくに青年教育について、座談のなかで取扱ふことであつた。かうして、いままでの生活法にたいして可成り著しい對立が生じた。助手は、これまで皆がかかりきりにしてゐたやうなことはあまり認めなかつたので餘計さうであつた。

到着の際かれを迎へた活人畫については、全然話さなかつた。これに反して、教會や禮拜堂やさういつたものを人々が満足にみせてくれたとき、かれは自分の意見や考へを差控へておくことは出来なかつた。「私の氣持を言ひますと、」かれは言つた。「こんなに神聖なものを感覺的なものに近づけたり混合したりするのは全く好ましくありませんね。ある特別の部屋を捧げて、淨め又飾つてはじめて敬虔の念を抱いたり保持したりするのも御同様です。どんな卑俗な環境

にも心の中の神の感情を妨げられてはなりきせん。それはどこにもついて來るもので、どのやうな場所でも寺院に淨めることのできるものです。私は食事をしたり社交的に集つたり遊戯やダンスをしたりする廣間で禮拜をするのを見たいものです。人間の最高のもの、最も秀れたものは無形なものです。氣高い行ひ以外でそれを形にあらはさないやうに用心しなくてはなりません。」かれの考へをはやくも大體知つてしまつて、短い間に益々それを究めることの出來たシャルロットは、建築家が出發前にちやうど檢閲しておいた庭園の少年たちを大廣間に整列させて、すぐにこの助手をその専門に於て働かせた。これらの少年たちはその明るいさつぱりした制服と規則的な動作と自然な活潑な態度で大へん立派に見えたからである。助手は自分流にかれらを試験して、いろんな質問や言廻しですぐに子供たちの性向や能力を明らかにした。そして、一時間足らずで、一見さうとは見えずに、かれらを本當に大いに教へ且進歩させた。

「どうして一體なさるんでせう？」シャルロットは子供たちが去つてから訊いた。「私は大へん注意して聞いてゐましたが、全くわかりきつたこと以外にはなにもありませんでした。それなのに、私ではどうはじめてらいいか、分らないんです。あんなに短い間に、澤山の問答をして、あんな順序に子供たちを話させるなんて。」

「恐らく、自分の職業の長所は祕密にせねばならないかも知れません。」助手は答へた。「が、私はあなたがたに全く簡單な原則をお隠しすることは出来ません。それによつてこのことやそ

の他澤山のことが出来るんです。一つの対象なり、材料なり、概念なり、何と名づけてもよいのですが、それを掴んで、本當にしつかりと持つて、そのすべての部分を本當に明瞭にするんですね。さうすると、大勢の子供たちから、その中のどれがもう彼等の中に發展してゐて、どれがまだ獎勵し教ふべきであるかが、會話のうちにたやすく分るでせう。あなたの質問に對する彼等の答へは不適當であつたり非常に漠然としてゐたりするかも知れません。が、その場合、あなたが問ひ返して彼等の精神や感覺を再び引き入れ、あなたの立場から動きさへしなければ、子供たちは最後には教へる者の考へてゐることやその考へ方通りに考へたり理解したり信じたりするにちがひありません。教師の最大の過ちは、學ぶ者と一緒に空漠の世界に引きずられて、生徒たちを丁度取扱つてゐる點に引き止めておくことが出来ないことです。次にひとつ試してごらん下さいませ。大へんおたのしみになれることだらうと思ひます。」

「それは變ですわね。」シャルロッテは言つた。「よい教育はよい生活法のまさに反對なわけですね。社交界では人は何事にも停滞してゐてはいけません。それなのに、教授の場合は、散漫になるのを防ぐのが最高の掟おきてといふわけなのでせう。」

「散漫にならない變化は教授にとつても生活にとつても最も美しい標語でせう。この稱讃すべき平均が容易に得られさへすればですね。」助手は言つて、さらにつづけようとしたが、その時シャルロッテが、丁度元氣な列をつくつて庭を越えて行く少年達をもちど見るやうに呼びか

けた。かれは子供たちを制服で歩かせることに満足を示した。「男たちは、」かれは言つた。「若い時から制服をきるやうにしなくてはいけません。一緒に行動し、自分の仲間にまじつて集團に従ひ、全體として働くやうに習慣づけねばならないからです。また、制服はどんな種類のもので簡潔率直な舉動とともに軍隊的な意味を促します。さうでなくても、少年たちは生れながらの兵士です。戦争ごつことか突貫とか木登りなどを見てごらん下さい。」

「では、私が娘たちに同じ着物をきせてゐないのをお咎めにはならないでせうね。」オティリエが言つた。「あなたの前に娘たちを連れて來れば、色とりどりでお楽しみになれることと思ひますわ。」

「それは大に讚成です。」かれは答へた。「婦人たちはどこまでも多様な着物をきて歩かねばなりません。本來自分に似合ふものを知るやうになるため、めいめいが自分流に着るのです。もつと重大な理由は、婦人たちは一生獨りで立ち、獨りで行動せねばならぬ運命だからです。」  
「それは私には大へん逆説パロキシに思へますわ。」シャルロッテが答へた。「私どもは殆んど獨りつてことがないんですもの。」

「それはまあさうです。」助手は答へた。「ほかの婦人たちを考へると全くさうです。が、婦人たちを愛人や花嫁や妻や主婦や母親として考へると、つねに孤立し、ひとりであり又ひとりであるやうとしてゐます。虚榮的な婦人でも同様です。すべての婦人がその性質上他の婦人を排

斥してゐます。これは、女性全體がする責任のあることが悉く各々の婦人から要求されるからです。男たちはさうではありません。男は男を求めます。ほかにゐなければ、第二の男をつくるでせう。婦人は、自分と同じものを産み出さうなどと考へずに、永遠に生きることができるとでせうけれど。」

「眞實は不思議さうに言へばいいのですわ。」シャルロッテは言つた。「さうしたら結局不思議なものには眞實に見えます。私どもはあなたの言葉から最善のものを得ようとするつもりですが、女としては女同士結び合つて、協力し、男たちにあまり優越を持たせないやうにしたいと思ひますわ。將來、もし男の方たちもお互にべつに仲がよくもないといふ場合、さういふお話を承つただけよけいに少しいゝ氣味だと思つても悪くはお思ひにならないでせうね。」

非常に注意を拂つて、いまやこの賢明な青年は、オテリエがその小さな生徒たちを扱ふやり方を吟味してゐた。そして、決定的な賛意を示した。「生徒たちをまづ手近な役に立つやうにお育てになるのはほんとにいいことです。」かれは言つた。「清潔は子供たちに自分を尊重することを喜ぶやうにしつけます。子供たちが自分のすることを元氣に自尊心をもつてやるやうにさへしつければ、もう全部が成功したやうなものです。」

その上にかかれは、何事も外見や外部に向つて爲されず、すべてが内部に向つて餘儀ない心要のためだけに爲されてゐるのを見て大へん満足した。「僅かな言葉で、」かれは叫んだ。「聞く耳

さへあれば、全教育事業を言ひ表すことができます。」

「私にそれを言つてごらんになりませんか？」オテリエはやさしく言つた。

「えゝ、いいですとも。」かれは答へた。「ただ、ひとに洩らさないやうにして下さいよ。少年たちを下男に、少女たちを母親に教育すれば、どこへ行つたつていいでせう。」

「母親にですね。」オテリエが答へた。「女たちはそれでもいいでせう。母親にでなければ、看護婦になるやうにしなくてはならないんですから。でも、勿論若い男たちは下男には自分によすぎると思ふでせうよ。誰も自分はひとより命令する能力があると思つてゐることがすぐわかるんですもの。」

「だから、少年たちにはこれを黙つてゐたいんです。」助手は言つた。「人は自分に媚びて人生に入つて行きますが、人生は我々に媚びはしません。結局は認めねばならないことを進んで認めようとする人がどれだけゐるでせう。でも、いま私共に關係のないこんな考へはやめておきませうね。」

私はあなたが生徒たちに正しい取扱ひを適用できていらつしやるのを幸福だと思ひます。あなたの一番小さな女の子が人形を持ち廻つて、二三の小さな布片を綴り合せ、年のいつた姉妹が妹たちのために世話をし、さうして家がその家の中だけで用をすまし、起ち上つて行くやうにすれば、その上の人生への歩みは大したものではありません。さういふ娘は良人の家で、兩

親の許において来たものをまた見出すでせう。

が、教養のある階級では任務は非常にこみ入つてゐます。もつと高く繊細で上品な、とくに社交的關係を顧慮せねばなりません。だから、私どもは生徒を外部的に向けて育てなくてはならないのです。それは必然的なやむをえないことですし、度を過しさへしなければいゝことも知れません。子供たちを廣い世界のために育てようと思つて、本來その内の性質が要求することを眼中におかずに、無限の世界に子供たちを驅り立てがちですからね。ここに多少とも教育家によつて解かれ又は誤られる任務があるわけです。

私塾で女の生徒たちに教へるいろんなことで、私は不安になることがあります。自分の経験が、將來これが使はれることがどんな少いかを物語つてくれるからです。婦人が主婦や母としての地位につくや否や、すぐ剥げ落ちたり忘れてしまはれたりしないものがありません。

が、私は、ひとたびこの仕事に身を捧げたからには、いつかは忠實な女の協力者を得て、生徒たちに、生徒たちが独自の活動と獨立の境地に入つて行くとき必要なものを純粹に教育することに成功し、この意味では教育は完成したと言ひ得るやうになればよいといふ叶はぬ希望をあきらめることは出来ません。勿論、我々自身に依つてでないにしても種々の事情によつて殆んど一年毎に促される別の教育がいつも加はつては参りますけれども。」

オティリエはこれらの言葉をどんなに眞實に思つたことであらう。過ぎ去つた一年の思ひも

よらなかつた情熱がかの女に何を育てたことであらう。かの女は、近いもの、近い將來のみを見やつても、すべてが試煉として自分の前に漂ふのを見たのであつた。

青年は何氣なく女性の助力者や妻のことを言つたのではなかつた。慎しい氣持のうちにもかれは自分の目的を遠廻しに暗示することをやめることはできなかつた。實際かれはいろんな事情や出来事からこの訪問で自分の目的に近づくやうにうながされてゐたのである。

塾長はもう老齡で、男教師や女教師のうち既にやくから本當に協力してくれる人物を探してゐた。そして、遂にかの女は非常に信用のおけた助手に次のやうな申出をしたのであつた。自分と一緒に塾をつづけて行き、自分のものとして協力し、かの女の死後は相續人且唯一の所有者となつて呉れるやうに、といふのであつた。この際主要なことは、かれが心の合ふ妻を見出すことであつた。かれは祕かにオティリエを眼の前に、又心の中に思ひ浮べた。が、いろんな疑惑が起つた。それもしかし、また、好都合な出来事で平均を得た。ルチアネが私塾を去つて、オティリエは自由に歸ることが出来た。エドアルトとの關係についてはいくぶん聞えてはゐたが、似たやうな出来事と同様に冷淡に扱はれてゐた。この出来事でさへオティリエの歸校に役立つことが出来た。が、思ひがけない訪問がここでもまた特別の刺激をあたへなかつたならば、決心もできず、踏み出すこともなかつたであらう。實際、重要な人物の出現は結果を産まずに終ることは出来ないものである。



すべての人が子供の教育については惑うてゐるため、種々の私塾の價値について屢々問はれるやうな場合に遭遇した伯爵と男爵夫人がいろいろ好評のあるこの私塾をとくに知らうと企てたのであつた。そして、いまでは新しい關係に入つて二人は一緒にさういふ調査をすることが出来た。が、男爵夫人はほかに目的があつた。この前シャルロッテの許に泊つたとき、かの女はオテリエとエドアルトに關する一切を詳しくシャルロッテと話し抜いてゐた。かの女は繰返し、オテリエを遠ざけるやうに説いた。又、エドアルトの脅迫を恐れてゐるシャルロッテに勇氣をつけようとつとめた。そして、二人は種々の逃路を相談し、私塾のこの序に、助手の愛著の話もし、男爵夫人はそれだけ益々考へてゐた訪問を決心したのであつた。

かの女はやつて来て、助手を知り、學校を觀察し、オテリエのことを話した。伯爵自身も、オテリエのことをよるこんで話した。この前の訪問でよく知るやうになつたからである。オテリエはかれに近づき、否、惹きつけられてゐた。その内容に富んだ話でこれまで知らなかつたものを見たり知つたりするやうな氣がしたのであつた。そして、かの女はエドアルトとのことで世界を忘れたやうに、伯爵のまへに出て世界をはじめと願はしいものと思つたのであつた。牽引力は相互的のものである。伯爵もオテリエに愛情を感じ、自分の娘として見たいと思つたくらゐであつた。ここでも男爵夫人にとつてかの女は再度、しかも最初以上に邪魔になつた。もし、これが激しい情熱の頃であつたならかの女はオテリエに對してどんな

ことを企てたか知れない。いまはしかし、結婚によつて、かの女はオテリエを人妻にたいして無害にすればこと足りるのであつた。

かの女はだから助手をほのかにはあるが有效な仕方であつて、館への小さな旅行を企てて、夫人にも秘密にはされなかつたその計畫や希望に躊躇なく近づくやうに進めた。

塾長の完全な同意を得て、かれは旅行に出、心の中には最善の希望を抱いてゐた。かれはオテリエが自分に好意を持つてゐないことを知つてゐたし、二人の間に身分の相違が少しあつたにしても、それは時代の考へ方で容易に平均できた。また、男爵夫人はかれに、オテリエが貧しい娘であることをよく知らせておいた。金持と親戚であつても何の役にも立たない、といふのであつた。といふのは、近親の度合から財産への完全な権利を持つてゐると思へる人から多額の金を引出すことは、大財産の場合でも氣になることだからである。それに、實際不思議なことに、人はその死後も自分の財産を處理できる特權を愛する人のために使ふことは極めて稀で、習俗への顧慮から、べつに意志を示さなくても死後の財産を所有することになる人のみを利するやうだからである。

旅の途中、かれの感情は自分をオテリエと完全に同等の位置においた。よく迎へられたことがその希望を高めた。オテリエは従前通りかれにたいしてあまり打解けてはゐなかつたが、かれが知つてゐたときよりも成長もし、教養もつみ、言つてみれば一般に話しずきにもなつて

わた。人々はとくにかれの専門に關することでは信頼してその檢閲をうけた。が、目的に近づかうとするとき、いつも一種の心の中の臆病がかれを引戻した。

あるとき、シャルロッテがしかし、オテリエのゐるとき、かう言つてかれに機會をあたへた。「さあ、あなたは私の許で成長してゐるものを皆もうかなり検査なさいました。では、オテリエをどう御覽になりますか？ この人のゐる前で仰しやつてよろしうございますわ。」

助手は非常に深い洞察と落着いた言葉でかう答へた。かれは、自由な舉動や氣樂な話し振りや、言葉により動作に實證された世事への高い眼などでオテリエは大へんよくなつたが、世間がただ断片的に満足よりむしろ混亂をもたらすやうに又時にはあまり遅すぎて授けるものを一定の順序で根本的に永久に身につけるやうにするために暫く私塾に歸れば大へんいゝだらうと述べ、それについては自分はいく言ひたくないが、オテリエは自分で最もよく、どういふ聯絡のある講義からあの頃引きはなされたか知つてゐるだらうと言つた。

オテリエはそれを否定することはできなかつた。が、これらの言葉で感じた氣持を、自分でも殆んで説明できなかつたので、告白することが出来なかつた。愛する男のことを思ふとき、かの女にはこの世に聯關のないものは何もないやうに思へた。かれなくしてなにか聯關のあるものがあらうとは思へなかつた。

シャルロッテはこの申出に賢明な親切さを以て答へた。かの女は言つた。自分もオテリエも

私塾に歸ることは夙に望んでゐたことである。ただ、最近かの女にはこのやうに可愛い女友達と助力者がなくてはすまされなかつただけである。が、始めたものを終へ、中斷したものを完全に身につけるまで塾に歸りたいといふのがオテリエの希望なら、これから邪魔なんかはしません、と。

助手はこの申出をよろこんで受けた。オテリエはその考へに身震ひしたが、反對することは出来なかつた。シャルロッテはしかし猶豫を得ようと考へた。かの女は、エドアルトがまづ幸福な父親として再び歸つて來ることを望んだ。そしたらすべてはよくなり、オテリエのことも何らかの方法を講ずることができやうと確信した。

話に加はつてゐる者が皆熟慮せねばならぬやうな會話のあとでは、一般的な當惑に似たある静けさが來るものである。人々は廣間をあちこちに歩き、助手は二三冊の本をめくり、ついにルチアネの頃から置き去りにしてあつた一つ折判の本を手にした。その中に猿ばかりが描いてあるのを見て、かれはすぐまた閉ぢてしまつた。この出來事はしかし會話の動機をあたへたらしい。その痕跡がオテリエの日記に見られる。

オテリエの日記から

「醜い猿をこんなに丹念に描かうなんて氣持にどうしてなれるのだらう。猿を單に動

物として見るとき、すでに身を卑しめてゐる。が、知人をこの假面のもとに探さうといふ誘惑に従ふとき、實際益々邪惡に到る。」

「戲畫や漫畫を好んで弄ぶには必ず一種の偏屈さが必要である。我々の善良なる助手に私は、博物で苦しめられなかつたのを感謝する。毛蟲や甲蟲とは私はどうしても友だちになれなかつた。」

「こんど、かれは私に自分も同じ氣持だと白状した。かれは言つた。自然については我は直接生々と我々を取圍むもの以外を知るに及ばない。我々の周圍に咲き、緑となり、實を結ぶ樹木や我々が行過ぎる灌木や、我々が踏み歩く草の莖とこそ我々は眞の關係を有するものであり、それらは我々の同國人なのである。枝の上をあちこちに飛び、我々の園亭で歌ふ小鳥は我々に屬し、我々に幼き日より話しかけ、我々はかれらの言葉を解するにいたる。その還境から引離された異郷の生物が我々に一種の不安な印象を與へないかを自問してみるがよい。さういふ印象はただ習慣によつて鈍らされてゐるだけなのである。猿や鸚鵡や黒奴を身のまはりに耐へるには亂雑な騒々しい生活が必要だ。」

「時折、かういふ冒險的なものへの好奇的な欲求に襲はれたとき、私は、このやうな驚異を他の驚異とともに生々とした日常の連絡に於て見る旅行者を羨んだ。が、かれもまた變つた人間になるのである。たれも椰子の樹の下で罰をうけずに變るものはない。象

や虎の住む國では人の考へもたしかに變るものである。」

「我々に見馴れぬものや珍しいものをその地方やあらゆる近隣とともに、つねに最も特有の要素に於て敘述し描寫することの出来る自然研究者のみが尊敬に價する。私はいちどでいゝからフムボルト(15)の話聞いてみたいと思ふ。」

「博物標本室は種々の動植物の偶像が香油をかけられて立並んでゐるエジプトの墓地のやうに思へることがある。牧師階級には祕密な薄闇のなかでそんなものに親しむものふさはし。が、一般の教授にはそんなものは入つて來てはいけない。近いもの價值あるものがそのため押しつけられ易いを見ると尙更さうである。」

「一つの善行やよい詩に感情を目覚ますことのできる教師は、下級自然物の全系列を形や名前に従つて教へる教師より多くのことをしてゐる。何故ならば、その全結果は、さうでなくても知りうることであるが、人間の姿は最も優秀且唯一に神の似姿を具へてゐるといふことであるからだ。」

「魅力あるもの、たのしいもの、有利に思へるものに従事するのは個人の自由である。が、人類の眞の研究對象は人間である。」

## 第八章

最近の過去に心を煩はすことを知つてゐる人は少い。現在が強力にひきつけるか、又は、過去に没頭して、完全に失はれたものを出来るだけ呼び戻し、回復せんとする。先祖に負ふ所の多い大きな金持の家族でも、父親より祖父を思ひ出すのがつねである。

去り行く冬が春を欺くをつねとする美しいある日に大きな古い館の庭園を歩き、高い菩提樹の並樹やエドアルトの父がつくつた規則的な遊園を歎賞したとき、助手はちやうどこんな考へに誘はれた。樹々は植ゑた人の思ひ通りに立派に榮えてゐた。が、やつとみとめられ樂しまるべきいまになつて、もう誰もその話をしなかつた。殆んど訪れもせず、他の方向に郊外へ遠方へと趣向や費用を向けてゐた。

かれは歸つてからシャルロッテにその考へを述べた。かの女は好意をもつてそれをうけとつた。「生活が私たちを引きずつてゐるのに、」かの女は答へた。「私たちは自發的に行動し、行爲や娛樂を選択してゐるやうに思つてゐますのね。でも、勿論よく見れば、それは私たちが一緒に實行を餘儀なくされてゐる時代の計畫や好みに過ぎませんわ。」

「全くです。」助手は答へた。「環境の流れにさからふ者がありませんか。時代は進み、考へ方

も意見も偏見も趣向もかはりません。息子の若い時がちやうど轉換期であつた場合には、父親とは全然共通のものは持たないことは確言できます。父親がいろんなものを所有し、それを安全にし、制限束縛し、世間からはなれて自分の享樂を確保したがる時代に生きてゐたとすれば、息子は自分を伸ばさうとして、分け與へ、擴げ、閉ぢられたものを開放しようとするでせう。」

「時代全體もあなたの仰しやるこの父と子に似てゐますのね。」シャルロッテは答へた。「小さな町でも皆城壁や濠をもたねばならず、貴族邸は沼の中に建て、つまらぬ邸でも吊橋でだけ通れるやうにした、そんな状態については私たちは殆んど考へることも出来ません。が、いまでは大きな町でも城壁を取去つて、王侯の館の濠さへ埋められ、都會は大きな村をなしてゐます。旅行をしながら見ると、一般の平和が確保されて、黄金時代が戸口に來てゐるやうな氣がするでせう。誰も自由な平野に似てゐない庭園を氣持よく思ふものはありません。技術や強制を思ひ出させるものがあつてはいけません。全く自由に無條件に呼吸をしたいんです。でも、あなたは、かういふ状態から他の以前の状態にかへることが出来ると思ひでせうか。」

「どうして出来ないことがあります。」助手は答へた。「どんな状態でも、制限された状態も解放された状態も難點があります。後者は過剰を豫想して、浪費に導きます。あなたの仰しやつた例で申しませう。それで十分明らかかなことです。缺亡が来るや否や、自己制限がまたかへつて來ます。土地を利用せねばならぬ人はまた石垣を庭園のまはりにつくつて、生産物が安全

になるやうにします。このことから次第に新しい物の見方が生れるのです。有用といふことがまた優勢になり、澤山所有してゐる人でもついにはそのすべてを利用せねばならぬと考へます。私の言ふことをお信じなさい。あなたの息子さんが遊園をすつかり等閑に附してから、また殿しい石垣の後やお祖父さんの高い菩提樹の下に引籠るといふやうなことはありうることです。」

シャルロッテは息子を告知されたのを聞いて祕かに喜んだ。それでかの女の愛する美しい遊園にいつか起るかも知れない不吉な豫言に對して助手を赦した。かの女はだから全くやさしく答へた。「私共は二人ともまだかういふ矛盾をいくども経験するほど年とつてはゐません。が、ずつと若い頃を考へて、老人たちが歎いてゐたことを憶ひ出し、村や町を一緒にして考へてみますと、あなたの言葉には何一つ反對できさうもありませんわ。しかし、さういふ自然の成行に反抗はできないものでせうか。父と息子、両親と子供たちを一致させることはできないのでせうか。ご親切にも男の子を豫言して下さいましたが、一體その子は父親と對立せねばならぬものでせうか。おなじ氣持でつづけられたら完成し高めるでせうに、父親の建てたものを毀さなくてはならないものでせうか。」

「それにはまた合理的な方法があります。」助手は答へた。「しかし滅多にもちひられないんです。父親は息子を共同所有者にし、一緒に建てたり植ゑたりさせ、自分にと同様に無害な氣儘は許すんですね。さうすれば、一つの活動が他の活動に織りこまれ、補布を當てるといふやう

なことは全然ありません。若い枝といふものは、大きくなつた枝はもうつげないやうな古い幹にもたやすく喜んで結合するものですからね。」

別れねばならなかつたとき偶然にもシャルロッテに快いことを言つて、改めてその好意を固めたことを助手は喜んだ。もう、あまりにながく家をはなれてゐた。が、近づいて来るシャルロッテの分娩の時期をまづ過ぎてからでなくてはオティリエについて何らかの決定を望むことは出来なといふことを完全に信するまでは歸る決心がつかなかつた。かれはだから還境に順應して、この見込と希望とを抱いて塾長のもとへ歸つた。

シャルロッテの分娩は近づいた。かの女は益々部屋へこもりがちであつた。かの女のまはりにあつまつた婦人たちはごく親しい友だちばかりであつた。オティリエは、自分がなにをしてゐるかを考へることも殆んど出来ずに、家事をみてゐた。かの女は實際完全に諦めて、シャルロッテや子供やエドアルトのために今後でもできるだけ骨折りたいと思つてゐた。が、どうしたらさうできるかは分らなかつた。毎日その義務を果すほか完全な混亂からかの女を救ひ得るものはなかつた。

幸ひにも息子が生れた。婦人たちはみんな、父親にそつくりだと確言した。が、オティリエだけは、産婦にお祝ひをのべて子供に心からの挨拶をしたとき、私かにさうは思はなかつた。すでに娘の結婚の準備のときもシャルロッテは良人の不在をつよく感じてゐた。こんどはまた父

親は息子の誕生に際しても居合することができず、將來呼ぶべき名前をつけるわけにもいかなかった。

祝辭をのべにみえた最初の友人はミトラであった。かれはこの事件をすぐ知るために斥候を派遣しておいたのである。かれはやつて来た。しかも大へん上機嫌であつた。かれはオテリエの前でもその勝利を殆んど隠すことがなく、シャルロッテにたいして聲高にその考へを述べた。又、かれはあらゆる心配を除き、目前の障害を片附ける役目の男であつた。洗禮はながく延ばすわけに行かなかつた。片足墓に突つこんだ老牧師がその祝福によつて過去と未來を結びつけることになつた。子供はオットーと名づけられた。この子供は父親と友だちの名前以外にもつことは出来なかつたのである。

種々様々の疑惑、反対、躊躇、停滞、知つたか振り、異議、動搖、意見、すつたもんだを取除くにはミトラの決定的な押し強さが必要であつた。かういふ場合には普通一つの片附いた疑惑からまた新しい疑惑が起り、すべての關係をいたはらうとして幾らかの關係を傷ける場合が入つて来るからである。

通知状や名附親依頼の手紙は皆ミトラが引受けた。それはすぐ出来上らなくてはならなかつた。といふのは、かれがこの家族のために極めて重大だと思つてゐた幸福を他の、なかにはよく思はず悪い噂を立ててゐる世間に知らせることが極めて大切だつたのである。勿論これまで

の情熱的な出来事は、さうでなくても起ることはみんな噂をするためにだけ起るんだと思ひ込んでゐる世間に洩れてゐないではなかつた。

洗禮式は嚴肅にはあるが質素に簡潔に行はねばならなかつた。人々はあつまり、オテリエとミトラが洗禮立合人として子供を抱くことになつた。老牧師は寺男に支へられてゆつくりとやつて来た。祈禱が爲され、子供はオテリエの腕に抱かれた。そして、かの女が身を屈めて子供を見下したとき、その開いた眼を見て少からず驚いた。自分の眼を見るやうな氣がしたのである。かういふ一致はたれをも驚かさずにはゐないであらう。次に子供をうけ取つたミトラも、子供の顔に非常に著しい類似を、しかも大尉とのそれを見て、同様に驚いた。こんなものは他にいままで見たことがなかつた。

老牧師は自身が弱いため洗禮に普通以上に多くの禮拜式を添へることが出来なかつた。しかし、ミトラは対象で一杯になつて、以前の職掌を思ひ出してゐた。かれは概してあらゆる場合、自分ならどう言ふ、どう表現するといふやうなことを考へる風があつた。こんどかれは、まはりに全く友だちだけの小さな集りしか居なかつたので、餘計自分を制することが出来なかつた。かれはだから式の終頃、得意になつて牧師の代りになり、元氣な演説で教父の義務や希望を述べはじめた。そして、シャルロッテの満足げな顔附にその同意をみとめたやうに思つて、益々それをつづけた。

善良な老人が坐りたがつてゐることは元氣な演説者にはわからなかつた。まして、自分が大きな禍を惹起さうとしてゐるなどは考へなかつた。かれは子供に對する各列席者の關係を力を入れて述べ、オテ、リエの自制力をその際かなり試してみたりしたあとで、最後にかういふ言葉とともに老人の方を向いたのである。「御老體、あなたはシメオン(16)と共に言ふことが出来ま  
すぞ。主よ、爾の僕を安らかに逝かしめ給へ。わが眼はこの家の救世主を見たればなり、と。」  
かれはいまや全く輝かしくその演説を終らうとするところであつたが、間もなく、自分がそ  
の方へ子供を差出してゐた老人がはじめは子供のはうへ身を屈めるやうにみえたが、あとで  
ぐ後ろに倒れてしまつたのに氣づいた。倒れる身體をやつと支へられて、老人は安樂椅子に連  
れて行かれたが、人々はあらゆる應急の治療にもかかはらずかれを死んだものとせねばならな  
かつた。

誕生と死、棺と搖籃をこのやうに直ぐ隣り合せに見たり考へたりし、しかも想像力ではな  
く眼を以てこの恐るべき對立を同時に把握することは、まはりに立つてゐた人々にとつて、思  
ひがけないものであつただけに困難な問題であつた。オテ、リエだけは、まだやさしげな人を  
ひきつけるやうな表情を保つてゐる永眠した人を一種の羨望を以て見てゐた。かの女の魂の生  
命は殺されてゐた。なぜ、肉體ばかりまだ生きてゐなければならぬのだらうか？

かうして時々、この日の面白からぬ事件は、はかなさや別離や喪失等の想ひにかの女を導いた

が、これに反して不思議な夜の現象はかの女の慰めになつた。それはかの女に愛人の存在を確  
證し、かの女自身の存在をも確かにし又活氣づけた。夜になつて身を横たへてやすみ、甘い感  
情のなかでまだ夢現のうちを漂うてゐるとき、かの女はあたかも全く明るいがなごやかに輝い  
てゐる部屋を覗くやうな氣がした。その中にエドアルトが實にはつきりと見えた。いつものや  
うな服装ではなかつたが、軍装で、その都度姿勢が變つてゐた。が、完全に自然な姿勢で、空  
想的なものは身に帯びてゐなかつた。立つたり行つたり、横たはつたり、馬に乗つたりしてゐ  
た。極く小さな部分まで描きつくされてゐるこの姿は、かの女が少しもさうしようとしてゐ  
るとめたり、想像力をはたらかしたりしなくても進んでその前で動いた。時々かの女はまたか  
れがとくに、明るい背景よりは暗い、なにか動くものに取巻かれてゐるのも見た。が、かの女  
は影繪の區別が出来なかつた。それは人間や馬や樹や山脈やいろいろにあらはれた。いつも、  
かの女はこの現象を見ながら眠り込むのであつた。そして、靜かな夜のあとで朝眼が覺める  
と、元氣になり慰められてゐた。かの女はエドアルトがまだ生きてゐて、二人はまだ最も深い  
關係にあることを信じた。

## 第九章

春が来た。いつもより晩くはあつたが、また一層急激に、悦ばしく。オティリエはいまや庭園にその心づくしの結實を見た。すべての物は芽を出し、緑色になり、正しい時に花咲いてゐた。よく設備した温室や花壇のなかに準備されてゐるようなものが、ついに外からはたつきかける自然に向つてすぐに出て来た。働いたり、世話したりせねばならなかつたすべてのものがこれまでのやうに單に希望にみちた骨折にとどまらず、朗らかな楽しみになつた。

園丁をしかしの女は、ルチアネの亂暴のためできた盆栽の損傷や種々の樹の梢の均齊の破壊などについて慰めねばならなかつた。かの女はすべてはまたやがて回復するだらうと言つて勇氣をつけてやつた。が、かれはその職業についてあまり深い感情と純粹な觀念を持つてゐたので、この慰めの理由もあまり效を奏しさうになかつた。庭師が他の道樂や嗜好で氣を散らしてはいけないやうに、同様に植物が永續的な又一時的な完成のために要する靜かな進行も中斷されてはいけないものである。植物は頑固な人間に似てゐる。その人の流儀にしたがつて扱へば、すべてを得ることができるのである。あらゆる季節や時間に全く適切なことをしてやるための落着いた眼差と靜かな徹底は恐らく庭師ほど必要なものはあるまい。

この特性をこの善良な男は高度に持つてゐたが、そのためオティリエはかれと一緒に働くのが大へん好きであつた。が、その本來の才能をかれはもう暫くの間氣持よく使へないでゐた。といふのは、果樹園術や菜園術に關する一切のことや、舊式の裝飾庭園の要求は完全に果すことを心得てゐなければ——誰にも概してどちらか一方が成功するものであるが——、又柑橘類や花の球根や石竹や櫻草の株の取扱ひでは自然にさへ挑戦することが出来たのだが、新しい裝飾樹木や流行花卉類に到つては幾分縁遠かつたのである。そして、また、かれはその後に開かれた植物學の無限の分野とその中でぶつぶつぶ言つてゐる見知らぬ名前にたいしては一種の畏れを持つてゐて、それがかれを不快にしてゐた。主人が昨年手紙で注文しはじめたものを、かれは無駄な費用であり浪費だと思つた。そのためいろんな貴重な植物がなくなつたのを見、又あまり正直だとは思へない花屋とも何ら特別の關係になかつたので餘計さう思つた。

かれは種々の試みの後で、これについて一種の計畫を立てた。それが本來エドアルトの歸宅をもとにしたものであつただけにオティリエは餘計かれを勵した。エドアルトの不在をこの場合にも他のいろんな場合と同様人々は日まじに不利に感ぜずにはゐられなかつた。

植物はいまや益々根を張り枝を伸ばしてゐたので、オティリエもますます此處に縛りつけられた。丁度一年前かの女は見知らぬ者として、何でもない人間としてここに入つて来たのであつた。それからどんなに多くのことを得たことだらう。が、悲しいことにまたどんなに多くの



ものを再び失つたことであらう。かの女はこんなに富んでもゐず、又貧しくもなかつた。二つの感情が瞬間的にたがひに入れかはり、深く交叉して、手近なものを興味を以て、否、情熱を以て掴む以外に救ひ様がなかつた。

とくにエドアルトの好んだものがまた最もかの女の世話を受けたことは考へられる。實際、かれがやがて歸つて来て、不在の人にたいしてかの女がした入念な世話を感謝して眼の前に認めるやうに、どうして望んでいけないわけがあつたらう。

が、また、非常にちがつた方法でかの女はかれのために働かされた。かの女はとくに子供の世話をひき受けた。子供を乳母には渡さずミルクと水で育てることにきまつたので、益々かの女はその直接の守役になつた。子供はかういふ美しい季節に自由な空気を樂しむべきであつた。又、かの女は子供を外に連れ出すのを自分でも最も好んだ。そして、眠つてゐる無意識な子供を、やがてはその幼年時代にやさしく笑ひかけるであらうさまさまな花や、まだ若いから子供と一緒に伸びて行くやうに定められてゐるかのやうな若い灌木や植物の間を抱いて歩くのであつた。まはりを見廻したとき、かの女はどんなに大きな豊かな境遇に子供が生れたかを自分に隠さなかつた。眼のとどくかぎりのものがやがてはかれのものになるのだつた。このすべてに加ふるに、子供が父親と母親の眼の前で成長し、新しくされた悦ばしい結合を確證したらどんなに願はしいことであらう。

オテ、リエはこのすべてを實に純粹に感じたので、このことをもう決定的なものと實際に考へ、その場合自分のことは全然考へないほどであつた。この澄んだ空の下、この明るい日光の中でかの女には突然、その愛が完全になるためには、全く無我にならねばならないことが明らかになつた。實際、いろんな瞬間かの女はもうこの高みにまで達したやうな気がした。かの女はただ友だちの幸福を願ひ、かれが幸福でさへあれば、自分は諦めて二度と會はないでゐることも出来ることさへ考へた。が、かの女は決して他の人のものにはならないことをひとりで決心した。

秋が春と同様すばらしいものになるやうに心を配られた。すべての所謂夏の植物、秋になつても花が咲いて終ることがなく寒さにむかつて大膽に成長するすべてのもの、とくに翠菊が極めて多様に蒔かれ、到る所に植ゑられて地上に星空をつくるはずであつた。

#### オテ、リエの日記から

「讀んだよい考へや耳にした目立つたものを我々は日記に書きとめる。が、同時に、友だちの手紙から特色のある言葉や獨創的な見解や一時的の才智にとんだ言葉などを抜き書きしたら、どんなに豊かになることだらう。手紙を人はしまつて二度と見ない。つひには遠慮から破棄してしまふ。さうすると、最も美しく直接な生の息吹が自他共にた

いして取返しをつかないやうに消失することになる。私はこの怠慢を直すやうにするつもりだ。」

「かうして一年の物語が再び繰返される。我々はいま有難いことにその最も美しい章にゐる。董や黄精はこの本の題字か装飾模様のやうなものだ。人生の本の中でこれらの花を再び開けば、それはいつも快い印象をあたへる。」

「我々は貧乏人、とくに未丁年者を、彼等が路上にねて物乞ひをするとき叱る。が、仕事がありさへすれば彼等も活動的になることに氣づかない。自然がそのやさしい寶を開くや否や、子供たちは商賣をやり出す。誰ももう物乞ひをせず、みんながお前に花束を差出す。それはお前がまだ眠りから醒めないうちに摘んだのだ。物乞ひするものもその贈物と同様やさしくお前を見る。誰も要求していき、權利を感じるとき憐れには見えな

50」

「どうして一年はあるときは短く又或時はこんなにながいのだらう。どうしてこんなに短いやうに見えてゐて、思ひ出の中ではこんなにながいのだらう。私には昨年がさうであつた。無常なものと永續なものとが互につきあつてゐる様が庭園に於けるほど著しい所はない。が、一の痕跡も、自分と同様のものも残さぬものほどはかないものはない。」

「人は冬を甘んずる。樹が幽霊のやうに透明に我々の前に立つとき、人は一層自由に身を擴げるやうな氣がする。樹々は何物でもないが、また何物をも蔽はない。が、ひとたび蕾と花が出て来ると、葉がすっかり出て来て風景が形どられ、樹が一つの形體として我々に迫るまでは人はじれつたくなる。」

「その種類で完全なものはすべて種屬を超えてなにか他の比類なきものにならざるを得ない。ある音調では夜鳴鶯はまだ鳥である。が、かの女はその種屬を超えて、すべての鳥類に、本來歌ふとはどういふことかを暗示しようとするかに見える。」

「愛なき生活、愛人の近くにゐない生活は Comédie à tiroir 即ち悪い抽斗劇のやうなものだ。次々と抽斗を引き出して行つて、また引き入れ、次の抽斗に急ぐ。善いもの意義あるものがあらはれても、ほとんど聯關がない。到る所ではじめから始めねばならず、どこでも終りたくなる。」

## 第十章

シャルロッテのはうでは元氣で健やかだつた。かの女は逞しい子供を悦んだ。その多くを約束する姿はかの女の眼と心を絶えず働かせた。かの女はこの子供によつて世間と領地に對して新しい關係を得た。かの女の昔の活動好きはまたはじまつた。どこを見ても、かの女は過ぎた一年に澤山のことが爲されたのを見、その爲されたものを悦んだ。ある獨特の感情に活氣づけられて、かの女はオティリエと子供と一緒に苔張りの小屋に登つた。そして、子供を家庭の聖壇の上にのやうに小卓の上におろして、二つの席がまだ空いてゐるのを見たとき、かの女は以前のことを思ひ出して、自分とオティリエのために新しい希望が湧いて來るのだつた。

若い婦人は慎しく、恐らくあれこれの青年を見廻して、自分の良人に願はしいかどうかを祕かに試すものである。が、娘や女生徒の世話をせねばならぬ者はもつと廣い世界を見廻す。いまのシャルロッテがさうであつた。かの女には大尉とオティリエの結合が不可能には思はれなかつた。彼等は今以前にこの小屋で隣り合せて坐つてゐたのだ。大尉のあの有利な結婚の見込がまた失くなつたことをかの女は知らずにはゐなかつたのである。

シャルロッテは更に登つた。オティリエが子供を抱いて行つた。シャルロッテはいろんな考へに

耽つた。大地の上でもまた難波はあるものだ。できるだけ速かにそれから回復することが美しく賞讃すべきなのである。人生は全くただ損得をめざしてゐる。なにか計畫を立てて妨害されない者があらうか。一つの道に踏み入つて、それから外らされることがどんなに屢々あることだらう。又、一層高いものに達するためには、鋭く眼にとらへた目標から外らされることなどんなに多いことだらう。旅行者は途中で車輪を壊して非常に不快に思ふが、この不愉快な偶然によつてその全生涯に影響を與へるやうに極めて楽しい知合や結合に達する。運命は我々に希望を許すが、それは独自の方法でその希望以上のものをあたへるためである。

シャルロッテは丘の上の新しい建物に行き着くまでこんな風な考へをしてゐたが、其處でその考へが完全に實證されたのであつた。といふのは、周圍は考へることの出來たよりもはるかに美しかつた。すべての障壁になる小さなものはまはりから遠ざけられてゐた。自然や時間が増へたすべての風景の美點が純粹に現はれて眼に入つた。二三の隙間を埋め、別々になつた部分を氣持よく結びつけるやうにしてあつた若い植物はもう綠色になつてゐた。

家自體もほとんど住むことが出來た。とくに上の部屋からの眺望は極めて多様であつた。ながく見廻すほど美しいものが見出された。此處で、一日の様々な時間があたへないものが何があつたらう。月や太陽がもたらさない作用とて何があつたらう。此處に止めることは極めて望ましいことであつた。荒削りの仕事がみんな出來てゐるのを見たとき、シャルロッテはまたすぐ建

築と創造の慾望を目覺まされた。指物師と家具商と形板かたいたや軽い鍍金のできる塗師と、それが必要であつた。間もなく建物は出来上つた。地下室と料理場がすぐ設けられた。館からはなれてゐたのですべての必需品を集めておかねばならなかつたのである。かうして婦人たちは子供とともにいまや上に住んだ。新しい中心地としてのこの住居から思ひがけない散歩道がひらけた。かれらは満足してこの高い地域で美しい日和に自由な新鮮な空気をたのしんだ。

一人きりで又子供を抱いて歩くオティリエの一番好きな道は樂な小徑をプラターヌの方へ下つて行くのだつた。道はそこから湖を渡るによく使ふ小舟のつないである地點に導いてゐた。かの女は時折舟遊びをたのしんだ。が、シャルロッテが少し氣づかつたので子供はつれずに一人でであつた。が、かの女はまた毎日館の庭に園丁を訪れて、いまや自由な空気をたのしんでゐる澤山の苗木の世話にやさしく手傳ふことを缺かさなかつた。

この美しい時期に、ある英國人の訪問はシャルロッテに大へん好ましかつた。かれは旅でエドアルトと知合になつて二三度會ひ、非常によい噂をきく美しい遊園を見たいといふ好奇心を抱いてゐた。伯爵の紹介状を持つて来てゐたが、同時に静かではあるが大へん愛想のいい男を同伴者として紹介した。いまやかれはある時はシャルロッテとオティリエと一緒に、又あるときは園丁や獵師たちと、多くはその同伴者とともに、時にはひとりでその地方を歩き廻つて、その言葉からしてもかれがかういふ遊園の愛好者で通人であり、こんなものをいろいろ自分でもつ

くつたことのある人間だといふことがわかつた。年はとつてゐたが、生活の裝飾になり又生活を意義あらしめるやうなことには何にでも朗らかに加つた。

この人が居合すと婦人たちははじめて完全にその環境を味つた。かれの老練な眼はすべての効果を全く新鮮にうけ入れ、この地方をこれまで知らず又人がしたものと自然があたへたものがほとんど區別できなかつただけに餘計出来上つたものを悦んだ。

かれの言葉によつて遊園は成長し豊かになつたとも言へる。新しい伸び出す栽培植物の將來をかれは豫め知り得た。美を目立たせたり又加へたりすることのできる場所で氣づかない所はなかつた。清めると全叢林の裝飾になるやうな泉を指示したり、片附けて擴げると望ましい休息所になるやうな洞穴を教へたりした。又、二三本の樹を倒しさへすれば、洞穴からすばらしい重疊たる岩塊を見ることができた。かれはまだいろいろにする仕事の残つてゐるのをここに住む人たちに祝福して、急がないで今後幾年かのために創造と設備の楽しみをとつて置くやうにと言つた。

それにかれは社交の時間以外で面倒をかけることが全然なかつた。一日の大部分を、遊園の繪のやうな眺望を携帯用の寫眞機に收めたりスケッチをしたりして、旅行によつて自他共にたいて美しい成果を得るやうにした。かれはもう數年來あらゆる有意義な地方でこんなことをして、極めて氣持よく興味ある蒐集をつくつてゐた。携へてゐる大きな紙挟みをかれは婦人た

ちにみせて、繪や説明でたのしませた。かの女たちはこの淋しい生活のなかで世界をこのやうに氣樂に旅をして、岸や港や山、湖、河、都會、城砦、その他歴史に出て來るいろんな地方が眼の前を過ぎて行くのを見るのをよろこんだ。

二人の婦人はそれぞれ特殊な興味を持つてゐた。シャルロッテはより一般的で、歴史的に著明な場所を好み、オテリエはとくに、エドアルトがよく話しをし、止るのを好み、屢々歸つて行つた場所に心をとめた。すべての人は遠近の地方に、自分を惹きつけ、その性格にしたがつて、又第一印象やある種の事情や習慣などでとくに好ましく魅力のある個々の場所を持つてゐるからである。

オテリエはだから貴族に、どこが一番好きであり、もし選ばねばならぬとすればどこに住居を建てるかを訊いた。貴族はいくつかの美しい地方を示して、そこを好ましく價值あるものにした出來事を獨特のアクセントのあるフランス語で大へん氣持よく話すことができた。

では、いまは大抵どこに住み又どこに最も好んで歸るかといふ問ひに對して、かれは全く腹藏なく、しかし婦人たちには思ひがけなくかう答へた。

「私はいまでは到る所を家とすることに馴れてしまひましたよ。他人が私のために建て、植ゑ、家政の面倒をみてくれるほど氣樂なものはありません。自分の領地には私は歸りたいと思ひません。政治的な理由もあるのですが、とくに、私が本來すべてをそのために爲し又設備

し、それを讓つて一緒にたのしむと思つてゐた私の息子が、何物にも興味を持たず、他の人たちのやうに乗るかそるかやつてみるためにインドに行つてしまつたからなのです。

たしかに、私たちは人生であまり準備のための出資をしすぎます。適度な状態で樂に暮さうとするかはりに、いつも遠方へ行つて益々不便になるのです。いま私の建物や遊園や庭園を誰がたのしんでゐるのでせう？ 私や家族ではなくて、見知らぬお客や好奇的な人や落着かない旅人です。

澤山の手段をつくしてみても、私共はいつも半分半分家にゐるやうな氣持です。とくに都會で馴れたいろんなものが缺けてゐる田舎ではさうです。最も熱心にのぞんでゐる本が手許になく、最も必要なものが忘れられてゐます。私共はいつも家庭的な設備をしますが、また出て行くためなのです。意志や氣儘でしなれば、事情や情熱や偶然や必然やその他すべてのものがさうさせるのですよ。」

貴族は自分の考察によつて婦人たちがどんなに深く心を打たれたかを氣づかなかつた。いつもは事情が分つてゐるやうな社會でさへも一般的な考察を述べる人は屢々かういふ危険に陥るものである。シャルロッテには、好意や善意の人によつてこんな風に偶然に傷つけられることは物珍らしくなかつた。世界はさうでなくてもかの女の眼の前には明瞭であつたので、たとへ人が考へもなく不注意にかの女の眼差をどこか好ましくない場所へ向けさせても、とくに苦痛は

感じなかつた。が、これに反して、半意識的な若さで見るとも豫感し、見たくないものや見るべきものでないものから眼を外らしても差支へなく又外らさずにはゐられなかつたオティリエは、この打解けた話で恐るべき状態に置かれた。この話のはかの女の眼前から強力に優美なヴェルを引裂いたのである。そして、かの女にはあたかも、これまで家屋敷や果樹園や遊園や全周囲に對して爲された一切が、そのすべてを所有する人がそれを味はず、現在の客のやうに世界を放浪し、しかも最も危険な放浪をするやうに最も愛する者や近親の者から迫られてゐる以上は、本來全く無意味かの如く思はれた。かの女は聞いたり沈黙したりすることには馴れてゐたが、こんどは世にも痛々しい状態であつた。それは、客がその朗らかな性質や悠長さで更につづけた話によつて減ぜられるよりも増大された。

「ところで、私は正しい道にゐるんだと思つてゐます。」かれは言つた。「多くを楽しむために多くを諦める旅人と自分をいつも見做すからです。私は變化に馴れましたし、實際それは要求になつてゐるくらゐです。丁度、オペラでもう澤山のものを見たためにいつも新しい裝飾を待つやうなものです。最上の又最悪の宿屋に期待できるものは私には知れてゐます。よくても悪くても、どこにも馴れたものなどはありません。結局、必然な習慣が極めて氣儘な偶然に任せきりにするといふ一事に歸着します。少くとも、私はいまでは、なにかを置き違へたとか忘れたとか、日常の部屋を修繕せねばならぬために使へないとか、愛用の茶碗をこはして何時ま

でもほかの茶碗では味がなにかいふやうな不快はありません。そんなものは超越してしまつたのです。頭の上で家が燃え出しても、私の雇人が荷造りをし荷積みをして、中庭や町へ出て行くだけです。このやうにいろんな利益があるにもかかはらず、精確に計算してみると、一年の終りに家にゐるよりも多く出費したことはなりません。」

この話を聞いてゐてオティリエはただエドアルトの姿のみを眼の前に浮べた。缺亡と困難に耐へて道のない道を進み、危険や困苦を冒して戦陣に横たはり、非常な不安定と冒険のなかに故郷も友もなく、ただ失はざらんためにすべてを放擲するに馴れてゐるその有様を思ひ描いた。幸ひに暫くの間一同は別れた。オティリエは獨りで泣き盡すひまがあつた。いかなる陰鬱な苦痛もこの明瞭さほどつよくかの女を掴むものはなかつた。かの女はそれをますます明瞭にしやうとした。ちやうど、苦しめられはじめると、人は自分で自分を苦しめがちであるやうに。

エドアルトの状態はかの女には實に苦しくみじめなものに思へたので、どんな價を拂つても、シャルロットとかれを再び結びつけるためにすべてを捧げ、自分の苦痛と愛はどこか静かなところに隠し、何らかの活動でごまかさうと決心した。

その間に、貴族の同伴者は分別のある落着いた人で又よい観察者であつたので、話の失策に氣がついて、事情の似てゐることを友に明らかにした。貴族は家族の關係についてはなにも知らないのであつた。が、同伴者は、自然的な又人爲的な關係や、法則的なものと無拘束なもの、

悟性と理性、情熱と偏見との葛藤によつて惹起される珍らしい事件に最も興味を持つてゐたので、既に以前から、家に來て一層、既に起つたことやまだ起りつつあることをすつかり知つてゐたのであつた。

貴族は氣の毒に思つたが、當惑はしなかつた。時折はかふいふ場合に立至つてはいけないとすれば、人中では全然黙つてゐなければならぬだらう。といふのは、重大な言葉ばかりでなく、些細な言葉でも列席者の利害と非常に調子悪くかち合ふものだからである。「今夜償ひをしようぢやありませんか。」貴族は言つた。「一般的な話は避けませう。そして、旅行中あなたの紙挟みや記憶を豊富にされたいろんな氣持のいゝ意義のある逸話や物語を少しみんなに聞かせておやりなさい。」

が、最善の計畫を以てしても、この外國人たちには、こんどは危険のない話で友だちをたのませようといふ考へは成功しなかつた。といふのは、同伴者がいろんな珍らしい、意義のある、朗らかな又涙ぐましい、恐しい話でみんなの注意を喚起し、非常に興味を緊張させたあとで、變つてはゐるがもの軟らかな出來事の話で終りにしようとしたのだが、かれはこの話が聞き手にとつてどんなに縁の近いものであるかを氣づかなかつたのである。

#### ふしぎな隣同士の子供

立派な家の二人の隣同士の男の子と女の子が、いづれは夫婦になるにもほどよい年齢であつたので、このたのしい希望のうち一緒に育てられ、雙方の両親も將來の縁組を楽しんでゐました。が、間もなくこのもくろみもうまく行かないらしいことに氣づきました。二人のすぐれた性質の子供の間に奇妙な敵意があらはれたのです。恐らくお互にあまり似すぎてゐたからでせう。二人とも内省的で、自分の意慾がはつきりしてゐて、固く自分の計畫を守つたのでした。そして、どちらも遊び仲間可愛れ尊敬されてゐました。が、二人が一緒になるといつも敵同士になり、自分だけを立てて、出遭ふごとに毀し合ひ、一つの目的に向つて競争することをせず一つの目的のために戦ひ合ふのでした。あくまで善良で愛らしかつたのですが、お互のこととなるとただ憎み合ひ、惡意を持つのでした。

この不思議な關係はもう子供の遊びの頃からあらはれてゐましたが、年をとつてもさうでした。そして、男の子たちは戦争ごつこをして、敵味方にわかれて合戦をするのがつねでしたが、あるとき、反抗的で勇氣のあるこの女の子が一隊の先鋒となつて、非常に強く憎惡をこめて戦つたので、もしその唯一の敵手である男の子が大へん勇敢に踏止つてついに相手の武器を奪ひ、捕虜としなかつたなら、味方は恥づかしくも逃げ出さねばならぬところでした。が、女の子はそれでもまだはげしく防いだので、男の子は自

分の眼を守り、相手に怪我をさせないために、自分の絹の首巻を引裂いて女の子の両手を後ろに縛り上げねばなりませんでした。

このことを女の子はけつして許さうともしませんでした。そればかりでなく、男の子を傷けようと祕かな企みや試みをしてゐました。それで、この奇妙な情熱にとうに氣づいてゐた両親たちはお互に諒解しあつて、二人の敵同士を別れさせて、あの好ましい希望も捨てることにきめました。

男の子は新しい境遇のなかでやがて頭角をあらはしました。あらゆる授業が効果を發揮したので。そして恩人達の考へと本人の好みで軍人になることにきめました。どこでも、かれは愛され尊敬されました。そのすぐれた性質は他人の幸福と安樂のためにのみはたらくやうに思はれました。そして、かれは、自然があたへようと考へてゐた唯一の敵手を失つたことを、はつきりと意識はしなくても、心の中で本當に幸福なのでした。

女の子はこれに反して突然變つた状態に入りました。その年齢と、加つていく教養と、さらに一種の内的感情が、これまで男の子たちとしてゐたはげしい遊びからかの女をとほさけました。全體としてかの女にはなにかが缺けてゐるやうに見えました。その憎みを起すに價するものはまはりになく、又、誰一人愛するに足ると思ふものもなかつた。

たのです。

かの女の以前の隣の敵手よりも年上で、身分も財産もあり、重要な人物で、社交界では愛され、婦人たちに追ひ廻されてゐる一人の青年が、かの女にその愛情のすべてを傾けました。一人の友、戀人、奉仕者がかの女に心を砕いたのはこれが最初でした。かの女よりも年上で教養もあり輝かしく氣位の高い女たちよりも自分を優れたものとしてくれたことが大へんかの女をよろこばせました。押しつけがましくならないかれの持續的な熱心さ、いろんな不愉快な偶然の場合に於ける忠實な助力、まだかの女があまり若いために両親に對してはつきりと言つてはあがるが、落着いた、將來に希望をこめた求婚、

——このすべてがかの女の心をかれに向けさせたのです。これには又、習慣や、世間からは分りきつたものにとられてゐる外的な關係やかの女の家族の人たちが與つて力がありません。かの女は屢々花嫁と呼ばれ、自分でもついにはさう思ひこみました。そして、こんなに永い間花婿としてとほつてゐた人と指輪をかはしたとき、まだ一つの試みが必要であらうなどは、かの女自身も、又他のたれも思ひもありませんでした。

事柄全體がとつてゐた静かな歩みは約婚によつても急がせられることはありませんでした。雙方とも一切を放つたらかしておきました。一緒に生活するのをよろこんで、美しい季節を將來の眞面目な生活の春としてまだ思ふ存分楽しみたいと思ひました。



一方、遠方へ行つた人は見事に教養を身につけて、職務の相當の階梯に上り、賜暇を得て家族を訪問にやつて來ました。全く自然に、が、奇妙な工合に、かれはその美しい隣の娘と再び向き合ひました。かの女は最近は何管優しい花嫁としての家庭的な感情を育て、周囲のすべてともよく融け合つてゐました。かの女は幸福だと信じ、又ある意味で幸福でした。が、いまや、永い時を経て再び初めて何物かがかの女に向き合ひました。それは憎むに價するものではありませんでした。かの女は憎むことは出來なくなつてゐたのです。實際、もともと内的價値のぼんやりした承認にすぎなかつたあの子供つばい憎悪はいまや、悦ばしい驚愕、楽しい觀察、好意ある承認、なかば好みなかば好まざるものであるが必然的な接近となつてあらはれたのです。そして、このすべては相互的なものでした。ながくはなれてゐたことがながい會話の動機となりました。あの子供つばい無茶でさへいまやよく物の解つた二人には冗談まじりの思ひ出話に役立ちました。まるで、あの意地の悪い憎しみは少くとも友情のある注意深い取扱ひで償はねばならぬかのやうな、あのはげしい誤解もはつきりと認め合はずにはゐられないかのやうな工合でした。

青年のはうではすべてが理性的な望ましい程度に止つてゐました。その地位、事情、努力、名譽慾が大へんかれの心を占めてゐたので、美しい花嫁の親切を感謝すべき添へ

物として快くうけ、かの女をそのため自分との何等かの關係に於て見るとか、又は花嫁にかの女をやりたくないとかいつたやうな風はみせませんでした。それに、花婿ともかれは大へん仲よくしてゐたのです。

娘のはうではしかし全く様子がちがつてゐました。かの女は夢から覺めたやうな氣がしたのです。若い隣人に對する戦ひは最初の情熱なものでした。そして、このはげしい戦ひも實はただ反抗の形でのげしい、言はゞ生れながらの愛着だつたのです。又、思ひ出の中でもかの女はいつもかれを愛してゐたやうにしかおもへませんでした。かの女は武器を手にして敵意を以て相手の心を探つたことを微笑しました。かの女はかれに武器を奪はれたときのあの又となく心地よい感情を思ひ出さうとしました。かれに縛られたとき、最大の祝福を受けたやうに空想しました。そして、かれを傷け怒らせるために企てたすべてのことは、かれの注意を引くための無邪氣な手段にしか思へませんでした。かの女はあの別れを呪ひました。自分が陥つた眠りを悲しみました。つまらない花婿が出來るやうになつただらだらした夢のやうな習慣を呪ひました。かの女は變つたのです。二重に變つたのです。前へか後へか、それは人の思ふままです。

もし、かの女が全く祕密にしてゐるその感情を繰りひろげて、ともに感じることできたならば、その人はかの女を叱つたりはしないでせう。なぜなら、二人並べて見ると、

花婿は勿論この隣人との比較に耐へなかつたからです。一方にある種の信頼を否定できなかつたとすれば、他方は完全な信頼を起させました。一方を話相手にしたくなるとすれば、他方は伴侶にしたいと思ひました。そして、より高い協力、非常の場合を考へるとき、他方が完全な確實さをあたへるとすれば、一方は疑ひたくなりました。かういふ事情にたいしては、婦人たちには特別の勘が生れながらにあります。そして、かの女たちはそれを育て上げる理由と機會を持つてゐるのです。

美しい花嫁が全く秘かにかういふ考へを育てれば育てるほど、又、花婿のためになるやうなことで、事情がすすむ義務が命じるやうなことで、變へがたい必然が取消しやうもなく要求するやうにみえること、それらを人が口にする場合に立至ることが少ければ少いほど、美しい心はますますその片寄つた考へをよいとしました。そして、一方ではかの女が世間や家族や花婿や自分自身の約束やによつて解きがたく縛りつけられ、他方では向上を目指す青年が自分の考へや計畫や希望を少しも秘密にせず、忠實ではあるが情愛に溺れることのない兄としてのみかの女に對し、しかもいまやその差迫つた出發をさへ口にしたので、あだかも、かの女は、以前の子供つばい精神がそのあらゆる陰險さと兇暴さを以て目覺め、いまやより高い生活段階に於て一層重大に破壊的にはたらかうといふ憤激を以て武装したかの如くでした。かの女は、以前は憎み、いまではこのやうに愛

する者の冷淡を罰し、かれをわが物とするわけには行かないから、少くともその想像力と悔恨と永遠に結婚するために、死なうと決心しました。かれをかの女の死んだ姿からのがれさせないでやらう、かの女の考へに氣づかず、究めもせず、たふとびもしなかつたことをたえず自ら責めさせてやらうといふのでした。

この奇妙な妄想は到る所でかの女に付き纏つてゐました。が、かの女はそれをあらゆる形式のもとに隠しました。それで、人に不思議に思へることはあつても、たれもその内心の原因をあばくほど注意深く又賢いものではありませんでした。

その間に、友人、親類、知己等はいろんな祝祭の準備に精魂を盡してゐました。一日でもなにか新しい思ひがけないものが催されないので過ぎることはありませんでした。又風景の美しい場所で飾られない所、澤山のたのしげな客の響應のために準備されないところはありませんでした。また例のやつて來た若い青年もまだ出發前に自分の禮儀をつくしたいと思ひ、若い一組を近親の者とともに舟遊びに招待しました。人々は大きな美しい、よく飾つた舟に乗り込みました。小さな廣間と二三の部屋があつて、陸上の便宜を水上にも移すやうにしたヨットの一つでした。

舟は大きな流れを鳴物入りで進んで行きました。一行は暑い晝間なので下の部屋へ集つて、智恵遊びや幸運遊びを楽しみました。少しでもちつとしてゐることの出来ない若

い主人は舵のところに坐つて、年寄の船長の代りをしました。船長はかれの傍に眠り込んでしまつたのです。そして、ちやうど、見張りのこの若主人は、二つの島が河床を狭めて、平らかな小石の岸を或は一方から、或は他方から突出して危険な水路をつくつてゐる場所に近づいたので、その全注意力をもちひねばなりませんでした。注意深く眼の鋭いこの舵手はほとんど船長を起したくなりました。が、勇を鼓して、狭い所に進んで行きました。この瞬間、甲板の上に花環を髪にのせたあの美しい敵手が現はれました。かの女は花環をとつて舵手の方に投げました。「記念にこれをお取りなさい！」かの女は叫びました。「僕の邪魔をしてはいけません。」かれは花環をとり上げながらかの女に叫びました。「いま力一杯に氣をつけてなければならぬですから。」「もうお邪魔はいたしませんわ。」かの女は叫びました。「もう二度と私に會へませんよ。」さう言つて、かの女は舟首に急いで、そこから水中にとび込みました。二三の聲が叫びました。「助けて！助けて！溺れますよ！」かれはひどく狼狽してしまひました。騒ぎを聞きつけて年寄の船長は眼を覺まし、舵をつかまうとし、若い主人は渡さうとします。が、もう舵手を換へるひまがなくて、船は坐礁しました。そして、ちやうどこの瞬間、一番重荷であつた着物をかなぐり捨てて、若主人は水中にとび込み、美しい敵に向つて泳いで行きました。

水は、それをよく知つて取扱ひかたを心得てゐる者には親切な元素です。水はかれを運び、熟練した泳ぎ手は水を征服しました。間もなく、かれは前方に押し流されてゐる美しい人に追ひ着きました。かれはかの女を捕へ、持ち上げて運ぶことが出来ました。二人は流れにつよく押し流されてゐたので、ついに島や中洲はずつと後ろになつて、河はまた廣くゆつたりと流れはじめてゐました。いま、やつと、かれは勇氣が出て、何の考へもなく機械的に振舞つてゐたのつびきならぬ急場から脱れ出てほつとしました。かれは頭をもたげてまはりを見廻し、氣持よく又都合よく流れの中に突出してゐる平たい藪の所へ懸命になつて泳いで行きました。そこで、かれは美しい獲物を陸に下しました。が、もう生の息吹は感じられませんでした。かれは絶望しましたが、そのとき藪の中を通つてゐる人の踏みならした小徑がさつと眼にとまりました。かれは再び大切な荷物を負うて行き、間もなく淋しい一軒の人家を見つけて辿り着きました。そこには善良な人たちが、若い夫婦がゐました。不幸と困窮とはすぐわかりました。少し考へたあとでかれがとめたことはすぐしてもらへました。明るい火が燃え、毛布はベットのの上にひろげられ、毛皮や獣皮や温めるやうなもので貯へてあつたものはみんなすぐ持ち出されました。ここでは救はうといふ慾望がほかのすべての考へに打ち勝ちました。美しい、なかば硬くなつた裸の體を生き返らせるためにおろそかにされたものは何一つありません

でした。ついに、成功しました。かの女は眼を開けて、友を見つけ、天上のものやうな腕でその頸を抱きました。ながい間かの女はさうしてゐました。眼からは涙の流れが逝つて、回復を完成しました。「あなたは私をお見捨てになるの？」かの女は叫びました。「かうして、またあなたを見つけ出したといふのに。」「決して！決して！」かれは叫びました。そして、何を言ひ、また爲たか分りませんでした。「ただ、からだを大切にしてくれ。」かれは附加へました。「からだを大切に、自分のことを考へるんです。あなたと一緒に私のためにも。」

かの女はいまや自分のことを考へて、自分がいまだどういふ状態にゐるかをやつと氣づきました。かの女は愛する人、自分を救つてくれた人の前で恥づかしいとは思ひませんでした。が、かれが自分の身の心配をするやうに、よろこんでかれをはなしました。かれの着てゐたものはまだ濡れて滴つてゐたのです。

若い夫婦は相談をしました。夫は青年に、妻は美しい娘にかれらの婚禮の衣裳を提供しました。それはまだ完全に保存されてゐて、この一組の人たちを頸から足まで、内から外まで装はせることができました。間もなく二人の冒険者は着物をきたばかりでなく、着飾つたかたちになりました。かれらはこの上もなく愛らしく見え、歩み寄つたとき、お互を驚いて見つめ、溢れるやうな情熱を以て、變装をしかしなれば可笑しがりなが

ら、はげしく抱き合ひました。青春の力と愛の昂奮がかれらを僅かな間にすつかり回復させ、二人をダンスに誘ふには音楽だけが缺けてゐる有様となりました。

水上から陸上へ、死から生へ、近親の中から荒野へ、絶望から有頂天へ、冷淡から愛着へ、情熱へと移る自分を見出し、そのすべてがまことに一瞬であつたので、それを把握するには頭は十分でなかつたくらゐでした。頭は恐らく割れるか亂れてしまふかしたでせう。このやうな驚愕を耐へねばならないとすれば、心臓はその最善を盡さねばなりません。

全く互の中にとけ入つて、暫く経つてやつと二人は後に残して來た者の不安や心配を考へることができました。その人たちにどうしてまた會ふか、かれら自身殆んど不安と心配なしではゐられませんでした。「逃げようか？ 隠れようか？」青年は言ひました。「一緒に居ませうよ。」かの女はかれの頸にぶら下りながら言ひました。

かれらから舟が坐礁した話を聞いた農夫は、それ以上を訊かずに、岸へ急ぎました。幸ひ舟はこちらへ浮んで來てゐました。やつとのことで離礁したのです。人々は確かな當てもなく、失くなつた者を發見する希望で進んで來たのでした。だから農夫が呼聲や手招きで舟の人たちの注意を惹いて、工合のいゝ上陸場のある場所に走り、なほも手招きや叫びを止めなかつたとき、船は岸の方へと向きました。かれらが上陸したとき、何

といふ劇的場面でしたらう。二人の約婚者の両親がまづ第一に岸にとび上りました。花婿はほとんど氣を失つてゐました。かれらが二人の子供が救はれたことを聞くか聞かぬうちに、二人は奇妙な服装をして藪から歩み出て來ました。二人がすっかり出て來るまではしかし誰か分りませんでした。「誰でせう？」母親たちは叫びました。「何だらう？」父親たちは叫びました。救はれた者たちはかれらの前に身を投げました。「あなたがたの子供です。」かれらは叫びました。「夫婦です。」「お許し下さい！」娘は叫びました。「祝福して下さい！」青年は叫びました。「祝福を下さい！」二人が叫びました。そして、皆はただ呆氣にとられて息をのみました。「あなたがたの祝福を！」三度目にひびきました。たれがそれを拒むことができたでせう。

## 第十一章

話し手が中休みを、といふよりも語り終つたとき、シャルロッテが非常に感動してゐるのに氣づかねばならなかつた。實際かの女は立上つて、黙つて會釋したまま部屋を立去つたのである。その話のかの女はよく知つてゐたのであつた。この出來事は大尉とその隣家の娘とに實際起つたことであつた。全く英國人が話した通りではないにしても大體は歪められてゐなかつた。ただ、はじめ衆人の口を、それから才智や趣味の豊かな話し手の空想の中を通るこの種の話のつねとして、細かな部分ではむしろ拵へ物で飾り立ててあつた。そして、結局大概すべてがあまりの儘であるとともに、一つもその通りではないのである。

オテ、リエは、二人の客たちも頼んだので、シャルロッテについて行つた。こんどは貴族が、たぶんなにかまた失策をしたらしい、なにかこの家の人が知つてゐるか又全く親しいことを話したらしいといふ番であつた。「この上もう禍を起さぬやうに注意しなくてはいけませんね。」かれはつづけた。「ここで我々がうけたよい事や氣持のいいことの代りに、婦人たちに我々はほとんど幸福をもたらしてはゐないやうですな。うまい工合にお暇をすることにしませうか。」「私は白狀しなくてはなりません、」と同伴者は言つた。「ある事で私はまだここを動けな

いんです。それを明らかにして詳しく知るまではこの家を去りたくありません。昨日そら、私共が携帯寫眞器を持つて遊園を歩いたとき、あなたは眞に繪畫的な立場を選ぶのに忙しくて、側で起つてゐることにはお氣づきになれなかつたやうですね。あなたは魅惑的な對岸の見える湖のあまり人の行かない場所に行くために本道をお外れになりました。私共と一緒にティリエさんがついて行かうと立上つて、そこへ小舟で行かして呉れと頼まれました。私はあの方と一緒に舟に乗つて、美しい漕ぎ手の熟練ぶりをたのしんだのです。私はあの方に、魅力のある娘が船頭の代りをする瑞西以來こんなに氣持よく波の上を揺れたことがないと言つてやりましたが、一體どうしてあの側道を行くのをお拒みになつたかを訊かすにはゐられませんのでした。實際あの方が避ける様子には一種の不安げな當惑があつたからです。「お笑ひにならないのでしたら、」とあの方はやさしくお答へになりました。「少しお話することもできますわ。尤も私にも不思議なんです。私はあの側道を通ると、いつもはどこでも感じることはない自分でも説明のつかない全く奇妙な震へに襲はれないことはありません。ですから私はむしろさういふ感じに身を曝すのを避けるんですわ。ほかの時もとき折おこる左側の頭痛がすぐはじまるものですから尙更ですわ。」私たちは上陸しました。オヂェさんはあなたとお話になりましたね。その間に私はあの方が遠方からはつきりとおしめしになつた場所を調査したのです。非常にはつきりとした石炭の痕跡を發見したとき、私の驚きはどんなに大きかつたでせ

う。少し掘れば恐らく深部には豊かな鑛層があるだらうと私は確信したのです。

失禮ですが、あなたはお笑ひになつてゐますね。あなたが信用なさらないこんな事にたいする私の情熱的な注意を賢い人又友人として大目に見ていらつしやることはよく分ります。だが、あの美しい娘さんに振り運動を試験してみずに此處を立去ることは私には出来ません。」

この事が話し出されると、貴族がその反對理由を繰返し主張しないことはいちどもなかつた。同伴者は遠慮深く辛抱してそれを聞いてゐた。が、結局、かれは自分の意見や希望を固執した。又、かれは、かういふ試験はたれにも成功するものではないからこそ取止めてはいけないのだ、否むしろ益々眞面目に根本的にやつてみなくてはならないのだと説明してきかせた。それに、きつと、いまでは我々に隠されてゐる、無機物相互の、有機物の無機物に對する、又有機物相互のいろんな關係や類縁がその場合明らかになるだらうから、と。

かれはいつも美しい小箱に入れて携帯してゐる黄金の輪や白鐵鑛やその他の金屬でできた裝置をもう擴げて、絲で吊した金屬を、下に置いてある金屬の上に試みに下した。「あなたのお顔で讀めますが、私がかうしても何も私のために動かうとしないのをいゝ氣味だと思ひになつてもまあよろしうございます。」かれは言つた。「ですが、この作業はほんの口實に過ぎないんですよ。婦人たちがお歸りになれば、私共がここでどんな不思議なことをはじめるかと好奇心を起させてやるんです。」

婦人たちは歸つて來た。シャルロツテはすぐどんなことを知つた。「私はこのことはいろいろ噂に聞いて居りますわ。」かの女は言つた。「ですけど、まだその作用を見たことはございませんの。こんなに立派に全部用意ができてるんですから、私にも效目があるかどうかやらしてみて下さいな。」

かの女は絲を手にとつた。かの女はまじめであつたので、氣持を動かさずちつとそれを持つてゐた。が、少しも動搖はみとめられなかつた。次にオテ、リエが促された。かの女はもつと落着いてこだはりない氣持で又もつと無意識に下にある金屬の上に振子を吊した。が、瞬間、吊してある金屬は鮮かな渦に巻き込まれたやうで、下敷を變へるごとに、或は一方に或は他方に、圓形に又楕圓に回轉し、又は一直線に揺れたりした。同伴者が豫期したとほりであり、實際豫期以上の結果であつた。

貴族すらも少し驚いた。が、一方は面白さと貪慾さから終るところを知らず、たえず實驗を繰返したり多様にしたりすることを求めた。オテ、リエも愛想よくその求めに従つてゐた。が、ついにかの女は、また頭痛がするから放免してもらひたいとやさしくたのんだ。かれはそれに驚き、否、有頂天になつて、熱心にかの女に、自分の治療術を信用さへしてくればさういふ病氣を完全に癒してあげたいと確言した。人々は瞬間不安になつた。が、シャルロツテはすばやく何の話かを知つて、その好意ある申出を斷つた。かの女はまだつよい疑惑を感じてゐるやう

なことを自分の周圍に許すつもりはなかつたのである。

外國人は立去つた。そして、皆がかれらのために奇妙に感動させられてゐたにもかかはらず、またどこかで會ひたいといふ希望を残して行つた。シャルロツテはいまや美しい日を利用して、近隣への返禮を終へやうとした。周圍の地方全體の人々が、ある者は本當に同情して、或は單に習慣からこれまで熱心にかの女の世話をしてくれたので、なかなか返禮をすますることが出来なかつたのである。家では子供を見ることがかの女を元氣づけた。たしかにあらゆる愛と心配とに價する子供であつた。不思議な子供、否、神童ともいふべきであつた。見た眼にも非常に好ましく、大きさや釣合や強さや健康でもすば抜けてゐた。そして、さらに人を驚かしたのは、益々發達して來たあの二重の類似であつた。顔立や姿全體から言へば、この子供は益々大尉に似て來た。が、眼は益々オテ、リエの眼と區別できなくなつた。

この珍らしい類似と、恐らく又それ以上に、愛する男の子供をたとへ他の女の生んだものでもやさしい愛著を以て抱く婦人の美しい感情とにみちびかれて、オテ、リエは育つて行く子供にたいして母にも等しいものになつた。否、むしろ、別種の母になつた。シャルロツテがゐなくなる、オテ、リエは子供と侍女ときりでゐた。ナンニイは暫く前から、女主人が全愛情を傾けるやうに思はれる子供に嫉妬して、反抗的にかの女から遠ざかり、兩親の許に歸つてゐた。オテ、リエは子供を戸外に連れ出すことをつづけて、だんだん遠い散歩に馴れて來た。かの女

は子供に必要なときはのましてやるために牛乳場を携へてゐた。又、同時に本を持つて行かないことも減多になかつた。かうして、かの女は、子供を腕に抱いて、本を讀んだりさまよつたりしながら、全く優美な「思ひに沈む人」<sup>(20)</sup>を形づくつてゐた。

## 第十二章

出軍の主要目的は達せられた。エドアルトは勳章で飾られて、名譽の除隊となつた。かれはすぐあの小さな莊園に歸つた。そこで、かれは自分の家族についての詳しい報告を得た。家族の者が氣づいたり知つたりしないやうにして、鋭く觀察させておいたのである。靜かな棲家はかれにこの上もなく親しい眼差を向けた。かれの不在中その指圖にしたがつてゐるんな設備がされ、改善され、進捗させられてゐたのである。このため、庭園と周圍が廣さや幅で缺けてゐるものを内的なもの、差當り享樂できるものによつて償はれてゐた。

慌しい生活を経て果斷な歩みに馴れたエドアルトは、十分永く熟考する暇のあつたことを實行しようとしてた。まづ第一にかれは少佐<sup>(21)</sup>を呼び寄せた。再會の悦びは大きかつた。若い日の友情は血縁と同様に、どのやうな感情の行違ひや誤解があつても根本的に傷けられることがなく、古い關係が暫くするとまた回復するといふ著しい長所を持つてゐる。

歓迎のためにエドアルトは友人の狀態をたづねて、その希望通り完全に幸福に恵まれてゐることを聞き知つた。なかば冗談に、エドアルトは打解けて、よい縁談が進行してゐるのではないかと訊いた。友は非常に眞面目にそれを否定した。



「僕は打明けずにもわられないし、打明けずにはよくないとも思ふんだが、」エドアルトはつづけた。「君に僕の考へと計畫をすぐにもぶちまけなくてはならないよ。君はオティリエへの僕の情熱を知つてゐるし、僕を戦争につき落したのはあの人だといふこともとくに解つて呉れてゐる。僕は、あの人なしでは何の役にも立たぬ命を捨てようと思つたことは否定しない。が、同時に、完全に絶望することも出来なかつたことを君に白状しなくてはならないんだ。あの人との幸福はあまりにも美しく願はしく、完全に諦めるなんてことは僕には不可能だつたんだ。いろんな慰めになるやうな豫感や、朗らかな兆が、オティリエが僕のものになるといふ信念と妄想をつよめてくれた。僕たちの名前の頭文字のついてゐるコップは、定礎式るとき空中に投げられたが碎けてはしまはなかつた。それは掴まれて、また僕の手に戻つたのだ。だから僕は自分を、この淋しい所でいろんな疑惑のときを過したとき自分に呼びかけたんだが、自分をコップの代りにして、僕たちの結婚が可能かどうかといふ印にしたいと思つたんだ。僕は出掛けて行つて、死をためす。狂暴な人間としてでなく、生きたいと思ふ人間として。オティリエは僕が戦ひもとめる懸賞になるべきだ。あの人こそあらゆる敵對する戦鬪隊列の背後で、あらゆる堡壘、包圍された城塞の中で僕が獲得し、征服しようと思ふものだ。この感情が僕をみちびき、あらゆる危険のなかをたすけて呉れた。が、いまや僕は自分を、目的に到達し、あらゆる障害を克服し、もはや遮るもののない人間のやうに思ふ。オティリエは僕のもんだ。この考

へと實行との間になにかあらうと僕は何ら重大なものと思ふことは出来ない。」

「君は人が反對することが出来、又當然反對すべきことを一息か二息で吹き消してしまふね。」少佐は答へた。「が、それは繰返さねばならないんだ。君の奥さんへの關係をその價值全體に於て呼び返すことは君自身に委せる。が、この際、君が奥さんに對して、又君自身に對して責任のあることは、この點についてぼんやりした考へでゐてはよくないことだ。君たちに息子さんが生れたことを考へただけでも、君たちは永久にお互のものであり、この生れた者のために、その教育と將來の幸福を一緒になつて世話できるやうに共に暮す責任があると言はずにはゐらないね。」

「それは両親の暗愚にすぎないよ。」エドアルトは答へた。「自分たちの存在が子供にとつてそんなに必要なだと空想するのはね。生きてゐるものはすべて食物と扶助を見出す。息子が父親が早死にしてあまり樂な恵れた少年時代をもたない場合でも、恐らくそのためにこそ對世間的な教育を一段とはやく得るやうになるんだよ。他人に順應しなければならぬといふことをはやく悟つてだね。これは僕たちが早かれ晩かれみんな知らねばならぬことなんだ。そして、この點についてなら全然問題はないんだ。なぜつて、僕たちは數人の子供を世話するに十分富んでゐるし、一人の人間にあまり澤山財産をつみ重ねるのは決して義務でも慈悲でもないんだもの。」少佐がシャルロッテの價值とエドアルトのながく續いたかの女への關係を少し暗示しようと思

つたとき、エドアルトがせはしく口を挟んだ。「僕たちはばかな事をしたんだ。それが僕にはあまりにもよく分る。一定の年齢になつて以前の若い頃の願望や希望を實現しようとする者はいつも自分を欺いてゐる。人間は十年毎に獨特の幸福と、獨特の希望や展望を持つものだからだ。境遇や妄想のために前や後を掴ませられる者は氣の毒なものさ。僕たちはばかなことをしたんだ。いつたい一生さうしてなくてはならないものだらうか。僕たちは時代の道徳が拒まなものを、なにかの氣遣ひからあきらめねばならないのだらうか。いろんな事では人は自分の計畫や行ひを取消すが、細かな部分ではなく全體が、人生のあれこれの條件ではなく人生の總體が問題である正にこの場合に、取消しをしてはいけないのかね。」

少佐は力強いとともに巧みな言廻しでエドアルトに、その妻や家族や世間や所有物に對するいろんな關係を説ききかせることを誤りはしなかつた。が、何らかの同感を惹起すに成功はしなかつた。

「ねえ君、」エドアルトは答へた。「こんなことはみんな、絶え間ない砲聲で地が震へ、彈丸がぶんぶんひゆうひゆうと飛び、右や左に戦友が倒れ、馬が打たれ、帽子が穴だらけになつた戦争のつた返す只中で僕の心を過ぎて行つたことなんだよ。星の圓天井の下の靜かな夜營の灯の傍でもただようて行つたことなんだ。あらゆる僕の關係がそのとき心の前に出て來たんだ。僕はそれを考へ抜き、感じぬいた。自分のものとしたり、妥協したりした。繰返し繰返し。が、

もう永久に變らないんだ。

さういふ瞬間に君もまた僕の前に現はれたんだ。僕はそれを黙つてゐることは出來ない。君も僕の世界の一人だつたのだ。僕たちは實際もう永い間お互のものではないだらうか。僕が君になにか負ひ目があるとすれば、いまそれを利子をつけて拂ふ場合なのだ。君がまた僕に負ひ目があるとすれば、いまこそそれを償ふことが出来る。僕は君がシャルロテを愛してゐることを知つてゐる。かの女はそれに價する。又、僕はかの女が君に無關心でないことも知つてゐる。どうして、かの女が君の價値をみとめてはいけなうか。シャルロテを僕の手から取りたまへ。そして、僕にはオティリエを連れて來てくれ給へ。そしたら僕たちはこの世で最も幸福な人間になるんだよ。」

「君がそんな高價な贈物で買収しようとするからこそ、僕は益々用心深く、きびしくならねばならないよ。」少佐は答へた。「僕も祕かに敬意を感じてゐるこの申出は事件をかるくはせず、むしろ重くするんだ。君と同様にいまや僕の問題だ。運命とともに二人の男の名聲と名譽の問題なんだ。いままで非難をうけたことのない二人が、この不思議な、とても言ふほかない行爲によつて世間の前に極めて珍妙な光の中に現はれるといふ危険に陥るんだよ。」

「僕たちが非難をうけたことがないといふ事實は、僕たちにいちどは非難されてもよいといふ權利をあたへるんだよ。」エドアルトは答へた。「生涯信用できる人間たることをしめした者

は、他の人の場合ならいかかはしく思はれるかも知れないやうな行爲でも信用すべきものにするんだ。僕について言へば、僕が自分に課した最近の試煉や、他人のためにした困難な危険な行爲によつて、自分のためにもなにかしていふ権利をあたへられたやうに思ふ。君やシャルロッテについては、未來に委せようさ。が、君は、又誰だらうと僕をこの計畫から引止めはしないだらう。僕に手をかして呉れる人には、僕もまたすべての事に力を惜しまない。が、僕を見捨てるのか、反対しようとするなら、極端なことが起らずにはゐないだらう。なるやうになれだ。」

少佐はエドアルトの計畫にできるだけ反対するのが自分の義務だと思つた。かれはこんどは友人にたいして賢明な方向轉換をもちひて、讓歩するやうな風をみせ、この離婚と結婚を達成すべき形式や手續ばかりを話題にした。すると、いろんな面白くない事や困難なことや不體裁なことが現はれて來たので、エドアルトは非常に不機嫌になつてしまつた。

「僕にはよくわかるよ。」かれはついに叫んだ。「敵からばかりでなく友人からも希望することが襲撃されねばならないのだ。僕の欲すること、僕になくてならぬものを僕はしつかと眼に入れてゐる。僕はそれをつかむよ。確實に、すぐに、また素早く。こんな關係は、立つてゐるものが倒れ、固執したいと思つてゐるものが讓歩せずには立上りも形づくられもしないことを僕はよく知つてゐる。いろいろ考へてみたつてこんなことは終りはしない。理智のまへではすべ

ての權利は平等なのだ。跳ね上る天秤の皿にはいつも反対の重りが置かれる。ねえ君、僕のため、君のために行動する決心をし給へよ。僕のため、又君のために、この状態の紛亂を解き、解決し、結び附ける決心をし給へよ。いろいろ考へてためらつてゐてはいけないよ。さうでなくとも、もう世間は僕たちのことを噂してゐる。もいちど世間は僕たちの噂をするだらう。それから、新しくなくなつたすべての他のことと同様に、僕たちのことを忘れてしまひ、もう僕たちに興味はなくなつて、僕たちのするままにさしておくだらうよ。」

少佐はほかに逃路はなかつた。ついに、エドアルトが絶對的に事柄を既知の假定されたものとして取扱ひ、萬事をどうすべきかを細かに議論し、未來について極めて朗らかに冗談さへまじへて話すのを許容しておくほかなかつた。

やがて再び、眞面目に考へ込んでエドアルトはつづけた。「もし、僕たちが、萬事はまた自然によくなり、偶然が僕たちをみちびき恵んで呉れるだらうといふ希望や期待に委せようとするならば、それは罰すべき自己欺瞞だ。こんな風にしては僕たちは救ふことも出来ないし、すべての側の平安を返すことも出来ない。罪なくしてすべての罪を負はされてゐるのに、どうして僕は自分を慰めることが出来るやう。無理に僕はシャルロッテに君を家に呼ばせることが出來たのだ。オテ、リエもその變化の結果やつて來たのだ。僕たちはもうこの事から起つたことを意の儘にすることは出来ない。が、僕たちはそれを無害にし、關係を僕たちの幸福になるやうにみ

ちびくことは出来る。君は僕がひろげる美しい懐しい展望から眼をそむけたいのかね。僕に、僕たちみんなにかなしい諦めを命じたのかね。君がそれを可能だと思ふだけで。それが出来さうだといふだけで。いつたい、僕たちがもとの状態にかへらうとしても、いろんな不體裁や不便や不快をしのばすにゐられるだらうか。その場合、なにかよい事や朗らかなことが生れるといふわけでもないのに。君がゐる幸福な状態は、君が僕を訪れ、僕とともに暮すことを妨げられても、君をよろこばすだらうか。あんなことが起つたあとでは、それはいつも苦痛だらう。シャルロッテと僕はあらゆる財産をいじめてた悲しい境遇にゐるだらう。そして、君がもし、他の俗人共とともに、歳月が、はなれてゐることが、さういふ感情を鈍くし、こんなに深く刻まれた印象をも消してしまふだらうと信じたのなら、その間の歳月自體が問題なのだ。それを人は苦痛や缺乏のなかでなく、悦びと安樂の中で過したいのだ。ところで、最後にもつとも重大なことを言はねばならない。僕たちはたとへ、内外の状態にしたがつてさういふことを期待できるとしても、僕の家を去つて、社會で僕たちの世話も受けず、厭ふべき冷い世間をみじめに忍び歩かねばならないオテリエはどうなるのだらう。オテリエが僕や僕たちなくして幸福でゐられる状態を君ひとつ描いてみせて呉れ給へ。そしたら、君は、あらゆる他の論據よりもつとよい論據を述べたことになるだらう。それを僕は、たとへ許し又従ふことは出来ないにしても、よろこんで改めて考へに入れようと思ふよ。」

この課題はさう容易に解けるものではなかつた。少くとも友にはこれについて十分の答へは浮ばなかつた。企て全體がいかに重大で氣遣はしく、いろんな意味で危険であるかを、又、少くともどうしてそれに取りかかるかは極めて慎重に考へねばならないことを繰返し厳しく諫めるほかなかつた。エドアルトは満足した。が、ただ、友が、この事について完全に二人が一致し、第一歩を踏み出すまでは自分の許を去らないやうにといふ條件をつけた。

### 第十三章

全然知らないお互に無關心な人間でも暫く一緒に暮すと互に打明けて一種の心安さが生ぜずにはゐないものである。まして、我々の二人の友だちが、再び一緒に住んで毎日毎時間つき合つて、相互に何の隠すところもなくなつたことは期待されることである。かれらは以前の状態の思ひ出を繰返した。少佐は、シャルロッテがエドアルトのために、かれが旅から歸つたとき、オティリエを考へ、この美しい娘をめ合せようと思つてゐたことを隠さなかつた。エドアルトはこの打明け話で感亂するくらゐ有頂天になつて、シャルロッテと少佐の相互の愛著を遠慮なく話した。それはかれに丁度便利で好都合であつたので、生々とした彩色を施して描き出すのであつた。

332

少佐は全く否定することも出来ず、全く承認することも出来なかつた。が、エドアルトは益々固くきめてしまつた。かれはすべてを可能なものとしてでなく、すでに起つたものとして考へた。各人はただ自分の願ふところを承認しさへすればよかつた。離婚は確かに達成さるべきであつた。早急に結婚もつづくはずであり、エドアルトはオティリエと旅に出たいと思つた。

想像力の描き出す愉快なことで、愛人同士が、若夫婦がそのあたらしく新鮮な関係をあた

しく新鮮な世界で楽しみ、非常に移り變る状態の中でその永續する結合を試し、又實證しようと思ふことほど魅力のあるものは恐らくないだらう。少佐とシャルロッテはその間に領地や財産や地上の望ましい施設に關する一切を、各人が満足できるやうに整理し、権利と公平に依つて準備する全權を持つはずであつた。が、エドアルトがもつとも頼りにし、最大の利益を自分に期待したことは次のことであつた。子供は母親の許に止るべきであるから、少佐が子供を教育し、その見解に従つて導き、その能力を發展させることが出来るだらうといふのであつた。洗禮のときかれら二人に共通なオットーといふ名前をつけたことは無駄ではなかつた。

すべてはエドアルトに於てはもう出来上つてゐたので、かれは實行に近づくことをこの上は一日も躊躇してゐることは出来なかつた。かれらは莊園への道すがら小さな町に着いた。そこにエドアルトは一軒の家を持つてゐたので、かれは此處に留つて、少佐の歸りを待たうと思つた。が、かれは逸る心を抑へてすぐ其處で馬を降りることはできなかつた。そして、友に同行して其處を通過した。二人とも馬上にあつた。重大な話にもつれながら、かれらは一緒に騎つて行つた。

333

突然かれらは遠方に丘の上の新しい家を眼にした。その赤い瓦がきらめくのをはじめてかれらを見た。抵抗しがたい憧憬がエドアルトをとらへた。こん夜中にも萬事がすまされねばならない。全く近くにある村で自分は隠れてゐよう。少佐はシャルロッテに切に事の説明をし、かの

女の用心深さを襲つて、思ひがけない申出をしてかの女が自分の考へを自由に述べ立てるやうにしなければならぬといふのであつた。何故ならば、エドアルトは自分の願望をかの人に移して考へてゐたので、自分がかの女の決定的な願望を迎へてゐるとしか信ぜず、又、他の意志を持ち得ないために早急にかの女の承認を望んだからである。

かれは幸福な結果を眼に浮べて喜んだ。その結果が待伏せてゐる者にはやく告げられるやうに、二三發の號砲が放たれ、夜になつたら打上花火を上げることになつた。

少佐は館に向つて騎つて行つた。シャルロッテの姿は見えなかつた。そして、かの女は現在では上の新しい建物に住んでゐて、いまはしかし近隣に訪問に出掛けてゐるので、今日はたぶんはやくは歸らないだらうといふことを聞いた。かれは馬を止めておいた宿屋に歸つた。

その間に、エドアルトは抑へがたい性急に驅られて、自分の隠れ場を忍び出て、獵師や漁夫しか知らない淋しい小徑を通つて、自分の遊園に向つてゐた。夕方頃、かれは湖の近くの藪に出た。湖の水鏡をかれははじめて完全に、純粹に見た。

オテ、リエはその午後湖へ散策をしてゐた。かの女はいつものやうに子供を抱き、歩きながら讀んだ。かうして、かの女は渡し場の榎の樹に辿り着いた。男の子は眠り込んでゐた。かの女は腰を下して、子供を傍にねかせ、讀みつづけた。本は優しいところを惹きつけてはなさないやうな本の一つであつた。かの女は時刻を忘れて、陸を行けば新しい建物へ歸るにはまだ遠

いことを考へなかつた。そして、本の中に、自分のなかに耽つて坐り、大へん愛らしく見えたので、まはりの樹々や灌木が生氣を得て、かの女を歎賞し、かの女を見てよろこぶために眼をあたへられればよいと思ふほどであつた。かうして、丁度、沈み行く陽の赤みがかつた一條の光線がかの女の背後から落ちて来て、その頬と肩を金色に染めた。

それまで人に見つからずに進むことのできたエドアルトは、遊園に人氣がなく、あたりがひっそりしてゐるのを見て、益々なかへ入つて行つた。ついに、かれは榎の樹の傍の藪を突抜けた。かれはオテ、リエを見た。かの女はかれを見た。かれはかの女の方へとんで行つて、その足もとに伏した。二人とも氣を確かにしようとしながら、ながく黙つてゐたあとで、かれがかの女に言葉少なに、ここへ來たわけや、どうして來たかを説明した。かれは少佐をシャルロッテの許に送つた。かれらの共同の運命は恐らくこの瞬間決められてゐる。かれはかの女の愛を疑つたことはない。かの女もまたかれの愛をきつと疑つたことはないだらうなどとも言ひ、かの女の同意を願つた。かの女はためらつた。かれは懇願した。かれはもとの權利をつかつて、かの女を腕に抱きたいと思つた。かの女は子供を指し示した。

エドアルトはそれを見て驚いた。「おや！」かれは叫んだ。「もし私に妻や友を疑ふ理由があるとすれば、この容貌は恐ろしく二人に不利な證據となるだらう。これは少佐の姿ではありませんか。こんなに似てゐるのを私は見たことがない。」

「そんなことはありませんわ。」オテ、リエは答へた。「みんなは、私に似てゐると申しますわ。」「そんなことがあるはずはない。」エドアルトは答へた。その瞬間子供は眼を開けた。二つの大きな黒い、貫くやうな、深くやさしい眼であつた。子供はもう世界を慧しげに見てゐた。前に立つてゐる二人を知つてゐるかのやうであつた。エドアルトは子供の傍に身を投げて、再度オテ、リエの前に膝まづいた。「あなただー」かれは叫んだ。「あなたの眼だ。あゝ、あなたの眼だけを見させて下さい。この子に存在をあたへたあの不吉な時間にヴェルを投げさせて下さい。男と女が心は他所にありながら抱き合つて、はげしい願望で合法的な結合を潰すといふ不幸な思想でああなたの純な魂を驚かさねばならぬのだらうか。それとも、さうだ、もう、ここまで来たからには、シャルロッテへの関係は切離されねばならず又あなたが私のものにならうからには、どうしてそれを言つていけないことがあらう。どうしてそのひどい言葉を口に出していけないことがあらう。この子供は二重の姦通から生れたのです！ 私たちを結びつけるはずであつたらうに、妻から私を、私から妻をひきはなすのです。この子が私に不利な證據となり、この立派な眼がああなたの眼に、他人に抱かれてゐても私がああなたのものであつたと言ふやうなら、オテ、リエ、あなたは、私がああなたの腕に抱かれてはじめてあの過ち、あの罪を償ふことが出来るのだと感ずる、本當に感じてくれることができるでせうね。」

「お聞きー」かれはとび上つて、少佐がするはずの合圖の銃聲を聞いたやうに思つて叫んだ。

それは近くの山で獵師が撃つたのであつた。その後なにもつづかなかつた。エドアルトはいらした。

いまやつと、オテ、リエは日が山の彼方に沈んだのを見た。上の建物の窓からまだ最後の反射をしてゐた。「お降り下さい、エドアルトー」オテ、リエは叫んだ。「永い間私たちは會はずに、辛抱してきました。私たち二人がシャルロッテにどんなに罪があるかお考へ下さい。あの方が私たちの運命を決めねばなりません。あの方の先廻りはしないことに致しませう。あの方がお許しになれば、私はああなたのものです。お許しにならねば、私はああなたを諦めねばなりません。決定がそんなに近づいてゐるのだとお思ひなのですから、待つことに致しませう。村にお降り下さい。少佐がああなたがそこにゐるとお思ひです。説明の要るやうないろんなことが起るかも知れません。亂暴な砲聲が談合の結果をお知らせするやうなことがあるでせうか。たぶん、あの方はいまあなたを探していらつしやいます。あの方はシャルロッテにお會ひになつてはゐません。私はそれを知つてゐます。シャルロッテの行先はわかつてゐるのでから迎へに行かれたかも知れません。いろんな場合が考へられます。さあーシャルロッテがいまにもお出になるにちがひありません。あの方はあの上で私と子供を待つていらつしやいます。」

オテ、リエは急いで話した。かの女はあらゆる可能な事を考へあつめた。エドアルトの近くにゐてかの女は幸福であつた。さうして、かれをもう遠ざけねばならないことを感じてゐた。

「お願いです。ねえ、あなた、お願いでございます。」かの女は叫んだ。「お歸りになつて、少佐を待つて下さい。」「私はあなたの命令に従ひます。」エドアルトは、情熱的にかの女を見詰めてから固く腕に抱きながら叫んだ。かの女はその腕でかれを巻いて、この上もなくやさしく胸におしつけた。希望は空から落ちる星のやうに二人の頭を越して行つた。かれらはいまやお互のもののやうに妄想し、信じた。はじめて思ひ切つた自由な接吻を交して、強いて苦しげに別れた。

日は沈んでゐた。もう薄暗くなり、湖のまはりには濡つて霧がかかつてゐた。オティリエは混亂し、感動して立つてゐた。かの女は山の家の方を見て、露臺の上にシャルロットの白い衣を見たやうに思つた。廻り路は湖に沿うて長かつた。かの女はシャルロットが苛々しながら子供を待つてゐるのを知つてゐた。ブラターヌをかゝる女は向側に見た。すぐに建物へ上る小徑から水面だけがかの女を隔ててゐた。眼と一緒に思ひではもう向側にあつた。子供とともに水上に出る危険はこのさし迫つた氣持のなかに消えてゐた。かの女は小舟に急いで、心臓が鼓動し、足がよろめき、感覚が消えやうとするのを感じなかつた。

かの女は小舟にとび乗り、櫂をつかんで、突放した。むりに力を出さねばならなかつた。突くのを繰返した。小舟は揺れて、少し湖面へ滑つた。左腕には子供を、左手には本を、右手には櫂を持つて、かの女もまたよろめき、小舟の中に倒れた。櫂が一方の側に手から抜け、かの

女が身を支へようとすると、子供と本が他の側に、皆が水中に落ちてしまつた。かの女はまだ子供の着物を掴んでゐた。が、工合の悪い姿勢に妨げられて自分の身も立上ることが出来なかつた。自由な右手は身體の向きを變へるにも、立上るにも十分ではなかつた。ついに、成功した。かの女は子供を水から引き上げた。が、その眼は閉され、息は止つてゐた。

瞬間、かの女の思慮はかへつて來た。が、苦痛は益々大きかつた。小舟はほとんど湖の眞中に來て、櫂はとほくに浮び、岸にはだれも見えなかつた。見えたにしても何の役に立つたらう。一切から切離されて、かの女は不實な無愛想な水の上に漂うてゐた。

かの女は自分自身に救ひを求めた。かの女は弱死者の救助について屢々聞いたことがあつた。かの女の誕生日の夜にもそれを體驗してゐた。かの女は子供の着物を脱がせて、自分のモスリンの着物で拭き乾かした。かの女は胸を開けて、はじめてそれを大空にさらした。はじめて、かの女は生きた者とその清純な裸の腕におしつけた。が、あゝ、生きた者ではなかつた。不幸な子供の冷たい四肢はかの女の胸を心底まで冷くした。限りない涙がかの女の眼から流れ、硬ばつた者の膚に温みと生の影をあたへた。かの女は止めなかつた。かの女は子供をシールで包み、撫でたり、押ししたり、息を吹きかけたり、接吻したり、涙を流したりして、この切離された世界で拒まれてゐる救助手段の代りにしようと思つた。

すべては無駄であつた。子供は動かすにかの女の腕にねてゐた。小舟は水上に動かすに立つ



てゐた。が、ここでもまた、かの女の美しい心はかの女を助けのない者にはしなかつた。かの女は上に身を向けた。膝まづいて、かの女は小舟の中に倒れ伏し、硬くなつた子供を兩腕で、白さと又悲しくも冷さで大理石にもまがふその罪のない胸のうへに差上げた。濡れた眼でかの女は見上げ、優しい心がどこにも得られないとき、最大の充實を見出さうとねがふ天上からの助けを呼んだ。

かの女はまた、もう二つ三つ瞬き初めてゐた星へ訴へた。それは空しくはなかつた。軟らかな風が起つて、小舟をプラターメの樹々の方へ吹き寄せた。

## 第十四章

かの女は新しい建物に急いだ。外科醫を呼び出して、子供を渡した。何事にも驚かないこの男はかよわい屍をいつもの仕方で順序を追うて取扱つた。オティリエは萬事に手傳つた。かの女は働いたり、持つて來たり、心を配つたりした。しかも、他の世界にでもさまようてゐるやうであつた。最高の不幸は最高の幸福と同様あらゆる對象の光景を變へるものだからである。すべての試みをしつくしたあとで、この健氣な人が頭を振り、かの女の希望にみちた問ひにたいして最初黙つてゐて、それから低く「否」と答へたとき、やつとかの女はそれまですべての事が爲されてゐたシャルロツテの寢室を出た。そして、居間に入るや否や、ソファにも届かずに、力盡きて俯伏に絨毯の上に倒れた。

その時丁度シャルロツテの馬車の着くのが聞えた。外科醫はまはりに立つてゐる人々に後に残つてゐるやうに切願した。かれは自分が出迎へに行つて、かの女に心の準備をさせよと思つた。が、もう、かの女は部屋に入つて來た。かの女はオティリエが床に倒れてゐるのを見た。女中の一人が叫び聲を上げて泣きながらかの女にとびついて行つた。外科醫は入つて來た。かの女は突然一切を聞き知つた。が、どうしてすべての希望を一度に捨てられやう。經驗のあ

る、巧妙な賢いこの男はかの女に子供を見ることだけはしないやうに願つた。かれは新しい手配をする様子をしてかの女を誤魔化すために出て行つた。かの女はソファに身を下した。オティリエはまだ床に倒れてゐた。が、シャルロッテの膝にかき上げられ、その上にかの女の美しい頭は垂れた。醫者は行つたり來たりして、子供のために骨折つてゐる風をしてゐたが、實際は婦人たちのため骨折つてゐた。かうして、眞夜中が來て、死のやうな静けさが益々深まつた。シャルロッテはもはや、子供がもう生き返らないことを自分に隠さなかつた。かの女は子供を見たいと願つた。子供は温い毛布に清らかに包まれて、籠に入れられ、ソファのかの女の側に置かれた。小さな顔だけが出てゐた。靜かに美しく子供はねてゐた。

この椿事に村は間もなく騒ぎ立て、知らせはすぐ宿屋へも聞えた。少佐は見知つた道を登つて來た。かれは家のまはりを廻つて、下屋でなにか運ぶために走つてゐる下僕を呼び止めて、詳しい知らせを聞き、外科醫を呼び出させた。外科醫は來て、昔の恩人の出現に驚き、現在の狀況を傳へ、シャルロッテをかれに會はせる準備をすることを引受けた。かれは入つて行き、誘導的な會話をはじめ、想像力を一つの對像から他へと導き、ついにシャルロッテに少佐を思ひ出させ、少佐の同情と、精神や考へ方の上でのその接近とを話し、やがて實際に近く來てゐることに話を移した。とにかく、少佐が戸口に立つてゐて、一切を知つてをり、入れてもらひたいと願つてゐることをかの女は聞知つた。

少佐は入つて來た。シャルロッテは痛々しげな微笑みをしてかれに挨拶をした。かれはかの女の前に立つた。かの女は屍を隠してゐた緑色の絹の被ひをあげた。一本の蠟燭の暗い火影で、かれは硬くなつた自分の似姿を見て、祕かに身慄ひせずには居れなかつた。シャルロッテは一つの椅子を指し示した。かうして、かれらは互に向合つて、黙つて、一晩中坐つてゐた。オティリエはまだ靜かにシャルロッテの膝にねてゐた。かの女はやはらかく息をついて、眠つてゐた。又は眠つてゐるやうに見えた。

朝はほのかに明るくなつて來た。灯は消えた。二人の友だちは暗鬱な夢から覺めたやうに見えた。シャルロッテは少佐を見て、落着いて言つた。「ねえ、説明して下さい。どんなめぐり合せであなたは此處に來て、この悲しい場面に加はるやうになられたのでせうか。」

「いまは、」少佐はかの女の問ひと同様に全く低く答へた、——まるで、かれらはオティリエの眠を覺ますまいとするかのやうであつた。「いまは、差控へたり、前置きをしたり、ゆつくりと話を進めたりする時でも場所でもありません。いまのあなたの場合は實に非常な場合です。私が來た重大な事柄さへもそれに比べるとその價値を失つてしまひます。」

さう言つてから、かれは全く落着いて簡單に、エドアルトがかれを送つた限りでのその使者としての目的と、かれの自由意と利害が關係してゐた限りでのその來訪の目的を白狀した。かれは非常にやさしく、しかし率直にこの二つを述べた。シャルロッテは落着いて耳を傾けてゐ

て、驚きも不快になりもしない様子であつた。

少佐が話し終へたとき、シャルロッテは、少佐が自分の椅子を近寄せねばならぬほど全く低い聲で答へた。「こんどのやうな場合には私はいままでゐたことがございません。が、似たやうな場合に、私はいつも、明日はどうなるだらう、と自分に言つたものです。数人の人の運命がいま私の手中にあることを私はよく知つてゐます。自分のすべきことは私には疑ひの餘地はなく、すぐ申上げられます。私は離婚を承認します。もつとはやくその決心をすればよかつたのですけれど。私が躊躇し反抗してゐたため子供を殺してしまひました。運命が頑固に企てることがあるものでございますわね。理性や徳性や、義務やあらゆる神聖なものがそれを妨げようとしても駄目なのです。運命には正しくて、私共には正しく思へないやうなことが起らなくてはなりません。私共がどんな身振りをしよう、最後にはそれは断行するのです。

でも、私は何を言つてゐるのでせう。運命はもともと、考へもなく私が反抗してゐた私自身の希望を、私自身の計畫を再び軌道にのせようとしてゐるんですわ。私はすでに自分で、オテリエとエドアルトとをこの上なくびつたりした一對として考へなかつたでせうか。又、二人を互に近づけようと自分でしなかつたでせうか。あなた御自身もこの計畫を知つていらした方ではありませんか。どうして私は男の方の片意地と眞の愛情との區別が出来なかつたのでせう。どうして私は、友人としてあの人と別の奥さんとを幸福にしてやれただらうに、あの人の手を

とつたのでせう。この不幸なまどろんでゐる人を御覧になつて下さい。この人がなれば死んだやうな眠りから意識にかへる瞬間を思ふと、私は身慄ひします。不思議な運命の道具にされて奪つたものを自分の愛によつてエドアルトに償はうといふ希望を持つことができないとしたら、どうしてこの人は生き、自分を慰めればよいのでせう。あの人を愛する愛著と熱情によつて、この人はすべてを再び返すことができるのです。愛がすべてを耐へ得るならば、まして、すべてを償ふことは出来ます。この場合、私のことは考へてはいけません。

少佐様、静かにお引き取り下さい。エドアルトにお傳へになつて下さい。私は離婚を承諾します。あの人とあなたとミトラーさんに一切を始めることを委ねます。私の將來の境遇については心配致しません。すべての意味で心配せずをれるのです。私はどんな書面にでも署名致しませう。ただ、私が一緒に働いたり、考へたり、相談したりするやうにはおもとめにならな

すで下さいます。少佐は立上つた。かの女はオテリエ越しにかれに手を差出した。かれはこの愛らしい手に唇を押しあてた。「では、私のことは、私は何を望んだらよろしいのでせうか？」かれは低く囁いた。

「そのお答へは私におあづけになつて下さいませ。」シャルロッテは答へた。「私たちは不幸になるべき罪も冒してゐませんが、ともに幸福になる手柄もありません。」

少佐は、シャルロッテに心中深く同情しながら立去つた。が、あの憐れな死んだ子供を悼むことは出来なかつた。かういふ犠牲はかれらのすべての側の幸福に必要なものに思へた。かれはオティリエが、エドアルトから奪つたものへの完全な代償として自分の子供を腕に抱いてゐる姿を思ひ浮べた。又、死んだ子供より多くの権利でかれの似姿を持つてゐる息子を膝にのせてゐる自分を考へた。

かういふ媚びるやうな希望と姿が魂の中を通つて行つたとき、かれは宿屋への歸路でエドアルトに逢つた。かれは花火の合圖も砲聲も幸福な成功を知らせなかつたので、夜中戸外に出て少佐を待つてゐたのであつた。かれはすでに不幸な事件については知つてゐた。そして、かれもまた、哀れな子供を悼むかはりに、この出来事を、自分に全く告白しようとはせずに、かれの幸福のすべての障壁を一度に除く攝理と見てゐた。かれはだから、すぐかれの妻の決心を傳へた少佐に譯なく動かされて、再びあの村に、それから小さな町に戻ることにした。そこで、かれらは差當つてのことをよく考へて始めたいと思つた。

シャルロッテは、少佐が去つたあと、二三分間思ひに耽つてゐたにすぎなかつた。すぐ、オティリエが、大きな眼でかの女を見ながら起ち上つたのである。かの女はまづシャルロッテの膝から身を起し、それから床から起きて、シャルロッテの前に立つた。

「二度目に——立派な子供は打勝ちがたい優美な眞剣さをこめてはじめた——二度目におな

じ事が私に起りました。あなたはいつか私に、一生のうちには同じやうな事が同じやうな方法でいくども、そして、いつも重大な瞬間に起ることがあると仰しやいました。私はいまそのお言葉を本當だと思ひます。そして、あなたに告白をせずにはゐられません。母が死んで間もなく、小さな子供のとき、私は子供椅子をあなたのはうに引寄せて行きました。あなたはいつものやうにソファに腰掛けていらつしやいました。頭をあなたの膝にのせて、私は眠るともなく、覺むるともなく、まどろんでゐました。私は私のまはりに起つたことはみんな、殊に話は非常にはつきりと聞いてゐました。が、私は身を動かすことも、物を言ふことも、さうしたと思つても、自分が意識があることをほのめかすことも出来ませんでした。その時、あなたはお友達と私のことをお話しになつてゐました。哀れな孤兒として世に残された私の運命をお悼みになつて、人に頼つて生きる私の身の上をお話しになり、もし特別の幸運の星が守らなかつたらどんなに不幸な目に遭ふだらうとお語りになつてゐました。私はあなたが私のために願ひ、私から求めようと思つていらつしやらしいことをみんなよく、くわしく、恐らく厳しすぎる位に解つたのでした。私は自分の狭い見解にしたがつて、これについて法則をつくりました。その法則にしたがつて永い間私は生きてきて、又私の舉措動作もそれに従つてきめてまゐつたのです。あなたが私を愛して、心配して下さつた頃、私をお家にお引取り下さつた頃、その後もまた暫くの間。

が、私は自分の道を踏み外してしまつたのです。私は自分の法則を破り、その感情をさへ失つてしまいました。そして、恐ろしい出来事のとど、あなたは再び、前よりも悲しみにみちた私の状態について私の眼を開いて下さいました。なかば硬くなつて、あなたの膝にやすみながら、他處の世界からのやうに、私は再びあなたの低い聲を耳の上に聞いたのです。私は私がどんな風に見えるかを聞きました。私は自分自身に身慄ひしました。が、あの頃のやうに、私はこんども、なかば死んだやうな眠りのなかで、自分の新しい道を自分に描いてみせました。私はもと通りに決心致しましたの。私がどんな決心をしたかは、すぐ聞いて下さらねばなりません。私はけつしてエドアルトのものにはなりません！ 恐ろしい方法で、神様は、私がどんな罪にとらはれてゐるか私の眼を開けて下さいました。私はその贖罪をするつもりです。誰方も私の計畫から私を外らせようと思ひにならないで下さいませ。シャルロツテ様、どうか私の考へ通りに處置をつけて下さいませ。少佐を呼び返して下さい。あの方に、一歩もお進めにならないやうに書いて下さい。あの方が立去られたとき、身動きができずにどんなに私は不安であつたでせう。私は立上つて、叫びたいと思ひました。あの方をそんな罪深い希望を持つてお歸しになつてはいけません、と。」

シャルロツテはオテ、リエの状態を見、それを感じた。が、かの女は時間と説明によつてかの女をいくらかでも説き伏せることが出来るだらうと思つた。が、かの女が未來のことや、苦痛

の和らぐことや、希望をほめかすやうな言葉を二言三言口に出したとき、オテ、リエは反抗して叫んだ。「いけません！ 私を動かしたり、欺かうとなさつてはいけません。あなたが離婚を御承諾なさつたと聞いた瞬間に、私はおなじ湖で私の過ちを、罪を贖ひます。」

## 第十五章

幸福で平和な共同生活で親類、友人、家族が必要且正当である以上に起つてゐることや起るべきことについて話をし、互にその計畫や企てや仕事を繰返し告げ合つて、直接相互の忠言を受けるでもないのにも生活全體を言はば相談しながら扱ふとすれば——、これに反して、重大な瞬間に、まさに他人の助力や確證をもつとも必要とすると思はれる場合に發見されるのは、各人が自分自身に引退つて、自分のために行動し、自己流に働かうと努め、互に個々の手段を隠すために、結果や目的や達成されたものがはじめて再び共同の財産となるにすぎないことである。

あのやうな不思議な不幸な出來事のあとで、婦人たちの上にある靜かな嚴肅さがやつて來た。それは愛すべきいたはりとなつて現れた。全く祕かにシャルロッテは子供を禮拜堂に送つた。子供は不吉な運命の最初の犠牲として其處に身をやすらへた。

シャルロッテは出來るだけ生活に返つた。そして、オテイリエがかの女の助力を必要としてゐることをはじめて知つた。かの女はそれと氣づかせずに、とくにオテイリエと働いた。かの女はこの天使のやうな娘がどんなにエドアルトを愛してゐるかを知つてゐた。そして、不幸の前に

起つた場面を次第に訊き出して、オテイリエ自身から、又少佐の手紙によつてすべての事情を知つた。

オテイリエのはうではシャルロッテの目前の生活を大へん軽くしてやつた。かの女はあけすけで、話好きでさへもあつた。が、現在の又はすぐ過去のことにはけつして話さなかつた。かの女は絶えず注意をし、觀察をしてゐて、澤山のことを知つてゐたが、それがいま全部出て來た。かの女はシャルロッテと話をし、氣を紛らせてやつたが、シャルロッテは自分にとつてこのやうに大切な一組の結婚を見たいといふ祕かな希望をまだ育くんであつた。

が、オテイリエの心の中は別の關係になつてゐた。かの女はその閱歷の祕密をシャルロッテに打明けてゐた。かの女は以前の偏屈さと服従性から解放されてゐた。自分の後悔と決心によつて、かの女はあの過ちや不運の重荷からも解放されたものと思つてゐた。もはや自分自身に對して無理な力は要らなかつた。心の奥でかの女はただこの完全な諦念の條件の下でのみ自分を許してゐた。そして、その條件は永劫の未來にまで不可缺のものであつた。

かうして、暫くの時が過ぎて行つた。シャルロッテは、家や遊園や湖や岩の群や樹の群が日々自分たち二人に悲しい感情をあらたにさせるばかりなのを感じた。場所を變へねばならぬことはあまりにも明瞭であつた。が、どうすべきかは中々決定されなかつた。

二人の婦人は一緒に暮してゐなければならぬのだらうか。エドアルトの以前の意志はそれ

を命じ、その宣言と威嚇はそれを必要とするやうに思はれた。が、二人の婦人がその善い意志と理性と努力にもかゝはらず、お互に苦痛な状態にゐることは誤認されやうもなかつた。その會話は避けるやうなところがあつた。時折はただ半分だけ理解しておかうとし、屢々言葉が理性によつてでなければ少くとも感情によつて誤解された。お互に傷けることを恐れたが、その恐怖自體がまづ第一に傷き易く、又相手を傷けた。

場所を變へ、同時に少くとも暫く別れてゐたいと思つたとき、ふるい問題がまた出て來た。オテリエはどこへ行つたらよいのか？といふことであつた。あの大きな金持の邸は、多望な後繼娘の話相手になり競争相手になる遊び友たちを得ようとしてゐたが、まだ無駄に終つてゐた。すでに、男爵夫人のこの前の來訪の際、又最近手紙によつても、シャルロッテはオテリエを其處に送るやうに督促されてゐた。いま、かの女は再びそのことを話し出してみた。が、オテリエは、人が大きな世間と呼ぶのをつねとするやうなものを發見するやうな場所に行くことをはつきり斷つた。

「叔母様、」かの女は言つた。「偏屈で頑固だと思はれたくありませんから、他の場合なら黙つてゐて隠すのが義務か知れないことを言はして下さいませ。滅多にないほどに不幸な人は、たとへ罪がなくても、恐ろしい仕方て印をつけられてゐるものですわね。その人がゐると、その人に會ひ、その姿を見るすべての人に一種の恐怖を起させるものです。皆はその人に負はさ

れた恐ろしいものを見たがつて、好奇心を起し、同時に心配にもなります。かうして、恐ろしい行爲の起つた家や町はそこへ足を踏み入れるすべての人に怖しいものとなるのです。そこでは日の光もそんなに明るくなく、星もその輝きを失ふやうに思へるのです。

そして、もつとも多分これは言譯になるでせうけれど、かういふ不幸に對する人たちの輕はずみと魯鈍な厚かましさと不細工な人の好きはどんなに大きなことでせう。私がこんなことを言ふのをお許し下さい。でも、私は、ルチアネが隠れた家の部屋からあの可哀相な娘を引出して、親切にその面倒を見て、よい考へから遊戯やダンスをさせようとなさつたとき、あの娘と一緒に信じられないほど苦しんだのですもの。あの可哀相な娘が不安になつて、そのあまり遂に逃げ出して氣を失つて倒れたとき、私はあの兒を腕に抱き、お客さんたちは驚き昂奮し、それからはじめてみんなは不幸な者にたいして本當に好奇心をいだきました。そのとき私は、おなじやうな運命が自分の前にも立つてゐるとは考へませんでした。が、私の同情はほんとに眞實ではげしいものでしたので、まだ生き生きしてゐます。いま私は私自身にあの同情を向け、似たやうな場面を起さないやうにと用心することが出来るんですの。」

「でも、ねえ、」シャルロッテは答へた。「どこに行つても人の眼を通れることは出来ませんよ。昔はそんな感情の避難所を見つけることの出來た修道院もいまは無いですからね。」

「孤獨は避難所にはなりませんわ、叔母様。」オテリエは答へた。「一番たふとい避難所は働

くことの出来る場所にもとめられるのです。不吉な運命が跡をつけようと心を決めると、それから逃れるには贖罪も窮乏もだめなのです。仕事がなくて世間の見せものになるときだけは、世間は厭で心配にもなりません。が、働くのを喜んで、倦まずに義務を果してゐるところを見られるのでしたら、私は誰の眼にも耐へることが出来ます。神様の眼を怖れる必要がないからですわ。」

「あなたが好んで私塾へ歸りたいのでなかつたら、」シャルロッテは答へた。「私は大へん思ひ違ひをしたことになるんでせうがね。」

「さうです。」オテリエは答へた。「私はそれを否定いたしません。私は、自分たちが特別な仕方教育された場合、他の人々を普通の方法で教育するのは幸福な使命だと思ひます。大きな道徳上の不幸のために荒野に通れた人たちが、その望み通りに其處に隠れて埋もれてはゐなかつたことは歴史にも見られるではありませんか。その人たちは迷つた人たちを正しい道に導くために世間に呼び戻されたのです。人生の迷路です。清められた人ほどそれにいゝ人がありませうか。あの人たちはまた不幸な人の助けとなるために呼ばれたのです。もはや地上の禍も起り得なくなつた人以上に誰がそれが出来ませう。」

「あなたは奇妙な使命を選ぶのね。」シャルロッテは答へた。「私はあなたに反対しようとは思ひません。それもいゝでせう。私の希望するやうに、短い間だけにしても。」

「この試みと體驗をお許し下さるなんて、本當に感謝致しますわ。」オテリエは言つた。「自惚れでなければ、成功する筈です。彼處で私は、いろんな試煉に耐へたことや、その後體驗せねばならなかつたことに比ぶればそれがまたどんなに小さなつまらぬものであつたかを思ひ出すでせう。どんなに朗らかに私は、若い育つて行く人たちの當惑を觀察し、その無邪氣な苦しみに微笑み、やさしい手であらゆる小さな迷ひから救ひ出さうとすることです。幸福な人は幸福な人たちの先に立つに過ぎません。受ければ受けるほど益々多く自分や他人から要求するのが人間の性質だからです。ただ、回復した不幸な人だけが自分や他人のために、適度なよい事も大喜びで楽しませねばならないといふ感情を育てることが出来るんですもの。」

「あなたの計畫に對して、も一つ大へん重要に思はれる抗議を言はして下さいね。」シャルロッテは少し考へたあとで遂に言つた。「それはあなたではなくて、第三者の問題なんです。あの善良で物の分つた敬虔な助手の意向はあなたにもわかつてゐますわね。あなたの進む道で、あなたはあの人にとつて日々益々大切な無くてはならぬものとなるでせう。いまでもあの方は、その感情の上では、あなたなしには生きてくれないと言つてゐるのですから、將來は、あなたの協力に慣れると、もはやあなたなしには仕事の管理が出来なくなるでせうよ。あなたは最初はあの人に仕事の助けになつても、あとではあの人に仕事を厭にならせることになりますよ。」

「運命は私にやさしくありませんでした。」オテリエは答へた。「私を愛して下さる方は恐



らくあまりいゝ事を期待なさつてはいけませんわ。あの方は善良で物の分つた人ですから、私に對する純粹な關係の感情があの方の心に發達するだらうと思ひますの。あの方は私に、眼には見えず私共を取巻いてはゐるが恐しい迫つて來る力に對して防いで呉れる神聖なものに身を捧げることによつてのみ恐ろしい禍を自分のためにも他人のためにも償ふことの出来る清められた人間を御覽になるでせう。」

シャルロッテは愛らしい娘がこんな心から述べることを靜かに考へてみることにした。極めてそつとではあつたが、かの女はいろいろに、オティリエのエドアルトへの接近が考へられないかどうかを探つてみたが、極くほのかな言葉でも、少しの希望でも、ほんの少しの疑ひでもオティリエの心にこの上もなく深く觸れるやうに思はれた。實際かの女はあるとき、避けることが出来なくなつて、全くはつきりとその事を言ひ出した。

「エドアルトを諦めるあなたの決心が堅く變らないものであれば、」シャルロッテはかの女に答へた。「再會の危険を御用心なさいね。愛する者から遠ざかつてゐるときは、愛著がつよいほど自分を制御できるやうに思へるものです。それは、外へひろがる情熱の力をすべて内へ向けるからなのですわ。けれども、無くてすませると思つたものが突然再び無くてはならぬものとして眼の前に立つと、すぐ、ほんとに直ぐ様に私共はこの誤りから引きはなされるんです。自分の状態にいちばん適してゐると思へることをなさいね。自分を試して、むしろあなたの今の

決心をお變へなさい。ですけど、御自身の心から、自由な意慾する心からでなくてはいけませんわ。偶然に、驚かされて以前の關係に戻つてはいけません。そんなことをすると、耐へられないやうな分裂が心の中に起るものです。いまも言つたやうに、足を踏み出して、私からはなれ、どんな道に導くか分らない新しい生活をはじめる前に、もいちど、本當に永久にエドアルトを諦めることが出来るかどうかをお考へなさい。が、その決心がつかまりましたら、私たちは、あなたがあの人と關係しない、あの人があなたを訪ね、あなたに迫つても、お話しもしないといふ契約を結びませう。」オティリエは一瞬も考へてゐずに、すでに自分自身にしてゐたと同じ約束をシャルロッテにあたへた。

いま、しかし、オティリエがシャルロッテから離れない間だけオティリエを諦めるといふエドアルトの威嚇がまだシャルロッテの心の前にただようた。その時以來事情は變り、いろんな事が起つてゐるので、あの瞬間的に差迫つてかれから出た言葉はその後の事件よりしても取り消されたものと見做すべきであつた。が、それにも拘らず、かの女は、かれを傷けるやうなことはどんな事でも敢てする勇氣もなく、企てたくもなかつた。かうして、ミトラーがこの場合エドアルトの意向を聞き出すことになつた。

ミトラーは子供の死後、一寸の間だけではあつたが、時々シャルロッテを訪れてゐた。夫婦のよりを戻すことを極めて覺束ないものにしたこの不幸はかれにつよくはたらいてゐた。が、相

變らず一流の考へで希望し又努力しながら、かれはいまや祕かにオテ、リエの決心をよるこんだ。かれは物事を緩和する過ぎ行く時間を信頼して、まだ夫婦と一緒にすることを考へてゐた。そして、この情熱的な動搖を結婚の愛と貞節の試煉としか見なかつた。

シャルロッテは最初すぐ少佐にオテ、リエの最初の聲明を書き送つて、エドアルトが歩を進めず、静かにしてゐて、美しい娘の心が元通りになるかどうかを待つやうにして呉れるやう切願した。又、その後の出来事や意向についても必要な事は傳へた。かうして、いまや、勿論ミトラが、状態の變化にエドアルトを準備する困難な課題を委された。ミトラはしかし、人はこれから起ることを承認するよりも寧ろ起つたことに甘んずるものだといふことをよく知つてゐたので、シャルロッテに、オテ、リエをすぐ私塾へ送るのが最上策だと説き伏せた。

このため、かれが立去るや否や、旅立の用意が爲された。オテ、リエは荷造りをした。が、シャルロッテは、かの女がああ美しい小さな靴も、その中からなにかと一緒に持つて行かうともしないのをよく見てゐた。シャルロッテは黙つてゐて、何も言はないオテ、リエのするままにしておいた。出立の日がやつて來た。シャルロッテの馬車がオテ、リエを第一日は知合の宿屋まで、二日目に私塾まで乗せて行く筈であつた。ナンニイがかの女のお伴をして、女中として残ることになつた。この熱情的な娘は子供が死ぬとすぐまたオテ、リエの許に歸つて、以前のやうに生れつきと愛着からかの女にくつついてゐたのである。實際、この娘は面白いお喋りでこれ迄

なほざりにしたものをおぎなひ、愛する女主人にすつかり身を捧げようとするかに見えた。かの女はまだ生れた土地以外に出たことはなかつたので、一緒に旅をして見知らぬ地方を見物する幸福で全く我を忘れてゐた。そして、館から村へ、両親や親類に、その幸福を告げ、暇を乞ひに走つた。が、その時不幸にも、かの女は癩疹はしかの患者の部屋に入つたため、すぐ傳染してしまつた。皆はしかし旅を延ばしたくはなかつた。オテ、リエ自身もそれを切望した。道はもう通つたことがあるし、泊る筈の宿屋の主人達も知つてゐるし、館の馭者が連れて行くんだから心配なことはないといふのだつた。

シャルロッテは反對しなかつた。かの女ももう考への中ではこの周圍から急ぎ去つてゐた。ただかの女は、館でオテ、リエが住んでゐた部屋を、大尉の到着前と同様に、エドアルトのために再び準備したいと思つた。もとの幸福を返さうといふ希望は人の心にいつも再び燃え上るものである。シャルロッテはさういふ希望をする権利を再び與へられ、否、餘儀なくされた。

## 第十六章

ミトラが事件についてエドアルトと相談するために来たとき、かれは獨りで居て、頭を右手にもたせ、腕を卓子についてゐた。かれは大へん苦しんでゐるやうに見えた。「また頭痛がなさるんですか？」ミトラが訊いた。「さうです。」エドアルトは答へた。「が、私にはこれは憎めません。これはオテ、リエを思ひ出させるからです。たぶん、あの人もいま、左腕で支へて、悩んでゐるでせう。恐らく私以上に苦しんでゐるでせう。どうして私があの人やうにこれに耐へないでゐられませうか。この苦痛は私には薬であり、殆んど願はしいものだといふことが出来ます。何故つて、あの人の辛抱づよい姿が他のいろんな美點とともに、私の心の前に、益々力強くはつきりと、生き生きとただよふのです。苦しんでゐるときだけ、我々は、それを耐へるに必要なあらゆる大きな特性を本當に完全に感ずるものですね。」

ミトラはエドアルトがこの程度に諦めてゐるのを見て、その報告を差控へてはゐなかつた。が、かれは順を追うて、どうしてさういふ考へが婦人たちの間に生れたか、どうして次第に計畫にまで熟したかを歴史的に述べた。エドアルトはほとんどそれに反対はしなかつた。かれの言つた二三の言葉から、婦人たちに一切を委せるといふ考へが出て来るやうであつた。かれの

現在の苦痛はすべてに對して無關心にしてゐるやうに見えた。

が、獨りになるや否や、かれは立上つて、部屋の中をあちこちに歩いた。もはや、かれは苦痛を感じなかつた。全く我を忘れて忙しかつた。もうミトラの話の時から愛する者の想像力は活潑にはたらいてゐた。かれはオテ、リエが獨りで、又は獨りも同様によく知つた道を行き、かれも屢々その部屋に入つたことのある宿屋にゐる有様を思ひ浮べた。かれは考へ、熟考した。否、むしろ、考へも熟考もしなかつた。ただ願ひ、欲した。かれはかの女に會ひ、かの女に話さずにはゐられなかつた。何のために、何故、何がそれから生ずべきかは問題でなかつた。かれは反抗しなかつた。さうせずにはゐられなかつた。

従僕が打明けられて、すぐオテ、リエの出發の日時を訊き出した。その朝があけた。エドアルトは躊躇なくお伴も連れずに馬でオテ、リエの泊る場所へ赴いた。かれは其處にあまり早く來すぎた。驚いた女主人は喜んでかれを迎へた。かの女はかれのお蔭で大きな家族の幸福を得てゐたのであつた。かれは兵士として大へん勇敢であつたその息子に、かれ一人が目撃した行ひを取立てて熱心に將軍の前に持ち出し、二三の悪意ある人の妨害に打勝つて勳章を貰つてやつてゐた。かの女はかれのためにどうしたらよいのか分らなかつた。かの女はすぐその最上の部屋を出来るだけ片づけた。其處は勿論同時に衣裳室でもあり貯藏室でもある部屋であつた。が、かれはかの女に一人の婦人の到着を告げて、その人を此處に入れることにし、自分の

ためには背面の廊下の小部屋を間に合ふだけに準備させた。女主人には事が秘密なものらしく思へた。で、大へん興味深くそれにたづさはつてゐるやうに思へる恩人に、なにか氣に入るやうなことをしてあげるのはかの女に快かつた。そこで、かれであるが、夕方までの永いながい時間をどんな感で過したことであらう！ かれはかの女に會ふ筈の部屋を見廻した。全體の家庭的な奇妙な空氣のなかでかれには天國にでもゐるやうに思へた。オテ、リエに不意に會ふべきだらうか、なにか前觸れをしたものだらうか、と、かれの考へ抜かないものはなかつた。ついに、あとの考へが勝利を占めた。かれは卓子に向つて、書いた。この紙片がかの女を迎へる筈であつた。

エドアルトからオテ、リエへ

あなたがこの手紙を読むとき、愛する人よ、私はあなたの近くにゐます。驚いたり怖れたりなさつてはいけません。何も私に恐れることはないんです。私はあなたに迫つたりはしないでせう。あなたがお許しになるまでは、會はないでよいのです。

前以て、あなたの境遇と私の境遇とお考へ下さい。あなたが決定的な歩みをなさらうとしないのを私はどんなに感謝してゐることとせう。が、それは全く重大なこととす。そんなことをなさつてはいけません。此處で、一種の別れ路で、もいちど考へて下さい。

あなたが私のものになれるか、私のものになりたいかどうかを。あゝ、あなたは私たち皆に大きな親切をみせて下さいますね。そして、私には溢れるやうな親切を。

もいちどあなたに會はして下さい。よろこんで會はして下さい。この美しい問ひを私に口で言はして下さい。そして、美しいあなた御自身でそれに答へて下さい。私の胸へ、オテ、リエよ！ あなたが時折やすらひ、いつもあなたの姿を宿してゐる此處へ！

\*

書きながら、かれを、この上もなく憧れてゐたものが近づき、もうすぐ眼の前に現はれるだらうといふ感情がとらへた。この戸口からかの女は入つて来て、この手紙をよみ、その出現をあのやうにいくどもあこがれてゐた姿がいつものやうに本當に自分の前に立つだらう。かの女はまだ同じだらうか？ 姿は、考へは變つただらうか？ かれはペンをまだ持つてゐた。考へる通りに書かうと思つた。が、馬車が中庭へ轢り込んだ。走り書で、かれは附加へた。「あなたの來るのが聞える。一瞬の間、さよなら！」

かれは手紙を疊んで上書をした。封印をするには遅過ぎた。かれは小部屋にとび込んだ。かれはそこを通り抜けて廊下に行けることを心得てゐた。瞬間、かれは時計を印章と一緒に卓子に置いて來たことを思ひついた。それを最初にかの女に見られてはよくなかつた。かれはとんで返つて、うまくそれを持ち出した。次の間から、かれははや客にみせるためにその部屋に入

つた女主人の音を耳にした。かれは小部屋の戸口に念いだ。が、それは締つてゐた。鍵をかれはとび込むとき振り落してゐて、それは隣室の内側にあつた。錠は下りてゐた。かれは呪縛されたやうに立つてゐた。はげしくかれは戸を押した。が、開かうとしなかつた。あゝ、どんなにかれは幽霊になつて隙間からすり抜けたと思つたことだらう。が、だめであつた。かれは顔を戸口の側柱に隠した。オティリエは入つて来た。女主人はかれを見て引退つた。オティリエからも、かれは一瞬の間も隠れてゐることはできなかつた。かれはかの女のはうを向いた。かうして、愛する者同士は再び奇妙な方法で互に向き合つた。かの女は靜かにまじめにかれを見た。進みも退きもしなかつた。そして、かれがかの女に近づかうと動いたとき、二三歩卓子まで退つた。かれも再び退いた。「オティリエ、」かれは叫んだ。「この怖ろしい沈黙を破らして下さい！ 私たちは向合つてゐる影にすぎないのでせうか。しかし、何よりも聞いて下さい。あなたがいますぐ此處で會はれたのは偶然なのです。あなたの傍に前觸れをする筈の手紙がありません。どうか、それをよんで下さい。その上で、あなたに出来ることをきめて下さい。」

かの女は手紙を見下した。そして、少し考へてから取上げて、開封して讀んだ。顔色も變へずに、かの女はよんで、そつと差し置いた。それから、高く差し上げた兩掌を押し合せて、ほんの少し前屈みになりながら、それを胸に引いた。そして、強要する者を、その求め願ふものをすべて諦めざるを得ないやうな眼差で見つめた。この動作はかれの心を引裂いた。かれはオ

ティリエのその光景と姿勢に耐へることが出来なかつた。もし、かれが固執すれば、かの女は全くくづ折れさうに見えた。かれは絶望して戸口を急ぎ出、女主人を獨り残つたオティリエの許に行かせた。

かれは次の間を行つたり來たりした。夜になつた。部屋は靜かであつた。やつと、女主人は出て來て、鍵を引抜いた。この善良な女は感動し、狼狽して、爲すところを知らなかつた。ついに、立去りながら、かの女は鍵をエドアルトに差出した。が、かれはそれを拒んだ。かの女は蠟燭を立てたままにして、遠ざかつた。

エドアルトは又とない深い苦惱に落ち、オティリエの部屋の闕に身を投げて、涙で濡らした。このやうに近くにゐて、かつてこれ以上痛ましく愛する者同士が一夜を過したことはなかつた。

夜は明けた。馭者はせき立てた。女主人は鍵を開けて、部屋に歩み入つた。オティリエが着物きたまま眠り込んでゐるのを見て引返し、同情のある微笑みをしてエドアルトを手招きした。二人は眠つてゐる者の前に歩み寄つた。が、この光景にエドアルトは耐へることが出来なかつた。女主人は休んでゐる人を覺さうとはしなかつた。かの女は向合つて坐つた。ついに、オティリエは美しい眼をあけて、立ち上つた。かの女は朝食を斷つた。いまや、エドアルトがかの女の前に歩み出た。かれは、一言でもいつて、その意志を表明して呉れるやうに切願し

た。どんな意志にでもしたがふと誓つた。が、かの女は黙つてゐた。再度、かれは愛に充ちて、迫るやうに、自分のものになつて呉れるかと訊ねた。どんなにかの女は愛らしげに、眼を伏せて、頭を静かに「否」と動かしたことであらう。かれは、私塾に歸るつもりかと訊いた。無關心さうに、かの女はそれを否定した。が、かれが、シャルロッテの許へかの女を連れ戻つてもよいのかと訊ねたとき、かの女は安心したやうに頭を下げて肯定した。かれは馭者に命令しようと思ひに急いだ。が、その背後を、かの女は稲妻のやうに部屋から抜け出て、階段を下り、馬車に乗込んだ。馭者は館のはうへ道を返した。エドアルトは少しはなれて馬上でついて行つた。

## 第十七章

オテイリエが先に、エドアルトが直ぐつづいて馬で、館の中庭に駆け込んで来るのを見て、シャルロッテはどんなに驚いたことであらう。かの女は戸口に急いだ。オテイリエは馬車を降りて、エドアルトと一緒に近づいた。熱心に、無理やりにかの女は夫婦の手をとらへて、押し合せ、部屋に急いだ。エドアルトはシャルロッテの頸にとりついて、涙にかきくれた。かれは自分の氣持を説明することが出来ず、自分に辛抱してくれるやうに、オテイリエの味方となつて助けて呉れるやうに頼んだ。シャルロッテはオテイリエの部屋に急いだ。中に入つて、かの女は戦慄した。其處はもうすつかり取り片附けられて、空虚な壁だけが立つてゐた。廣々として不愉快にみえた。みんな運び去つてしまはれて、小さな鞆だけが、どこへ置いていゝか分らずに、部屋の真中に取残されてゐた。オテイリエは鞆のうへに腕と頭を伸ばして、床に倒れてゐた。シャルロッテはかの女を介抱して、何が起つたかを訊ねたが、答へは得られなかつた。

かの女は氣附けを持つて来た女中をおテイリエの傍に残して、エドアルトの許へ急いだ。かれは廣間にゐたが、かれもかの女に教へなかつた。かれはかの女の前に身を投げて、涙を両手に浴せ、自分の部屋へ逃れた。かの女がついて行かうとしたとき、従僕に出遭つた。従僕が出

来るだけ説明した。それ以外のことはかの女が自分で考へ合せて、すぐ當面のことを果敢にやつてのけた。オテ、リエの部屋は直ぐ元通りにされた。エドアルトは自分の物が最後の紙に到るまで、置いて行つたとほりにしてあるのを見出した。

三人は再び互に向き合ふやうに見えた。が、オテ、リエは黙りつづけた。エドアルトは妻に忍耐をして呉れるやうに願ふ以外に出来なかつた。それがかれ自身には缺けてゐるやうに思はれた。シャルロッテはミトラと少佐に使者を送つた。ミトラは見つからなかつた。少佐は来た。かれにエドアルトは心中をすつかり打明けて、あらゆる小さな事情も告白した。かうして、シャルロッテは、何が起つたのか、何が状態をこんな不思議に變へたのか、二人の心を昂奮させたかを聞知つた。

かの女は又となくやさしく夫と話した。かの女はオテ、リエにいまのところ煩くしないやうにと頼むほか出来なかつた。エドアルトは妻の價値と愛と理性とを感じた。が、かれの愛著は絶對的にかれを支配してゐた。シャルロッテはかれに希望をあたへ、離婚を承諾することを約束した。かれは信用しなかつた。希望と信仰が交々失はれるほど病んでゐたのであつた。かれはシャルロッテに、少佐に手を許すやうに迫つた。一種の氣違ひじみた不機嫌がかれを掴んでゐた。シャルロッテはかれの心を和らげ、健康を保持するため、その要求通りにした。オテ、リエがエドアルトとの結婚を欲する場合には少佐に手を許さうとも言つた。が、二人の男たちが暫

く一緒に旅をするといふ明らか条件の下にであつた。少佐はその宮廷のために國外の仕事を持つてゐた。エドアルトは一緒に行く約束をした。準備が爲された。人々は、少くともなにか爲ることがあつたので、いくらか心をやすめた。

その間に、人々は、オテ、リエが相變らずだまりつづけながら、殆んど食物も飲物もとらないのに氣づくことが出来た。皆の者がかの女に説きすすめると、かの女は不安に陥つた。で、人々はそれを止めた。我々は大抵、それがその人のために一番よいと思つてゐても人を苦しめたくないといふ弱點を持つてゐないだらうか？ シャルロッテはあらゆる方法を考へぬいた。ついに、かの女は私塾から助手を呼ばうといふ考へを思ひついた。かれはオテ、リエに對して大へん力を持つてゐたし、思ひの外長くかの女が行かないため大へん親切なことを言つて寄越して、まだ返事を貰はないでゐたのであつた。

オテ、リエを驚かさないために、この計畫はかの女のゐる前で話された。かの女は同意しないらしく、考へ込んだ。ついに、決心が熟したらしく、かの女は自分の部屋に急ぎ歸つて、夕刻前に集つた人々に次のやうな書いたものを送つた。

オテ、リエから皆様へ

私の愛する方々、どうして私は自明なことをはつきり言はなくてはならないのでせう。

私は自分の道から踏み外しました。二度と戻る譯にまわりません。敵意のある魔神が、私の上に権力を得て、私が自分自身と再び一致するやうになつても、外部から私を妨げるのです。

エドアルトを諦め、あの方から遠ざからうといふ私の計畫は全く純粹なものでした。私は二度とあの方に會はないやうにと希望しました。が、ちがつたことになつたのです。あの方は御自分の意志に反して私の前にお立ちになりました。あの方と話をしたといふ私の約束を私は恐らくあまり文字通りにとり、解釋してゐたのです。瞬間の感情と良心に従つて、私は沈黙し、皆様の前でも沈黙し、そして、もはや申上ることもありません。熟考の上入る人をも恐らく窮屈に不安に思はせる厳しい宗門の誓を私は偶然に、感情に迫られて、自分の上に引受けました。心が命じるかぎり、それを守らせて下さい。仲介の人を呼ばないで下さい。私が口を開き、精々必要である以上に食事や飲物をとるやうに強ひないで下さい。寛容と忍耐を以て、私にこの期間を過させる助けをして下さい。私は若いし、若さは思ひがけすまた回復致します。私が皆様の前にゐるのを辛抱して下さいませ。皆様の愛によつて私を喜ばせ、お話によつて私をお教へ下さいませ。しかし、私の心は私自身にお委せ下さいませ。

\*

とうに準備されてゐた男たちの出立は、少佐の國外の仕事が延期になつたので中止になつた。エドアルトにとつてはどんなに望ましいことであつたらう。オティリエの手紙によつて新に勵まされ、その慰めにみちた希望をあたへるやうな言葉に再び元氣づけられ、頑固に待つ理由をあたへられて、かれは突然に、遠方には行かないと言ひ出した。「なんて馬鹿げたことだらう！」かれは叫んだ。「無くてはならぬもの、必要なものをわざと、早まつて投げ捨てるなんて！ たとへ失はれさうに見えても、それは恐らくまだ保たれ得るかも知れないのだ。そして、それは何なのだ？ ただ、人間が欲したり、選んだり出来るやうに見えるといふだけのことでないか。かうして、私も時々さういふ愚かな自惚から、避けられない最後の期限に決定的に迫られるのが厭なばかりに、數時間、否、數日も早く友だちから離れたりしたものだ。こんどはしかし、私は止つてゐる。どうして遠ざからねばならないことがあらう。オティリエはもう私から遠ざかつてはゐないだらうか。あの人の手をつかみ、あの人を私の胸におしつけようなんて思ひも寄らない。それを考へることさへ許されないのだ。私は身慄ひがする。あの人は私から去つたのではなくて、私の上に高まつて行つてしまつたのだ。」

かうして、かれは、その欲するまま、せずには居れないままに止つてゐた。が、かの女と一緒にゐる時の快さには比ぶべきものはなかつた。かの女にもまたおなじ感情がのこつてゐた。かの女もまたこの至福の必然性から逃れることは出来なかつた。相變らず、かれらは相互に、



言葉に盡せない、ほとんど魔法的な牽引力をはたらかせてゐた。かれらは一つの屋根の下に住んでゐた。が、他の事にたづさはつたり、人々にあちこちに引廻されたりしながら、直接お互のことを考へないでゐても、二人は互に近寄つた。一つの廣間にゐると、ながく経たないうちに、二人は寄添うて立ち、坐つてゐた。すぐ近くにゐるといふことだけがかれらの心をやすらかにし、すつかり安らかにすることが出来た。そして、この近くにゐるだけで十分であつた。一瞥も、一語も、身振りも、接觸も要らなかつた。ただ、純粹に共に居るだけでよかつた。そのとき、かれらは二人の人間ではなく、自己と世界に満ち足りて、無意識の完全な快感に浸つてゐる一人の人間に過ぎなかつた。實際、二人のうちの一人を住居のいちばん端に堅く縛りつけてゐたにしても、他の一人は次第に、自然に、計畫なしに動いて行つたであらう。人生は、かれらが共に居てはじめてその解決を見出す謎であつた。

オテ、リエはあくまで朗らかで、落着いてゐた。そのため、人々のかの女のことはずつかり安心することが出来た。かの女は皆の集りからも殆んどはなれなかつた。ただ、食事は獨りでさせて呉れるやうに要求した。ナンニイ以外の者は給仕をしなかつた。

各人に普通起ることは、人の信する以上に繰返されるものである。その性質がそれに最も近い決定をあたへるからである。性格、個性、愛著、傾向、場所、環境、習慣は共に一つの全體を形成し、その中を各人は、水や空氣の中のやうに泳ぎ、その中でだけ心地よく安樂なのであ

る。かうして、我々は、その變り易さを大へん非難される人々が何年も経つて驚くほど變らず、内外の無限の刺激を受けたあとでも變らないでゐるのを發見する。

そのやうに、我々の人物の日々の共同生活に於ても、殆んどすべてがもとの平行線を再び動いてゐた。相變らずオテ、リエは黙つていろんな愛想のよい仕種で親切な性質をみせてゐた。さうして各自がそれぞれの流儀でやつてゐた。このやうにして、この家庭的な世界は以前の生活の映像に見えた。すべてがまだもとのままであるかのやうな妄想も許された。

長さに於てあの春の日々に似た秋の日々は、丁度同じ時間に一同を戶外から家へ呼び戻した。この季節特有の果實や花の裝飾は、これがあの最初の春の秋であるかのやうに信じさせた。中間の時間は忘却の中に落ちた。いまや、あの最初の日々にも蒔いた花が咲き匂ひ、あの頃は花の咲いてゐるのが見られた樹々にいまや果實がみのつてゐたからである。

少佐は行つたり來たりした。ミトラも時々見えた。夕のつどひは大抵規則的であつた。エドアルトがいつも本を読んだ。前よりも生き生きとして、感情に溢れ、上手で、もしさう言へるなら、朗らかでさへあつた。まるで、楽しさと感情によつてオテ、リエの凝結に再び活氣を入れ、その沈黙を再び解かうとするかのやうに見えた。かれは以前と同様に、かの女が本を覗けるやうに坐つた。實際かれは、かの女が覗かないでゐると、かの女が眼でかれの言葉について來るのが確かでなかつたりすると、不安になり、氣が散つてしまつた。

中間の時期のあらゆる不愉快なわづらはしい感情は消えてしまつてゐた。誰も他に含むところにはやなかつた。あらゆる種類の苦々しさは消え失せてゐた。少佐はヴァイオリンでシャルロットのピアノの伴奏をした。同時に、エドアルトの笛がオティリエの絃楽器の演奏と以前のやうに再び調子が合つた。かうして、人々はエドアルトの誕生日に近づいた。その祝祭に一年前には達してゐなかつたのである。それはこんどは、お祭騒ぎをせず静かに親しく氣持よく祝はれることになつた。人々はなかに暗黙の裡に、なかば言葉に出して、それに一致したのであつた。が、この時期が近づくにつれて、オティリエの態度には嚴かなものが増していつた。それを人々はこれまで氣づくといふより感じてゐた。かの女は庭で時折花を検査するやうに見えた。かの女は園丁に、あらゆる種類の夏の植物をいたはるやうに指圖し、とくに、丁度今年になつて、はみ出るほど澤山花の咲いた翠菊の側に足を止めるやうであつた。

## 第十八章

皆の者がしかし静かな注意で觀察してゐた最も著しいことは、オティリエが靴をはじめて開けて、一着分ではあるが、完全な衣裳一揃に十分にいろいろなものをその中から選び出して、裁斷したことであつた。かの女は残りはナンニイに手傳はせてまた入れようとしたが、殆んどそれが出来ないくらゐであつた。靴は一部分はもう引出したにもかかはらず溢れるやうに一杯であつた。若い物の欲しい娘は見飽きることがなかつた。とくに、衣裳の細かな部分もすつかり揃つてゐたからであつた。靴、靴下、格言入りの靴下止め、手袋、その他いろいろな物がまだ残つた。かの女はオティリエに少しでも貰ひたいとねがつた。が、オティリエはそれを拒絶した。しかし、すぐ、箆笥の抽出を引いて、子供に選ばせた。子供はせはしげに不器用に手を突込んで、獲物を持つてすぐ走り出し、他の家族の者にその幸福を告げて見せびらかしに行つた。

ついに、オティリエは全部を注意深くもとに納めることが出来た。かの女はそれから蓋についてゐた隠された仕切りを開いた。そこに、かの女は、エドアルトの小さな紙片や手紙や、以前の散歩のいろんな乾いた花の記念や、戀人の巻髪や、などを隠してゐた。も一つの女はそ

れに加へた。それは父親の肖像であつた。そして全部に鍵をかけてから、金の鎖の華奢な鍵を再び頸にかけて胸に垂らした。

様々な希望がこの間に皆の者の心に起つてゐた。シャルロッテは、オティリエがあの日再び口を開きはじめるものと信じた。かの女はこれまでなにか秘かに忙しさうで、一種の朗らかな自己満足、愛する者のためになにかよい事、樂しませるやうなことを隠してゐる人の顔に漂ふやうな微笑みをみせてゐたからである。オティリエが全く數時間ひどい虚脱状態で過して、姿を現はす時だけ精神力で立ち上つてゐることは誰も知らなかつた。

ミトラーはこの頃いつもより度々姿をみせて、前よりもながく止つてゐた。この頑固な男は、鐵が鍛へらるべきある瞬間があることを知りすぎるほど知つてゐた。オティリエの沈黙と拒絶をかれは自分に好都合に解釋してゐた。それまでまだ離婚には歩を進めてなかつた。かれは、この善良な娘の運命をなにか有利な方法で定めたいと望んでゐた。かれは耳を傾け、讓歩し、諒解を求め、自分流に全く賢明に振舞つた。

が、かれが非常な重大性を置いてゐるやうな事について議論をする機会を見出すや否や、いつもかれは自制してゐることが出来なかつた。かれは多く自分の心の中で生きてゐて、人と一緒にゐるときは、いつも行動しながらかれらに對してゐた。すでに我々が屢々見たやうに、館の人々の間でもひとたびかれの演説がはじまると、無遠慮にころがり出して、人を傷けたり、

治療したり、利益になつたり、害になつたり、全くその時次第であつた。

エドアルトの誕生日の前夜、シャルロッテと少佐は、馬に乗つて出たエドアルトを待ちながら一緒に坐つてゐた。ミトラーは部屋の中を行つたり來たりした。オティリエは自分の部屋にゐて、明日の晴着をひるげて、女中にいろんな指圖をしてゐた。女中はかの女の言ふことをすつかりのみ込んで、暗黙の指圖にも巧みに従つた。

ミトラーは丁度その好きな題目に來てゐた。かれは、子供の教育にも民衆の指導にも、禁令や、禁止の規則や命令ほど不手際な野蠻なものはないと好んで主張するのがつねであつた。「人は生れながら活動的なものぢや。」かれは言つた。「命令することさへ心得てゐれば、人はすぐついで來て、行ひ果します。私個人としては、自分の周圍で過ちや罪などは、それに對立する徳を命じ得るまでは我慢したいと思ひますね。過ちを除いて、その代りになにか正しいものを見ないなどといふよりはですな。人間はそこに行き着くことが出来さへすれば、善事や目的に沿ふことを本當に喜んでするものですよ。が、なにかしなくてはならないために、さうするのであつて、仕事がなく退屈なため企てる馬鹿げた悪戯より以上にそのことを考へてはゐないんです。

子供の教訓で十戒が繰返されるのを一緒に聞くのは私には屢々何て厭なことでせう。第四戒はまだ十分立派な理性的な命令的な戒律です。汝、父と母を敬ふべし。子供がこれを本當に心

に書き込んだら、一日中それを實行せねばなりません。が、さて、第五戒ときた日には、何と言つたらいいんです。汝、殺すべからず。まるで、人間が少しでも他人を殺したがつてゐるかのやうですな。人は憎んだり、怒つたり、早まつたりして、その他のいろんな事の結果、偶々人を殺すことはあります。が、子供に殺人や殺害を禁するなんて野蠻な方法ではないでせうか。もし、これを、他人の生命に氣をつけ、他人に害と思へるものを遠ざけ、身の危険を冒してもこれを救ひ、他人を傷けるときは、己を傷けることを考へよ、とでも言つたら——、これは教養のある理性的な人々の中でも通用する戒律ですよ。そして、これは宗教問答書にも「これは何か」の章に極く僅かばかりしか附加へてないことですがね。

ところで、次は第六戒です。全く忌はしいものです。どうです。豫感する子供の好奇心を危険な神祕に刺激し、その想像力を昂ぶらせて、人が遠ざけたいと思ふものを無理にもたらずやうな奇怪な形像や觀念を起させるんです。そんなものは、教會や教會員の前で喋らせるよりは、秘密裁判にでもかけて勝手に所罰したほうがよっぽどいいですよ。」

この瞬間、オテリリエが入つて来た。「汝、姦淫する勿れ。」ミトラーはつづけた。「何て野卑な、卑猥な言葉でせう。かうでも言ひかへたら、全く別に聞えないでせうか。汝、結婚に對して畏敬を抱くべし。愛し合ふ夫婦を見れば、それを喜び、晴れた日の幸福を分つ如くその幸ひを共に楽しむべし。その關係の曇ることあらば、それを晴らさんと試みよ。かれらを宥め、その

心を和げ、相互の利益を明らかにせんと試みよ。而して、美しき無慾の心を以て、かれらに、あらゆる義務、とくに男と女を解きがたく結びつける義務より如何なる幸福の生ずるかを感じしめて、他の人々の幸福を促進せよ、とね。」

シャルロツテは居たたまらないやうな氣がした。ミトラーが何を何處で喋つてゐるかを辨へないでゐると信じたため、餘計かの女はこの状態が不安であつた。そして、かの女がその話を中断させることの出来ないうちに、すでにかの女は、様子の變つてゐたオテリリエが部屋を出て行くのを見た。

「第七戒はきつとお教し下さいますわね。」シャルロツテは強ひて微笑して言つた。「此の外はみんな止ませう。」ミトラーは答へた。「他のものの基礎になるこれだけを救ひさへすれば。」恐ろしい叫びを上げて、ナンニイが駆け込んで来た。「あの方が死にます。お嬢様が死にます。来て下さいー 来て下さいー！」

オテリリエがよろめきながら自分の部屋に戻つて行つた時、明日の晴着が數脚の椅子の上につきかりひろげられてゐた。そして、それを眺めたり歎賞したりしながら行つたり來たりしてゐた女中は、歡呼しながら叫んだ。「まあ御覽なさい、お嬢様。お嬢様にまつたくふさはしい花嫁の衣裳ですわ。」

オテリリエはこの言葉を聞いて、ソファに倒れた。ナンニイは女主人が蒼ざめて、硬くなつて

ゐるのを見た。かの女はシャルロッテのもとに走つた。皆が来た。館の醫者が急いでやつて来た。一種の虚脱にすぎないやうに思はれた。かれは濃い肉汁を少し持つて來させた。オティリエは嫌つてそれを退けた。口に茶碗を近づけると、ほとんど痙攣しさうだつた。醫者はまじめに性急に、事情が暗示するままに訊ねた。「今日はオティリエさんは何かたべられましたか？」女中は口籠つた。かれは問ひを繰返した。女中は、オティリエがなにも食べなかつたことを白狀した。

ナンニイは當然以上にびくびくしてゐるやうであつた。醫者はかの女を次の部屋に連れ込んだ。シャルロッテがつづいた。女中は膝まづいて、オティリエがもう永いこと何も食べないも同様であることを白狀した。オティリエに迫られて、かの女はその代りに食事をとり、女主人の頼むやうな脅すやうな身振りのためにそれを黙つてゐたのであつた。そして又かの女は無邪氣に、大へん美味しかつたものですから、と附加へた。

少佐とミトラが來た。かれらはシャルロッテが醫者をたすけて立働いてゐるのを見た。蒼白い天使のやうな少女は、意識はあるらしい様子で、ソフアの隅に腰掛けてゐた。人々はかの女に横になるやうにねがつた。かの女はそれを拒んだ。が、小さな靴を持つて來て呉れるやうに眼配せした。かの女はその上に足を置いて、なかば横になつたやうな樂な姿勢になつた。かの女はお別れをしようとするやうに見えた。その身振りはまはりに立つてゐる人たちにこよなく

優しい愛著をしめし、愛と感謝と謝罪と心からのさよならを言つてゐた。

エドアルトは馬から下りて、その有様をきき、部屋に駆け込み、オティリエの傍に身を投げ伏して、その手をつかみ、だまつて涙でそれを濡らした。ながい間かれはさうしてゐた。ついに、かれは叫んだ。「あなたの聲をもちど聞かせて下さい。一言物をいつて私のために生き返つて下さい。いいよ、いいよ！ 私もあるあなたについて行く。彼處で、私たちはちがつた言葉で話さうね。」

かの女は強くかれの手を握つて、生命に充ち、愛にみちて、かれを見つめた。そして、深い息をし、天上のもののやうにだまつて唇を動かしてから、「生きるに私に約束して下さい」と、愛らしく優しい努力をして叫んだ。が、すぐ、かの女は崩折れてしまつた。「約束するよ！」かれは答へて叫んだ。が、それはあとを追ふ言葉に過ぎなかつた。かの女はもう亡くなつてゐた。

涙にみちた一夜の後、愛する遺骸を埋葬する心配はシャルロッテにまかされた。少佐とミトラがかの女に手傳つた。エドアルトの状態は痛ましいものであつた。絶望から身を起して、いくらかでも考へることが出來ると、かれは、オティリエは館からはこび出してはいけない、かしづかれ、看護され、生きてゐる者としてあつかはれねばならない、かの女は死んでゐるのではないのだ、死んでゐるはずはないからだ、と主張した。人々は、少くともかれの禁じたこと

は取止める範圍でその意志に従つた。かれはかの女を見ようとは要求しなかつた。

なほ一つの驚きと心配が皆をつかみ、煩はした。醫者にはげしく叱られ、脅迫で白狀を強ひられ、白狀のあとで非難を浴せられたナンニイが逃亡した。ながく探したあとで、やつとかの女は見つかつた。が、失神してゐるやうに思はれた。両親がかの女を引取つた。最上の手だても効果がないやうにみえた。かの女はまた逃げようとしたので、人々は監禁しておかねばならなかつた。

段々とエドアルトをはげしい絶望から引きはなすことが出来た。が、かれは不幸になるばかりであつた。その生涯の幸福を永久に失つてしまつたことがかれには明瞭に、確かになつたからである。人々は思ひ切つてかれに、オティリエはあの禮拜堂に葬られても、やはり生きてゐる人たちの間にとどまるのであり、なつかしい静かな住居なしにはまたゐられないだらうと説いた。かれの同意を得るのは困難であつた。が、ただ、開いた棺でかの女をはこび出し、禮拜堂の圓天井の下でも必ずガラスの蓋だけで被ひ、常住に燃えるランプが寄進されるといふ條件のみ、かれはついにそれに甘んじた。そして、すべてを諦めたやうにみえた。

愛らしい遺骸はかの女が自分で用意してゐたあの晴着をきせられた。かの女の頭には翠菊の花環がのせられ、それは悲しい星座のやうに豫感にみちて輝いた。棺臺や教會や禮拜堂を飾るために、花園はすつかりその裝飾をうばはれた。まるで冬がもう花壇からあらゆる喜びを根こ

そぎにしたかのやうに、荒れ果てた。早朝かの女は開いた棺で館から持ち出され、さし昇る朝日がいちどその天上のものやうな顔を紅に染めた。供の人々は棺を擔ぐ人たちのまはりに押寄せ、誰も先にも後にもならず、皆がかの女を取圍んで、まだ最後にかの女の居ることをたのしむとした。少年や男や女や、一人として感動しないものはなかつた。かの女を失つたことを最も直接に感じた少女たちは慰めやうがなかつた。

ナンニイは居なかつた。かの女は引止められ、むしろ葬式の日時も祕密にされた。人々は両親の許で庭に面した小部屋にかの女を張番した。が、鐘の音を聞いたとき、かの女はあまりにもすぐに何が起つてゐるかを知つた。番をしてゐた女が行列を見たい好奇心から、かの女を置去りにしたので、かの女は窓から廊下へ抜け出し、戸がみんな閉つてゐたので、其處から屋根裏部屋に行つた。

ちやうど、行列は木の葉を撒き散らした清潔な路を村を通つてうねつてゐた。ナンニイは女主人をはつきりと下に見た。行列に従つてゐた誰よりもはつきりと、完全に、美しく見た。雲か波にはこぼれてゐるやうに、地上をはなれて、かの女は召使の少女を魔くやうに見えた。少女は惑亂し、ふらふらとよろめいて、墜落した。

群衆はけたたましい叫びをあげて、四方に散つた。押合ひ、へし合ひされて、擔いでゐた人は棺臺を下さざるを得なかつた。少女はその近くに横たはつてゐた。四肢がすつかり砕けた

やうに見えた。人々はそれを持ち上げた。そして、偶然か又は特別の攝理から、人々はそれを遺骸の上に寄せかけた。實際、少女は自分でまだ最後の生命の残りをも以て愛する女主人に届かうとするかのやうに見えた。が、そのだらりとした四肢がオティリエの着物に、その力のない指がオティリエの重ねた手に觸れるや否や、少女は跳び上つて、まづ腕と眼を天へ上げ、棺の前に膝まづいて、敬虔に狂喜して女主人を眼をみはつて見上げた。

ついに、かの女は靈感をうけたやうに跳び上り、神聖な歡喜を以て叫んだ。「さうです。あの方は私をお許しになりました。誰も、私自身も許すことの出来なかつたことを、神様は、あの方の眼差と身振りと口をとほして私にお許し下さいました。あの方はいままた靜かに和やかに寝てゐられます。が、皆様は御覽になつたでせう。あの方が身を起して、兩手を開き、私を祝福し、親しげに私を御覽になつたのを！ 皆様はみんなお聞きになりました。皆様は、あの方が私に、お前は許されてゐる、と仰しやつた證人です。——私はもう皆様のあひだで人殺しではありません。あの方は私をお許しになりました。神様は私をお許し下さいました。誰ももう私に非難を加へることは出来ません。」

群衆は押寄せて來た。かれらは驚き、聞き耳を立て、あちこちを見廻し、殆んどたれもどうしたらいゝか分らなかつた。「さあ、あの方を安息の場所にお連れ下さい！」少女は言つた。

「あの方は御自分のなさるべき事をなし、又お惱みになりました。そして、もう私共の間にお

住みになることは出来ません。」棺臺は動いて行つた。ナンニイが最初に従つた。一同は教會に、禮拜堂に着いた。

かうして、いまや、オティリエの棺は、頭の方に子供の棺を、足に小さな靴を置いて、厚い柵の箱の中に納められた。又、ガラスの蓋の下に全く愛らしく横たはつてゐる遺骸を當分護るために番人の女が一人世話された。が、ナンニイはこの役目を他の人にとらせやうとしなかつた。かの女は一人で、仲間なしに居て、はじめて點されたランプを勤勉に守つてゐたいと思つた。この事をかの女は非常に熱心に頑固に要求したので、皆は心配されてゐた一層大きな精神病を豫防するためその願ひを容れた。

が、かの女は獨りで居たのは長くはなかつた。夜になると、すぐ、漂ふ灯が完全な権利を行使して、明るい光を擴げたとき、戸が開いた。建築家が禮拜堂に入つて來た。その敬虔に裝飾された壁は、なごやかな光をうけて、かつてかれが信じてゐることが出来たよりも一層古風に豫感にみちてかれに迫つた。

ナンニイは棺の一方の側に坐つてゐた。かの女はすぐかれを認めた。が、だまつて、かの女は蒼ざめた女主人を指し示した。かうして、かれは他の側に立つた。青年の力と優雅さの中に、又、自分自身を顧みさせられ、硬くなり、考へに沈んで、腕を垂れ、兩手を重ねて同情深くもみ合せ、頭と眼差を逝ける者の方へ向けながら。

すでに一度、かれはベリザール<sup>(24)</sup>の前にさうして立つてゐた。われ知らず、かれはいま同じ姿勢に落ちた。そして、それはこんどもどんなに自然であつたことだらう。此處でもまた評價しがたく貴いものがその高所から墜落したのだ。彼處で、一人の男の勇敢と慧智と権力と地位と財産が取り返すすべもなく失はれたのが悲しまれ、決定的な瞬間に國民や王侯に無くてはならぬ特性が尊ばれず、むしろ投げ捨て、突落されたとすれば、此處では、自然によつてその内容豊かな深みから短い間呼び出された諸々の他の静かな徳が、再び自然の冷淡な手によつてすぐに滅されてしまつたのであつた。稀に見る美しい愛すべき徳であり、その平和な影響をこの乏しい世界がすべての時代に楽しい満足をもて抱き、それを失ふことを憧憬に燃えて悲しむものであつた。

青年は黙つてゐた。少女も暫く黙つてゐた。が、青年が屢々眼から涙を流すのを見、苦痛の中にすつかり身も溶けてしまふやうに見えたとき、少女は眞實と力と、好意と確實さを以て話しかけたので、かれはその流れるやうな辯舌に驚き、氣を取直すことができた。美しい女友達有一段と高い領域に生き働く姿がかれの眼の前にただようた。涙は乾き、苦痛は和らいだ。膝まづいてかれはオテ、リエに、又、心からの握手をしてナンニイに別れを告げた。夜の中にかれは馬で其處を去つて、他には誰にも會はなかつた。

外科醫は夜ちゆう、少女の氣づかないやうに、教會に止つてゐた。そして、朝になつてかの

女を訪れたとき、かの女が朗らかで元氣でゐるのを見た。かれはいろんな常規を外れたやうなことの起るのを覺悟してゐた。少女がオテ、リエとの夜の會話やその他そんな風な幻覺を話すだらうと考へてゐた。が、かの女は自然で、落着いてゐて、完全に正氣を保つてゐた。かの女はすべての以前の時やすべての状況をすつかり記憶してゐた。そして、その話の中で眞實と現實の普通の軌道を外れたものといつては、あの葬式の時の出來事以外にはなかつた。それをかの女は喜んで度々、オテ、リエが身を起し、かの女を祝福して許し、永遠にかの女を安心させたことを繰返し物語つた。

いつまでも美しい、死んでゐるといふより眠つてゐるやうなオテ、リエの状態は澤山の人たちを引寄せた。土地の住民や近隣の人々がかの女をまだ見たいと思ひ、誰もがよろこんでナンニイの口からあの信すべからざることを聞きたがつた。ある者はそれを嘲り、大抵の人はそれを疑ひ、少數の人々はそれを信するやうな風をした。

眞實の満足の得られないあらゆる慾求は信仰に行くのを餘儀なくされる。すべての人の眼前で碎けたナンニイは敬虔な身體の接觸で健康にかへつた。どうして似たやうな幸福が他の者にもあたへられないことがあらうか。優しい母親たちがまづ何らかの病氣に取りつかれてゐる子供たちを祕かに連れて來た。かの女たちは突然に回復するのを見たやうに思つた。信頼は増した。ついには、老人や弱い者で此處に、元氣づけられ病氣を軽減されるために來ないものは



なかつた。押寄せる人は多くなつた。人々は禮拜堂を、實際禮拜時間以外には教會も閉めねばならなくなつた。

エドアルトはあへて再び亡き人のもとへ行かうとはしなかつた。かれはただぼんやりと生きてゐた。もはや涙も涸れ、苦しむ力もないやうに見えた。會話に加つたり、食物や飲物をとることも日まじに減つた。ただ、勿論本當の豫言者ではなかつたあのコップから少しばかり氣づけを囁るだけのやうに見えた。かれは相變らず絡み合せた名前の頭文字を眺めるのが好きであつた。その時のかれの眞面目に澄んだ眼は、いまでもまだ結合を希望してゐることを示してゐるやうであつた。幸福な者はあらゆる附隨の事情にも恵まれ、あらゆる偶然にも持ち上げられるやうに見えるものであるが、不幸な者は最も小さな出來事でも一緒になつて苦しめ傷けたがるものである。といふのは、ある日、エドアルトがその愛するコップを口に近づけたとき、かれは驚いてそれを引き放した。それは同じ物であつて、しかも同一物ではなかつた。小さな目印が失くなつてゐた。従僕が問ひ詰められた。かれは白狀せずには居れなかつた。本物のコップは暫く前にこはれて、これもエドアルトの若い頃できた同じやうな物がすり換へられてゐたのであつた。エドアルトは怒ることは出來なかつた。かれの運命は事實によつて語られてゐた。どうして比喩が心を動かすことがあらう。が、このことは深くかれの心を押つけた。飲酒もそれ以後かれには嫌なものに思へた。かれはわざと食事や會話を遠ざかるやうに見えた。

が、時々、ある不安がかれを襲つた。かれは再び、なにか食べたいと言ひ、話しはじめた。「あゝ」かれはある時、その側から殆んどはなれることになかつた少佐に言つた。「僕の努力の全てが何時もただ模倣に過ぎず、誤つた骨折に止るなんて、何と僕は不幸なんだらう。あの人の至福であつたものが僕には苦痛になる。が、その至福至幸のために僕はこの苦痛を引き受けねばならなかつたのだ。僕はあの人の後を追ひ、この道を後を追つて行かねばならない。が、僕の本性と、それにあの約束が僕を引き止める。模倣できないものを模倣するなんて恐しい任務だね。ねえ君、僕ばつくづく、あらゆる事に、殉教者になるにも天才が必要だといふことを感じるよ。」

この希望のない状態に於て、エドアルトの近親の人々が暫くの間彼方此方と動き廻つてゐた、夫婦としての、友人としての、醫者としての骨折をどうして述べる必要があらう。ついに、人々がかれが死んでゐるのを發見した。ミトラがまづこの悲しい發見をした。かれは醫者を呼んで、いつもの沈着さで、死に逝いた者を發見した状況を精密に觀察した。シャルロツテがとんで來た。自殺の疑ひがかの女に起つた。許すべからざる不注意に對してかの女は自分や他の人々を訴へようとした。が、醫者は自然的な、ミトラは道德的な根據からすぐにかの女にその反對を信じさせることが出來た。全く明らかに、エドアルトはその最後に不意に襲はれたのであつた。かれは、これまで注意深く隠すのがつねであつたもの、オテリエから自分に残さ

れたものを、ある静かな瞬間、小箱や紙入れから出して自分の前に擴げてみてゐた。卷髪や、幸福な時摘まれた花や、妻が偶然に胸騒ぎしながらかれに渡したあの最初の手紙をはじめオテリエが書き送つた手紙などであつた。このすべてを、かれはわざと偶然の發見に委せる譯はなかつた。かうして、暫く前までは無限の動搖に興奮してゐた心も妨げられることのない安靜の中に横たはつた。そして、聖女<sup>(25)</sup>を想ひながらかれは永眠したのであるから、人はかれをも幸福と呼ぶことが出来た。シャルロットはかれにオテリエの傍の場所をあたへ、たれもこれ以上の圓天井の下に葬られることのないやうに定めた。この條件の下にかの女は、教會や學校や、牧師や教師に多額の寄進をした。

かうして、愛し合へる者は相並んでやすらうてゐる。平和はかれらの住所の上にただよひ、朗らかな、相似た天使たちの畫が圓天井から見下してゐる。そして、かれらがいつか再び共に眼をさますとき、それは何といふ懐しい瞬間であらう。

## 譯註

## 第一部

- 1、原文には會話に括弧は全然ないのであるが、讀みづらいため邦譯では全部括弧を附すこととする。
- 2、ミトラーは此處では人名であるが、普通名詞の場合は、仲介者、調停者等の意を有す。
- 3、ギリシャ神話の美少年で、水鏡に映る己が姿の美しさに惹かれて投身し溺死するに到る。
- 4、親和力は原語を分解すれば、選擇による類縁の意となる。
- 5、このオテリエ到着場面の數行の簡譯にして見事な描寫は諸家の絶讚する所である。
- 6、アナクの子供は、舊約、申命記第九章「その民は汝が知るところのアナクの子孫にして、大きくかつ身長<sup>たけ</sup>たかし。」に出る。ここでは大男の兵士達を言ふ。
- 7、エドアルトの心中に起つたこの變な錯誤の夜の章は第一部の最初の頂點ともいふべきであるが、あとでシャルロットにできた子供の眼がオテリエに似て、顔形が大尉に似てゐたといふ記述は第二部のナニイの蘇生などとともに諸評家の間に科學的問題を起してゐる。この取扱ひ方については解説を参照されたし。
- 8、伯爵の戀人である男爵夫人を作者は簡單にかう呼んでゐる。

- 9、一〇八四年聖ブルノオによつて佛蘭西シャルトルの荒野に創始された修道僧團。沈黙を守り肉食を避く。祈禱の外、科学研究や手仕事に従事し、その養樹園にて製したる混成酒はシャルトルズの名によつて美味豊醇を以て鳴る。
- 10、ホーマーを指す。

## 第二部

- 1、フィレモンとパウチスは傳説上のフリヂヤ人の老夫婦、ツォイスとヘルメスが人間に化けて旅をしたとき好遇したので、不親切な隣人達が洪水のため亡されたとき、その小屋を立派な御堂に化してもらつた。又、死後もはなれず暮すやう同時に二本の樹に變へられた。『ファウスト』第二部第五幕にもゲーテはこの老夫婦をもちひてゐる。
- 2、ルチアネの叔母とあるがシャルロットの叔母で、ルチアネには大叔母に當る。作者は時々叔母として大叔母としたりしてゐる。
- 3、小亞細亞のカリアの王妃。紀元前四世紀頃の人で、良人マウゾルス死すや、世の不思議の一つと言はれるその墓をたて、更にその愛を示すために良人の灰に高價な飲料をまぜてのんだといふ。
- 4、北方ドイツ民族にて六世紀頃北イタリを征服す。その地を今もロンバルデイイと言ふ。
- 5、傳説上の婦人。良人の死を悼みてその墓を守るうち、死刑囚の死屍を守る兵士と戀に落ち、兵士が見張りをしてゐた死屍を盜まれて所刑されんとするや、これを救ふため良人の死屍を提供す。ペトロニウスにより初めて西歐文學に紹介さる。

- 6、東方の神話に出てくる靈鳥。アラビアに棲み、五百年毎にエヂプトを訪れる。全身眞紅で金色の羽毛に蔽はる。五百年生きると、香料を集めて焚死堆をつくり自ら火葬して灰となり、その灰の中から再び新しく生れ出て、永久に死なぬといふ。
- 7、オランダの畫家（一五九九—一六四一）
- 8、東ローマ帝國のユステイニアン皇帝の時の有名な將軍。武勳高き將軍なりしも、後、皇帝の羨望を買ひ、謀叛の罪を以て追放され、盲目の乞食となつて諸所をさまよひしといふ。多く詩人畫家の題材となる。
- 9、フランスの畫家（一五九四—一六六五）
- 10、アハスヴェルスはベルシヤ王、エステルはその妃。舊約のエステル書参照。
- 11、ギリシヤの最高神。
- 12、オランダの風俗畫家（一六〇八—一六八一）
- 13、銅版畫家、一七一五年ヘッセンに生れ、一八〇八年巴里に死す。
- 14、キリスト誕生の圖。
- 15、ドイツの大自然科學者（一七六九—一八五九）
- 16、キリストの使徒。
- 17、ルカ傳第二章第二九節「主よ、今こそ御言に循ひて、僕を安らかに逝かしめ給ふなれ。わが眼ははや主の救を見たり、云々」をもちつたもの。
- 18、一貫した筋なく、互に聯關なきバラバラの場面から成り、各場面がそれぞれ別の抽出から引き出され

たる如き喜劇をいふ。

19、地下の鏡物を感じする人間の能力と振子運動を起す能力とに聯關あるものとする當時の自然哲學者  
シエリング等の説を用ひしもの。

20、ミルトンの詩の題目 II Penseroso より來るものにて、『思ひに沈む人』『愁ひに沈む人』等の意。畫  
題としてよく選ばれる。

21、少佐とはもとの大尉が昇進したもの。

22、Dimon (魔神) は悪魔、鬼神等とも譯されるが、Teufel (悪魔) とは別個のもので、ゲータ特有の用  
語として、人力で如何ともしがたい根源的な悪魔的な力を、ひと度これに内心を襲はれると阻止する術  
もなくその命ずるままに行ふほかない一つの力を指すものである。ここでは勿論愛の魔神をいふ。

23、原文には……des reinen Zusammenseins (純粹共存) とあつて、宗教的法悦にまで達した愛の絶對  
境を示す言葉といふべく、最高の救ひの境地である。

24、第二部第五章註8参照。

25、ここでついにゲータはオティリエに「聖女」といふ稱號をあたへてゐる。

親和力

定價一圓八十錢

検印

譯者 澤西健

發行者 福岡清  
東京市神田區小川町三ノ八

印刷者 宮本印刷所  
綾部喜久二  
東京市神田區小川町一ノ二

發行者 株式會社白水社  
東京市神田區小川町三ノ八  
電話東京三三二二八  
電話神田(25)三五九八

印刷 年3月2日  
發行 年3月7日